

第6節 第33次調査（平成27年度、PSK11）

（1）概要

33次調査においては、微高地1東部（開法寺東方地区）の建物群における中心的な大型建物の全容把握に主眼を置いた。その対象となる大型建物は、31次調査SB2022.2023.2024、32次調査32-1Tr・SB2011であり、31次調査SB2022.2023.2024の周囲を33-2トレンチ、32次調査32-1Tr・SB2011の西側を33-1トレンチとして、主に二つの調査区を設定し、これらの建物主軸及び規模等の確認を行った。

調査の結果、33-2 Tr・2022.2023.2024は、東西方位をもつ廻付の大型建物であり、8世紀後葉から11世紀前葉にかけて、同一地点で建替えられたことが明らかになった。現時点で具体的な性格・機能を明らかにできないが、微高地1東部（開法寺東方地区）の建物群の中でも、中心的なものの一つであると考えられる。

33-1Tr・SB2011は、南北方位をもつ梁行3間、桁行3間の大型建物であり、9世紀中葉から10世紀前葉の一時期にのみ営まれている。33-2Tr・2022.2023.2024のような継続性をうかがうことはできない。

また、本次調査においては、真北を基準とする7世紀後葉から8世紀初頭の建物群の様相も明らかになっている。33-1Tr・SB2010は、32次調査32-1トレンチの成果を組み合わせることにより、梁行3間、桁行4間以上の南北棟に復元された。また、SB2010の西側には、梁行をそろえた南北棟のSB2015が検出された。SB2015は、南北樋（板棚）SA2012と一緒に営まれ、同樋を介してSB2016と連結されるなど、真北を基準とした当該期の建物配置の規格性を示すものと考えられる。

以上のように、本次調査においては、微高地1東部（開法寺東方地区）の建物群の平面配置や継続性などについて大きな成果を得た。

現地調査は、平成27年10月より開始し、平成28年3月に終了し、調査面積 680 m²である。調査途中の平成28年2月13日、14日に現地説明会を開催し、約200名の参加をみた。

（2）33-1トレンチの層序

層序（図165）

現況からみて、33-1トレンチは微高地1の頂部から北西緩斜面に相当すると考えられる。調査前は水田として利用されており、0層は現在の耕作土である。1層は現在の耕作土の基盤層の灰色粘土層であり、鉄分の沈着が著しい。2a層とした灰色シルトは、分級が悪い層相からみて耕作土と考えられる。包含される遺物は古代期を中心とするが、周辺における既往の調査成果からみて、中世後半から近世の所産である可能性が高い。一方で2b層は、調査区北西部のみに分布するもので、層相は2a層と同じであるが顕著なグライ化が認められるとともに、粒度は粘土に近い。中世後半と考えられるSD1001.1002は本層上面から穿たれていることからみて、中世後半以前に形成された耕作土層と考えられる。

3層は焼土・炭化物をやや多く含む黒褐色シルトから粘土である。2b層が分布する調査区北西部以外の全域にみられ、古代から12世紀までの遺物を多く含んでいる。下面に凹凸が顕著にみられることや、焼土・炭化物を多く交える点からみて自然堆積層とは考えられないため、12世紀頃の微高地1上面の削平等に伴う擾拌土壤と考えられる。

古代以降の基盤層は黄褐色シルト～極細砂である。箇所によって粒径が異なるが、調査区全域で確認されるもので、本層上面は濾構検出面である。微高地1と鼓岡神社が乗る丘陵との間の低地帯へ向かって、南東から北西へ緩やかに傾斜している。

各層からの出土遺物（図166～171）

1～16は、1～2層出土遺物である。須恵器杯（1）の見込みには「上□」の墨書が確認できる。4・5は猿投産の灰釉陶器碗であり、9世紀後半から10世紀初頭の資料とみられる。6は美濃産の灰釉陶器皿であり、10世紀代の資料と考えられる。土師質土器杯（7）の内面には煤状の物質が付着することから、灯明皿に転用されていると考えられる。10は須恵器風字硯。軒平瓦（11）はKH203型式とみられ、開法寺で確認される資料である。15・16は白色凝灰岩片である。

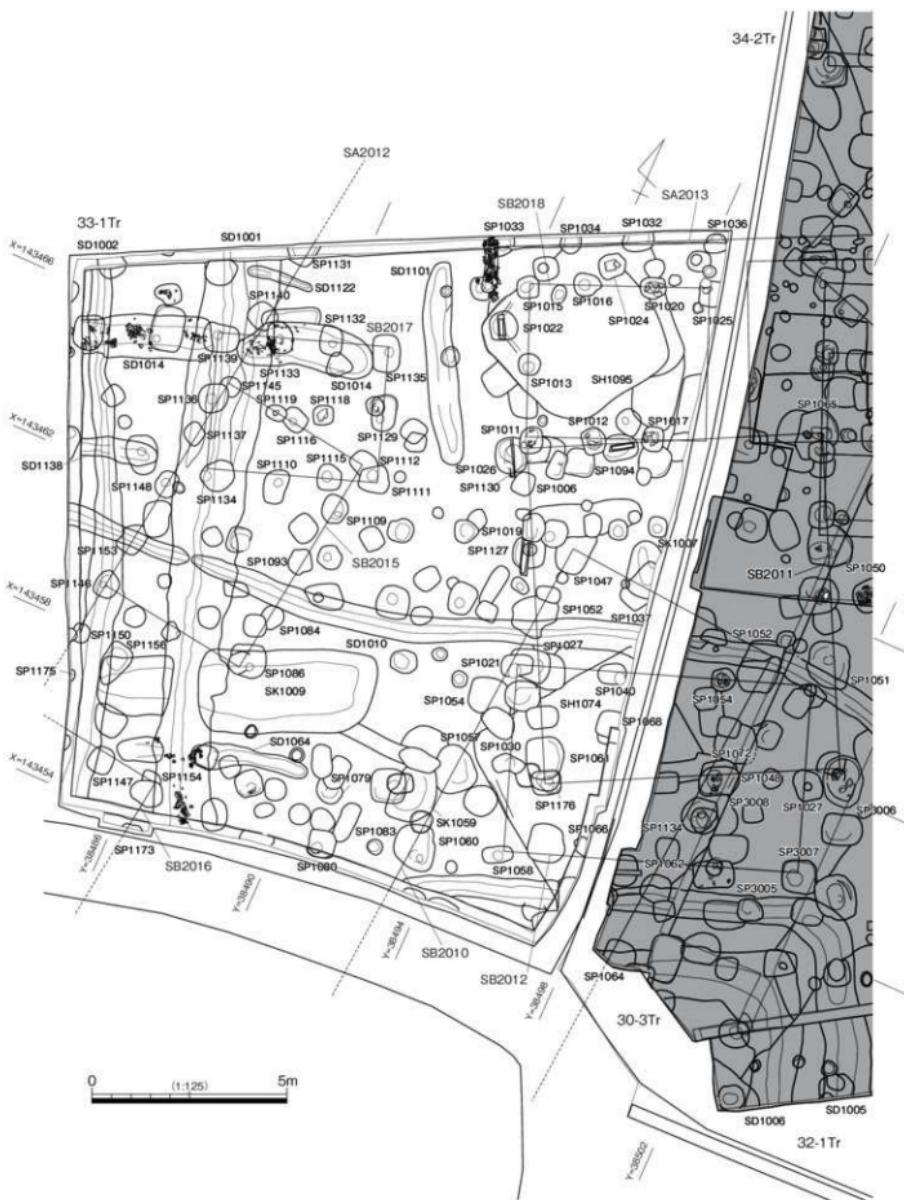


図 164 33 次調査区遺構平面図

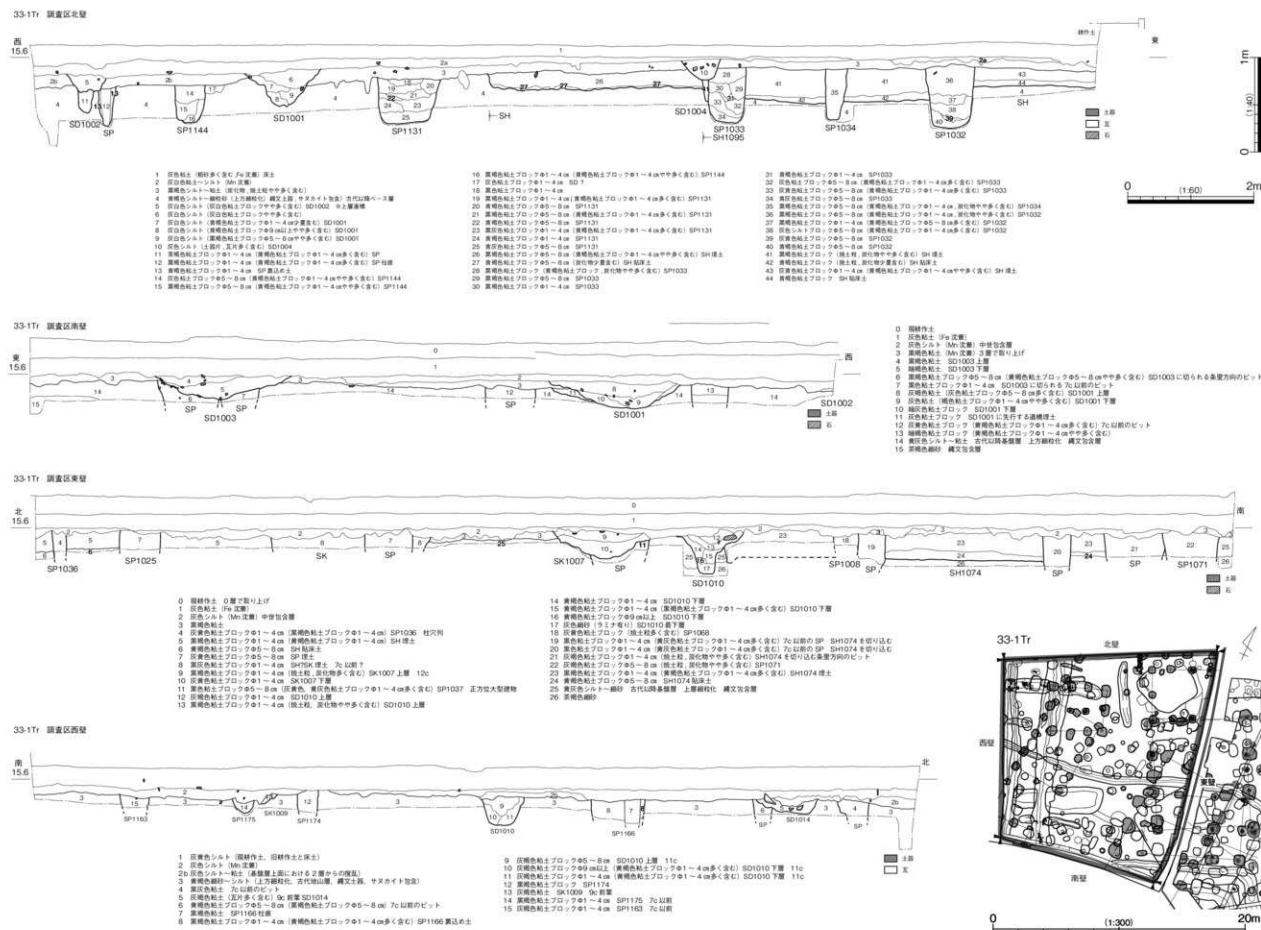


図 165 33 次調査区各駆断面図

17～128は、3層からの出土遺物である。須恵器蓋（18）の内面には墨書が確認されるが、腹臍として字義は不明となる。須恵器杯（33）の内外面には墨書があり、外面は「工」、内面は字義不明。須恵器鉢（45）は篠産の10世紀後半の資料と考えられる。須恵器椀（46）は外面に回転ミガキが認められる西村産の12世紀の資料。47は須恵器風字硯の小片。48～62は須恵器転用硯である。56は須恵器蓋の内面を利用するもので、磨滅痕とともに赤色顔料が確認される。

63～95は畿内系土師器であり、7世紀後葉から8世紀中葉の資料と考えられる。96は両黒の黒色土器鉢であり、編年の位置付けは不明とせざるを得ない。97は二彩陶器の椀とみられる小片であり、三彩の可能性もある。98は防長（長門）産の緑釉陶器椀であり、9世紀後半の資料と考えられる。99は美濃、あるいは近江産の緑釉陶器椀であり、10世紀中葉から後葉の資料とみられる。土師器壺の胴部片（102, 103）の外面には墨書が確認できるが、字義は不明とせざるを得ない。104～108は製塙土器片、104, 105, 108は6世紀後葉から7世紀前葉、106, 107は7世紀中葉から8世紀前葉の資料と考えられる。109, 110は土師器飯蛸壺。111は輪羽口である。

軒丸瓦（112）、軒平瓦（113）は、小片のため型式を特定できない資料である。120～122は白色凝灰岩片。119は花崗岩製の砥石である。123は鉄製刀子の茎部。鉄器片（124）はやや大型であるが鉸具の可能性がある資料である。125は鉄鋸、126は鉄釘である。

129～142は、遺構検出面から出土した資料である。132は須恵器の内面を利用した転用硯。土師器杯（137）は白色の精製素地をもつもので、搬入品の可能性が高い。138はKH106型式、139はKH105型式とみられる軒丸瓦であり、開法寺で確認されている資料である。142は結晶片岩製の剥片であり、表裏に粗い研磨痕、一侧縁に掠切りによる分割痕が確認できる。石器の未成品の可能性が高い。

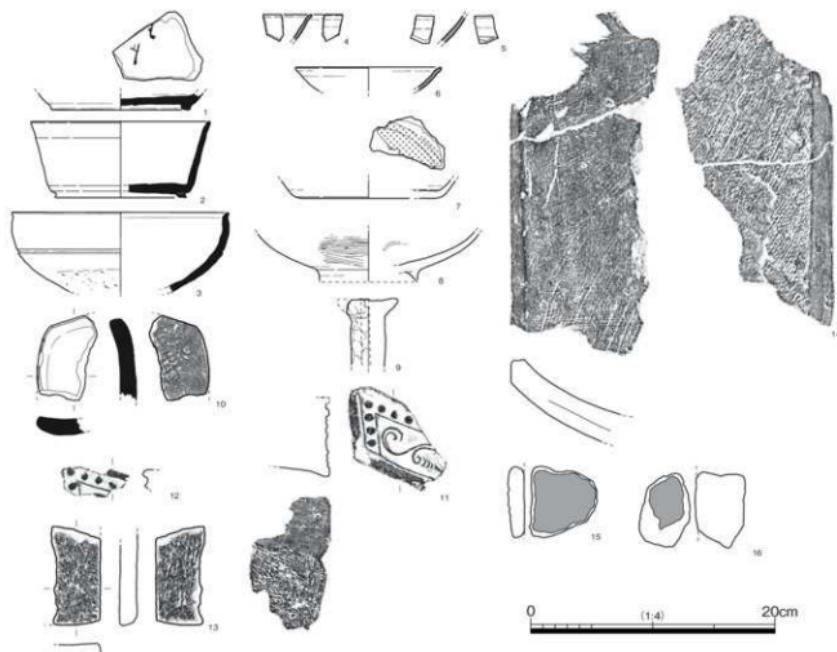


図 166 33-1Tr1.2 層出土遺物

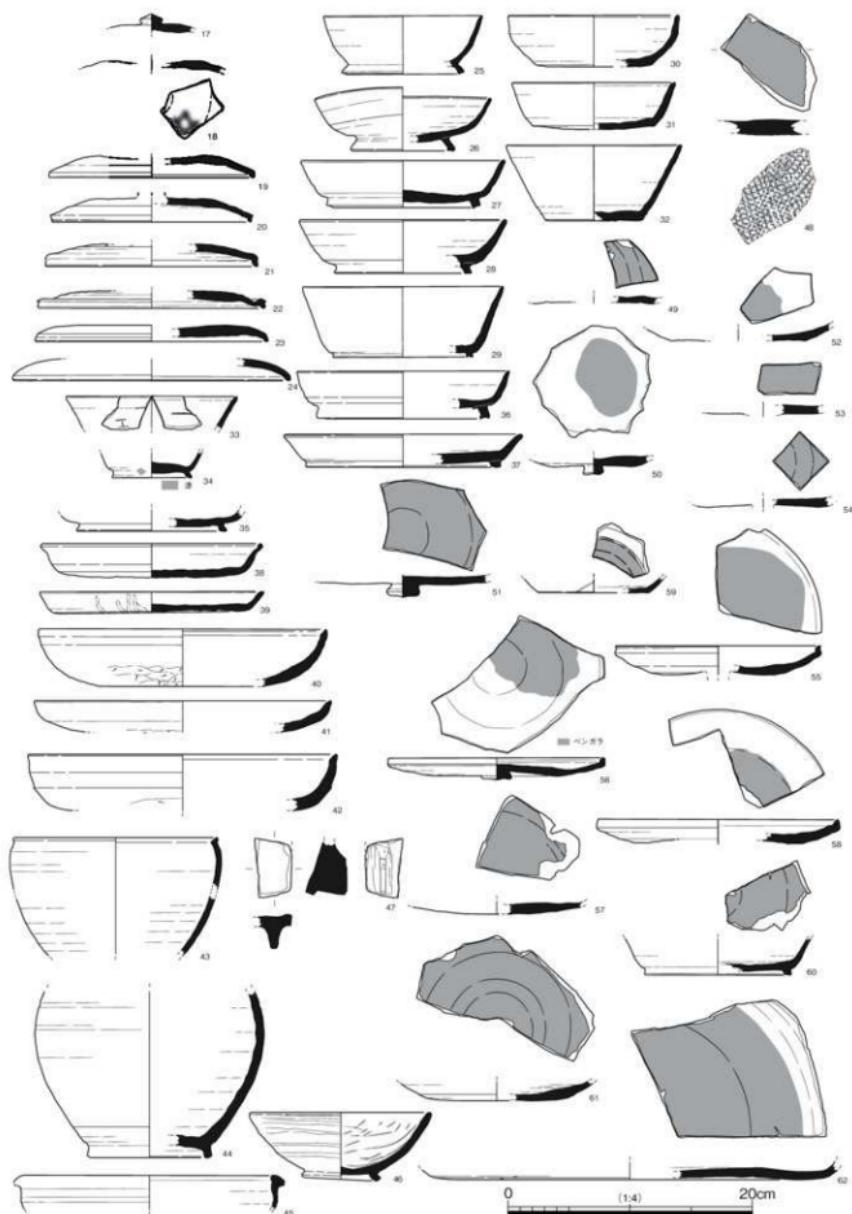


図 167 33-1Tr3 層出土遺物 1

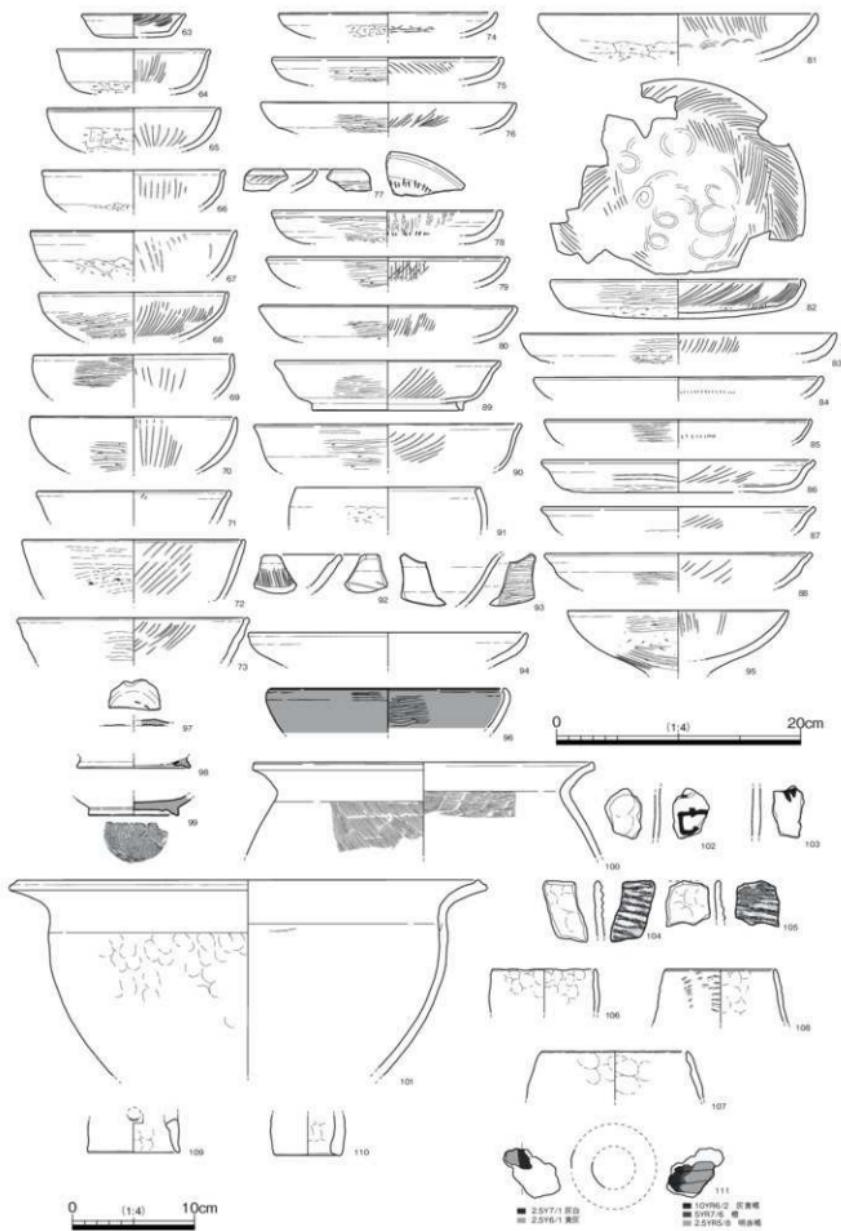


图 168 33-1Tr3 层出土遗物 2

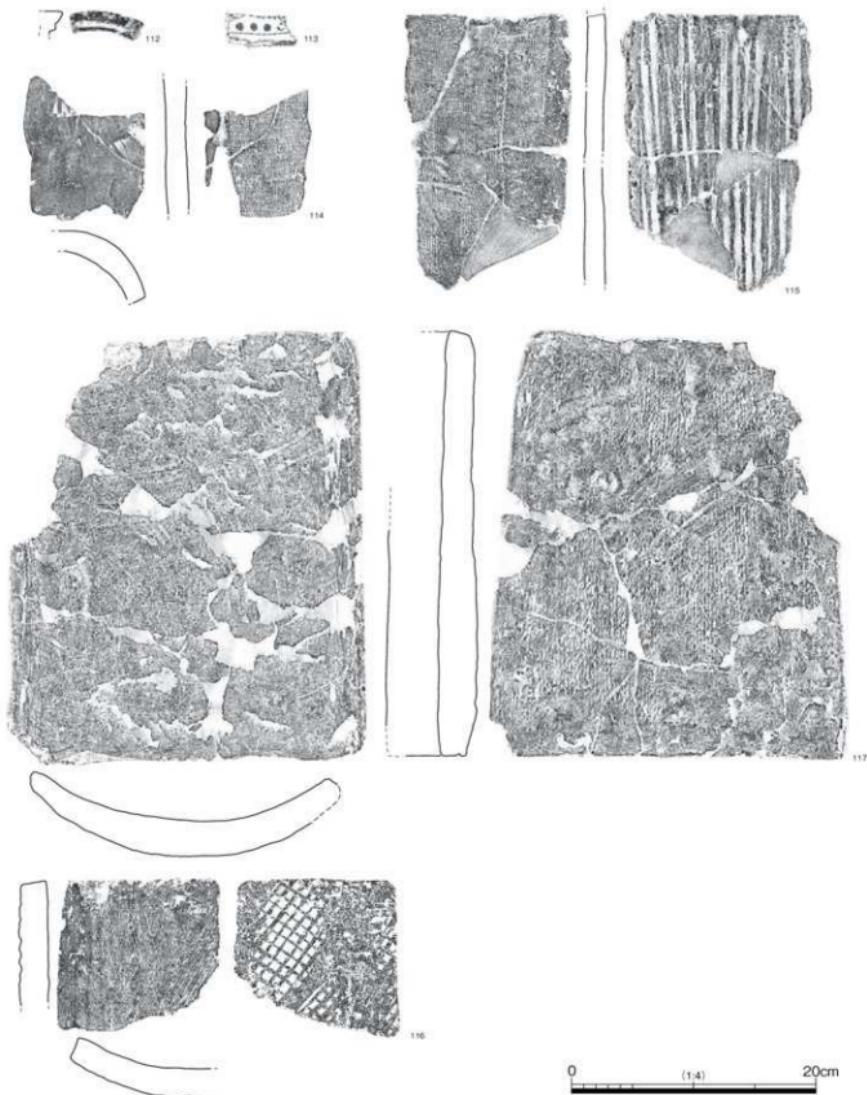


図 169 33-1Tr3 層出土遺物 3

(3) 33-1 トレンチの構造・遺物

SB2015 (図 172 ~ 174)

33-1 トレンチ西部で検出した南北棟の掘立柱建物であり、SB2017、SD1001 に切られる。梁行 2 間 (4.2 m)、桁行 4 間 (6 m) の柱配置をもち、建物主軸は座標北から 5° 東偏する。床面積は 25.41 m² である。

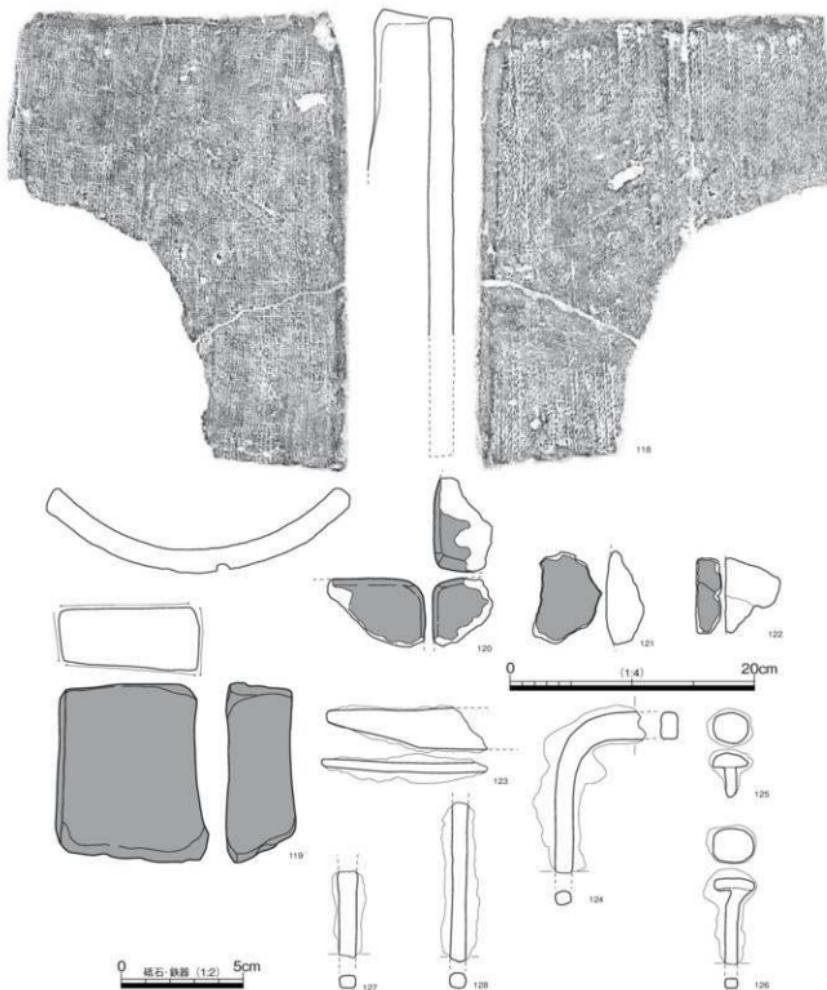


図 170 33-1Tr3 層出土遺物 4

平面及び断面において、径 0.18 m の柱痕跡を確認しており、柱間は梁行で 2.1 m、桁行で 1.5 m と推定できる。北西隅柱 SP1145、南西隅柱 SP1146 に SA2012 が接続され、南側の SB2016 と南北で連結した配置となる。また、北側梁行は本建物東側の SB2010 の北側梁行に合致する。

出土遺物には、SP1109 の断ち割り（層位不明）より須恵器高杯（143）、同杯（144）、SP1109 上層から土師器甕（145）、SP1084 上層からの土師器甕（146）がみられる。

これらの出土遺物や建物方位、8世紀前葉から中葉の SB1204 に切られることからみて、本建物は7世紀後葉から8世紀初頭に機能したものと考えたい。

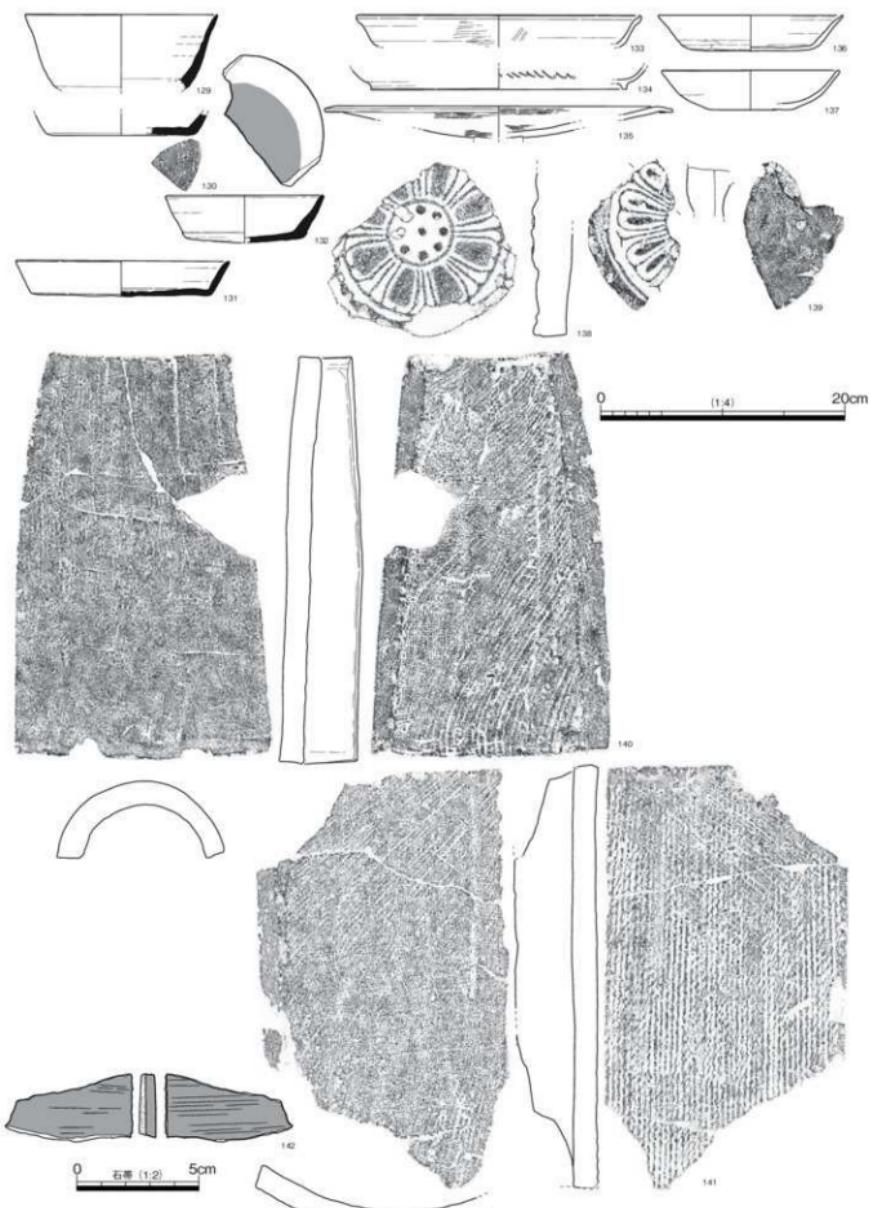


图 171 33-1 Tr 北西部遗构面上出土遗物

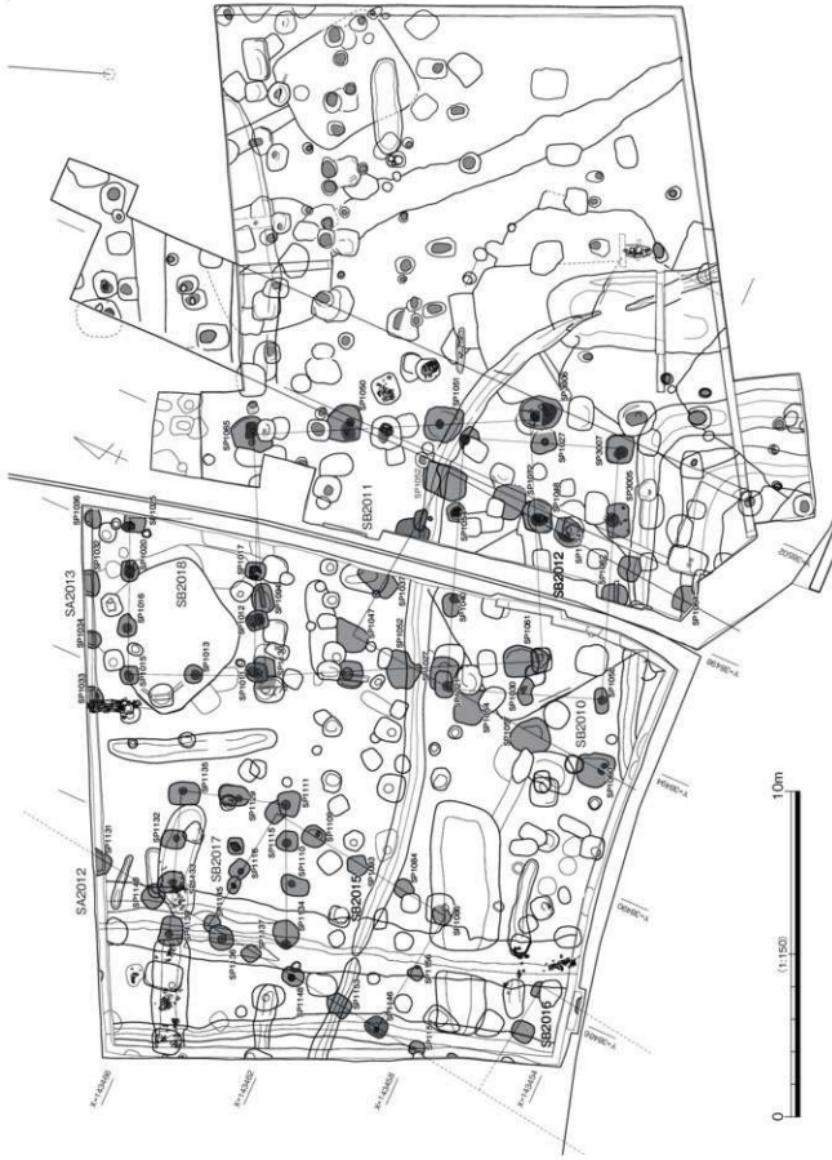


圖 172 33-1Tr 周邊建物配置狀況

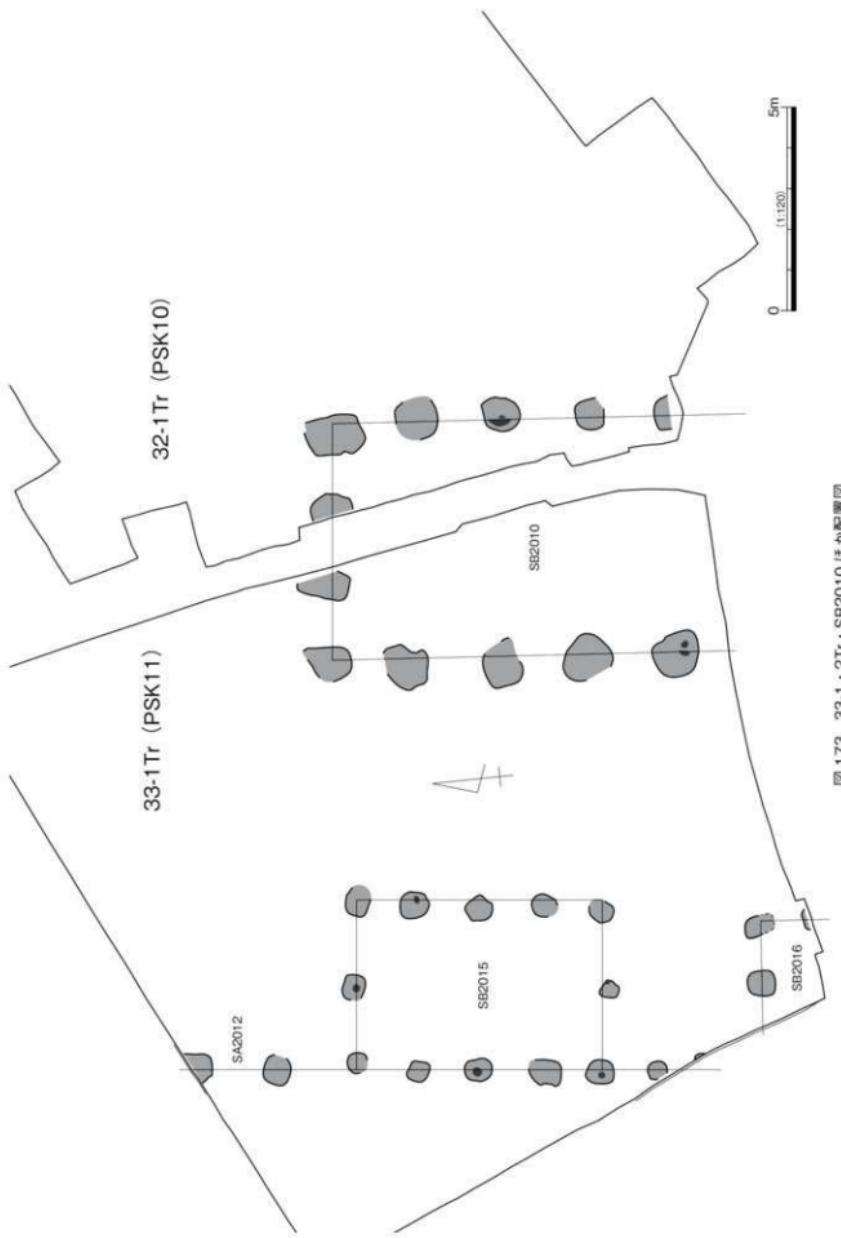


図 173 33-1・2Tr・SB2010ほか配置図

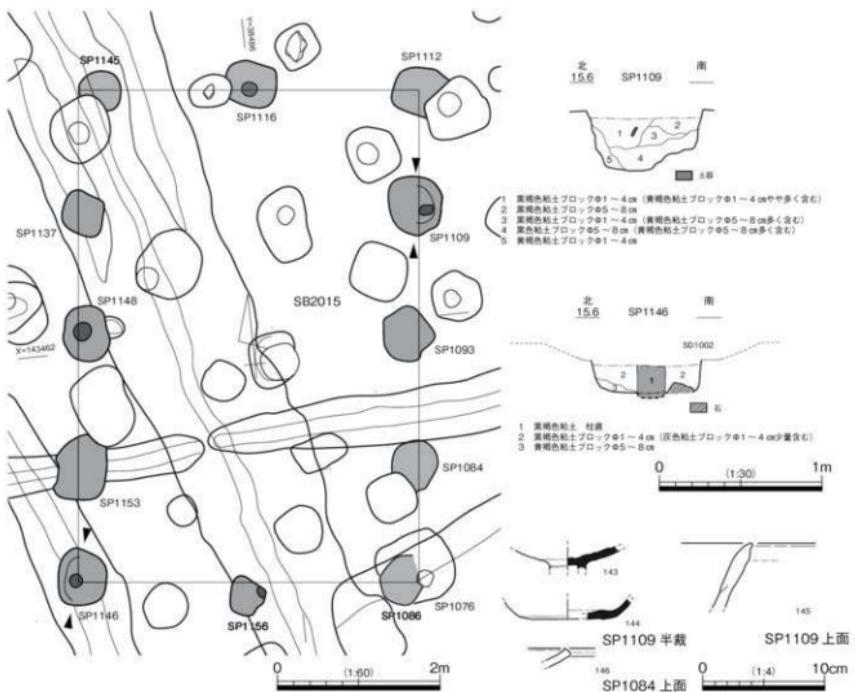


図 174 33-1Tr・SB2015 平断面図及び出土遺物

SB2016 (図 172.173.175.176)

33-1 トレンチで検出した掘立柱建物である。検出範囲は、SP1147, 1154, 1173 の 3 基にとどまるが、SB2015, SA2012 との位置関係から建物として復元する。特に SP1147, 1154 については、SB2015 南側梁行 SP1156, 1086 に柱筋を描いたものである。

全体形は不明ながら、SA2012 を介して SB2015 と連結された南北棟の建物と考えておきたい。調査範囲内での出土遺物はみられなかつたが、SB2015 等と同様の 7 世紀後葉から 8 世紀初頭に帰属する建物と考える。

SA2012 (図 172.173.176)

33-1 トレンチ東部で検出した南北の柱列である。主軸方位は座標北から 5° 東偏するもので、SB2015 の西側桁行に接続している。SB2016 とは調査範囲内での接点を確認することが出来ないが、南側への延伸方向及び距離、SB2015 と SB2016 の位置関係からみて、SB2016 の西側桁行に接続する可能性が極めて高いと考える。

柱間は、SB2015 北側で 1.8 m、同建物南側で 1.2 m と一定していないが、南側の SB2015, 2016 間で異なる構造をもつことも予想される。

出土遺物は、SP1040 上層より出土した須恵器杯 (147) がある。7 世紀後葉に位置付けられる資料であり、SB2015 の年代観とも矛盾していない。

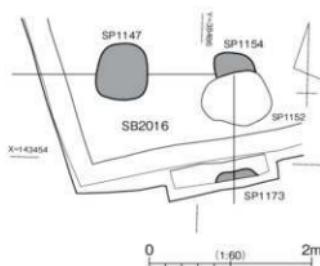


図 175 33-1Tr・SB2016 平面図

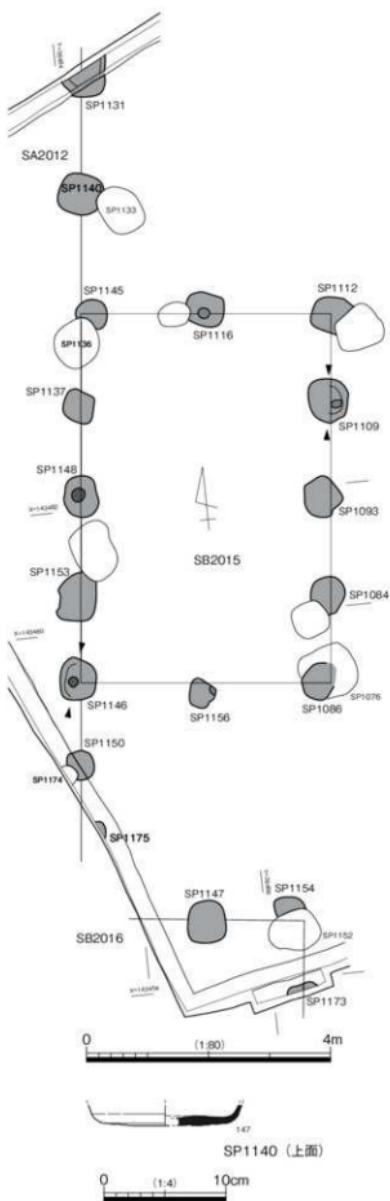


図 176 33-1Tr・SA2012 平面図及び出土遺物

SB2010 (図 172, 173, 177)

33-1 トレンチ東部で検出した南北棟の掘立柱建物である。7世紀中葉のSH1074を切り、9世紀後葉から10世紀前葉のSB1206、11世紀のSD1010に切られる。32次調査32-1 トレンチの遺構検出状況と合わせて、梁行3間(5.8m)、桁行4間(8.7m)以上の柱構造をもち、建物主軸は座標北にはば合致した南北棟の大型建物に復元した。前述したSB2015と建物主軸方位と北側梁行と揃えて構築されている。

掘り方は、長軸1~1.4m、短軸0.7~1mの不定形なものであり、断ち割りを行った32-1Tr・SP1134、33-1Tr・SP1060では、径0.2mの柱痕跡が確認されている。これら以外の柱穴において、平面で柱痕跡を確認することは困難であったが、柱間は梁行で1.8m、桁行で2.1mと推定できる。

出土遺物は、33-1Tr・SP1052の上層から出土した須恵器蓋(148)、32-1Tr・SP1072上層から出土した須恵器無蓋高杯(10-90, 10-91)、平瓦(10-92)がある。

これらの出土遺物の年代観や、SB2015・SA2012との一体性を考慮して、本建物は7世紀後葉から8世紀初頭に帰属するものとして考えておきたい。

SB2017 (図 179)

33-1 トレンチ北西部で検出した東西棟の掘立柱建物である。SB2015を切り、SD1014, SD1001に切られる。梁行2間(3.5m)、桁行3間(4.5m)の側柱に、内部の東柱(SP1118, 1119)を加えることで純柱建物となる。床面積は16m²、建物主軸は座標北から109°西偏し、条里地割の方位に合致する。平面及び断面における柱痕跡は径0.13~0.15mを測り、南側桁行の柱通りが悪いが、西側梁行及び北側桁行を基準にすれば、柱間は梁行1.8m、桁行1.5mと考えられる。

東柱穴のSP1118, 1119には、長さ0.2~0.4m、厚さ0.2~0.3mを測る安山岩の板石を据え付けている。

149~159は各柱穴からの出土遺物である。152は製塩土器であり、7世紀中葉から8世紀前半の備讃瀬戸の倉浦式と考えられる。

これらは帰属する層位を特定できないものが多いが、概ね7世紀中葉から8世紀中葉に納まる資料と考えられる。8世紀後葉のSD1014に切られることや、建物主軸方位が条里地割に合致することなどからみて、本建物は8世紀前葉から中葉に機能したものと考えておきたい。

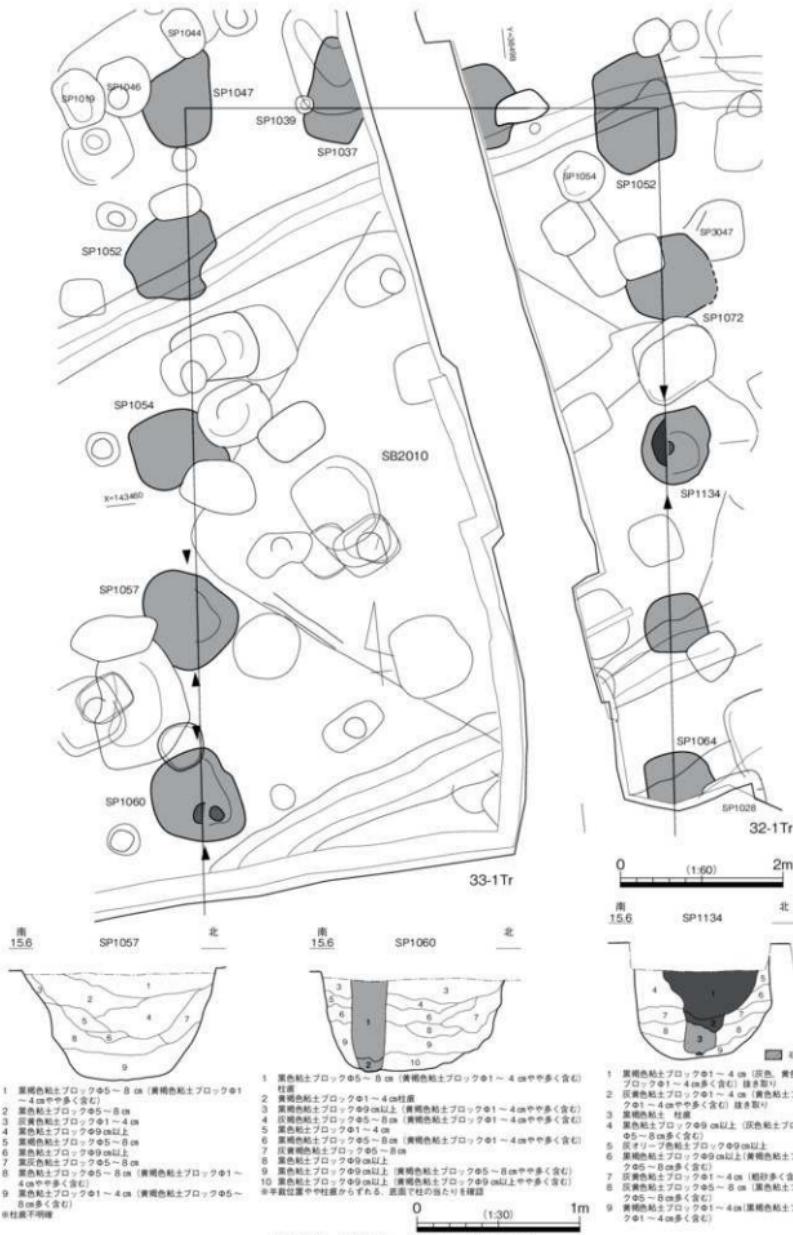


図 177 33-1-Tr・SB2010 平断面図

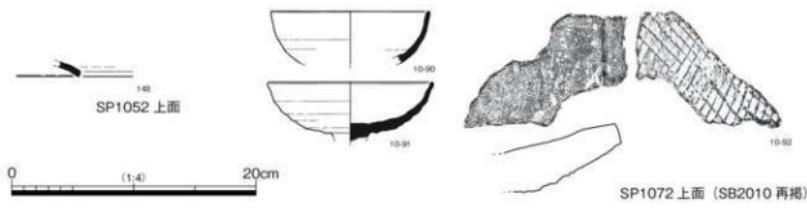


図 178 33-1Tr · SB2010 出土遺物

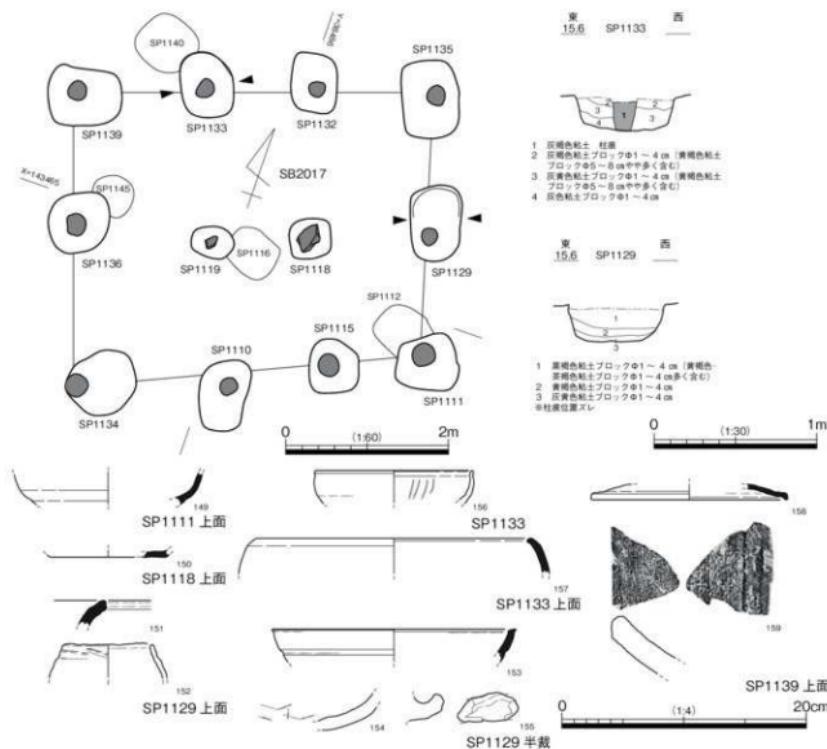


図 179 33-1Tr · SB2017 平面図及び出土遺物

SA2013 (図 180)

33-1 トレンチ北東部で検出した東西方位の柱列である。トレンチ北壁際で、西から SP1033, 1034, 1032, 1036 が柱間 1.8 m で並び、方位は座標北から 115° 西偏するものである。SP1036 を除いた柱穴において径 0.2 m の柱痕跡を確認しており、SP1032, 1034 の柱のあたりには安山岩製の礎盤石を検出した。大半が調査区外となるため、主軸方位や全体形の把握は困難であるが、入念な据え付けを行っていることから、柵ではなく掘立柱建物となる可能性が高い。

出土遺物は、SP1032 の上層からの須恵器蓋(160)、同裏込土の須恵器蓋(161)、SP1036 上層から出土した須恵器杯(162)がある。SP1036 上層から出土した須恵器杯(162)は 7 世紀末から 8 世紀初頭の資料とみられるが、SP1032 の上層の

須恵器蓋（160）、同裏込土の須恵器蓋（161）の年代観や方位からみて、本遺構は8世紀前葉から中葉に機能したものと考えておきたい。

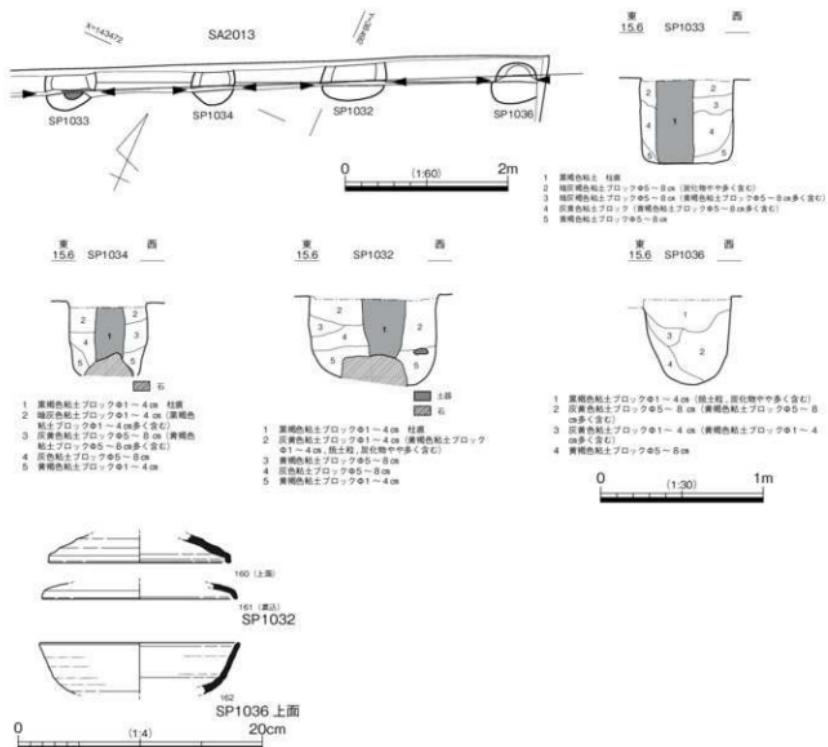


図 180 33-1Tr・SA2013 平断面図及び出土遺物

SB2018 (図 181)

33-1 トレンチ北東部で検出した東西棟の掘立柱建物である。梁行2間（3.9 m）、桁行3間（4.5 m）以上の柱配置をもち、主軸方位は座標北から113°西偏する。南側桁行は、32次調査32-1Tr・SA2009に合致する。本次調査においては、本建物と32次調査SA2009の詳細な接続関係を確認することはできなかった。

柱は全ての柱穴において抜き取られているが、現状から推定した柱間は、梁行1.8 m、桁行1.6 mとなる。断ち割りを行った南側桁行の間柱SP1012では、抜き取りの下位に安山岩製の礎盤石が据え付けられ、その傍らに瓦塼（167）が添えられていた。この礎盤石による据え付けは、32次調査SA2009とも共通する。

また、抜き取り上位に石材が集中する点は注意される。この石材集中は、北側桁行SP1020、1025、南側桁行SP1017において顕著にみられるものであり、柱抜き取り後の礎石据え付けに伴う可能性も考えられる。

163～167は、本建物からの出土遺物である。須恵器蓋（163）は9世紀代、同（165）は10世紀前葉の資料と考えられる。畿内系土師器蓋（164）、同杯（166）は7世紀末から8世紀初頭の資料であり、時期的に先行する遺構からの混入資料と考えられる。瓦塼（167）は複数の粘土板を接合したものであり、擬口縁で剥離するものである。

これらの資料のうち、SP1015の抜き取りから出土した須恵器杯（165）の年代観から、本建物は10世紀前葉に柱抜き取りが行われたと考えられる。しかし、抜き取り上部に石材が集中することから、礎石建物化され、その後一定期間継続した可能性も指摘しておきたい。

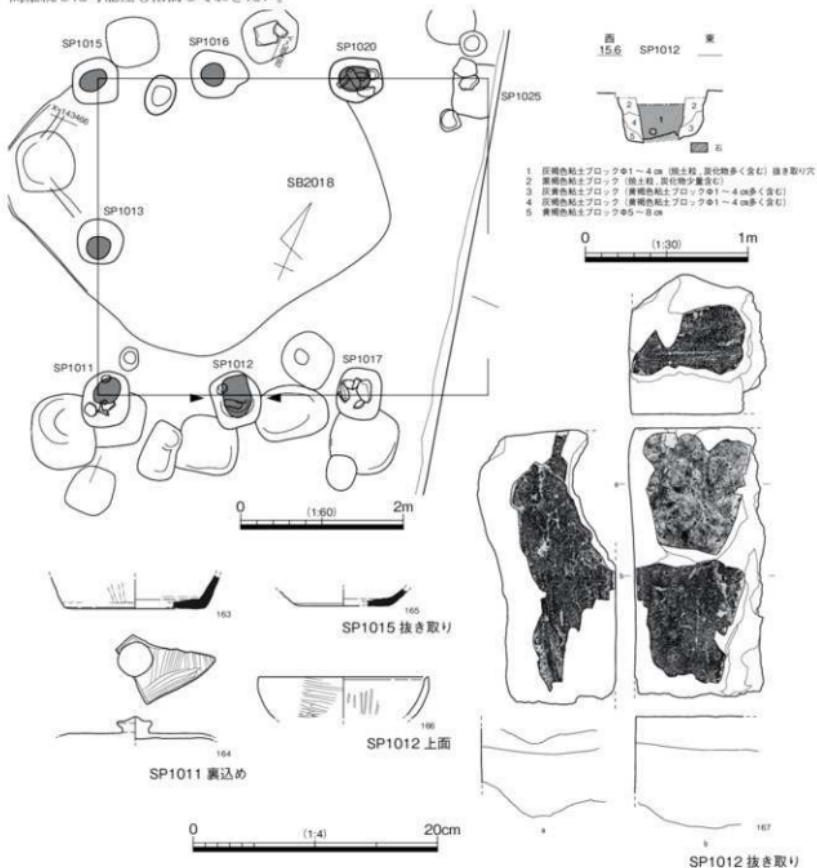


図 181 33-1Tr・SB2018 平断面図及び出土遺物

SB2011(図182,183)

33-1トレーナー東部で検出した掘立柱建物である。SH1074を切り、SB2018, 2012, SD1010に切られる。32次調査32-1トレーナーにおいて建物東半部(SB2011)を確認しているが、本次調査結果より、梁行3間(7.5m)、桁行3間(8.5m)、床面積63.8m²、建物主軸方位は座標北から26°西偏した南北棟の掘立柱建物に復元した。柱通りは概ね良好であるが、梁行が32-1・33-1トレーナー間の未調査部分を挟んでいるため、構成する柱穴の特定に検討の余地を残すが、現状での柱間は、梁行2.4~2.6m、桁行2.7~3mを測り、東側桁行を中心に径0.3mの柱痕跡を確認している。

168~171, 10-93~95は出土遺物である。これらのうち、時期的に後出資料はSP1094上面から出土した土師質土器杯(169)であり、10世紀中葉の資料とみられる。しかし、本資料は上面からの出土資料であり、帰属する層位に課題を残している。

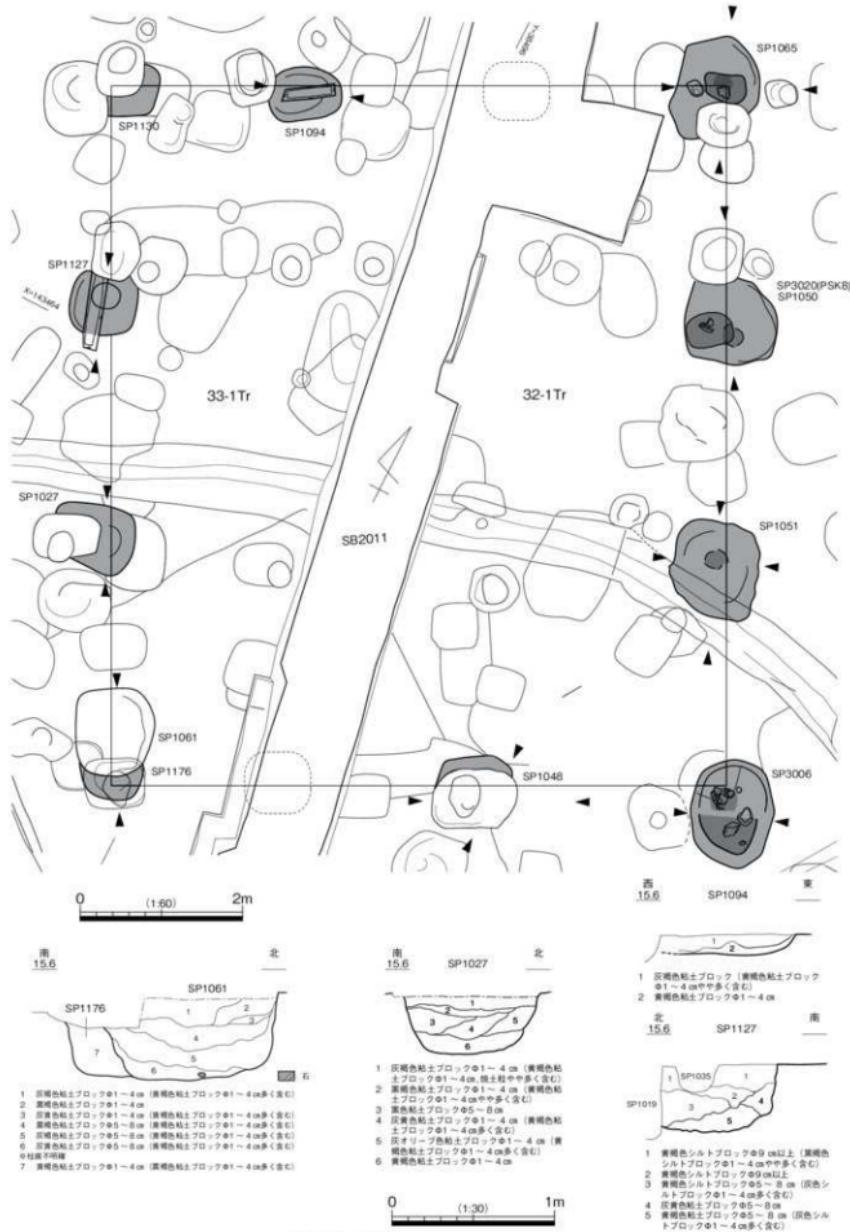


図 182 33-1 Tr・SB2011 平断面図

ここでは、10世紀前葉に柱抜き取りが行われるSB1205に切られることを重視して、本建物は9世紀の後葉から10世紀前葉に機能したものと考えておきたい。

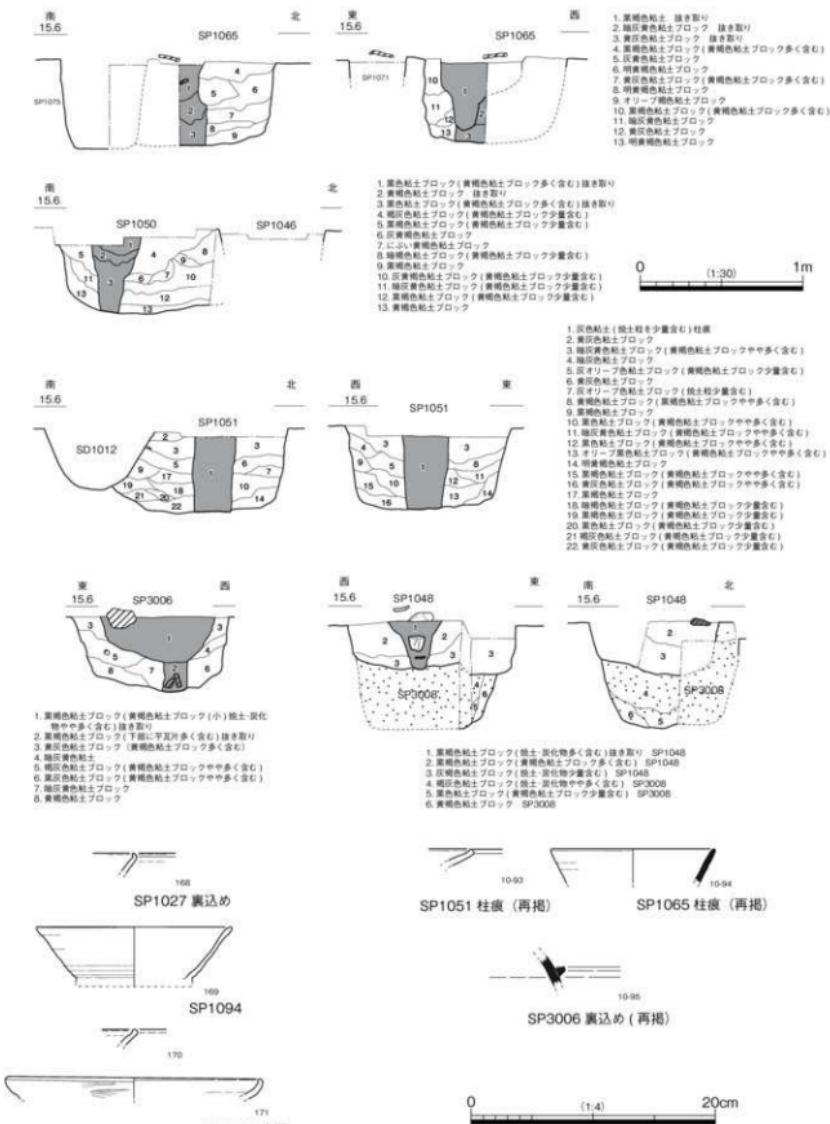


圖 183 33.1T₅ - SB2011 斷面圖及其出土遺物

SB2012 (図 184, 185)

33-1 トレーナー西部で確認した東西棟の掘立柱建物である。SH1074・SB2011を切り、SD1010に切られる。30次調査及び32次調査において東半部を確認しており、本次調査成果をもって、梁行2間(4.8m)、桁行3間(7.8m)、建物主軸方位が座標北から110°西偏する東西棟として復元する。また身舎にSP3008が存在することから、繩柱建物となる可能性が高い。また、北側桁行SP1040に対応する南側桁行柱やこれらに対応する東柱の柱穴については、32-1・33-1 トレーナー間の未調査地を挟んでいたために明確にできなかった。

柱は全て抜き取られているが、現況から判断した柱間は梁行2.4m、桁行2.4mである。32-1Tr・SP3005では、掘り方の中位に安山岩製の礎盤石が据えられている。他の柱穴の柱の当たりより高いSP3005中位から検出されていることからみて、改修を受けた際に据え付けられたものと考えられる。

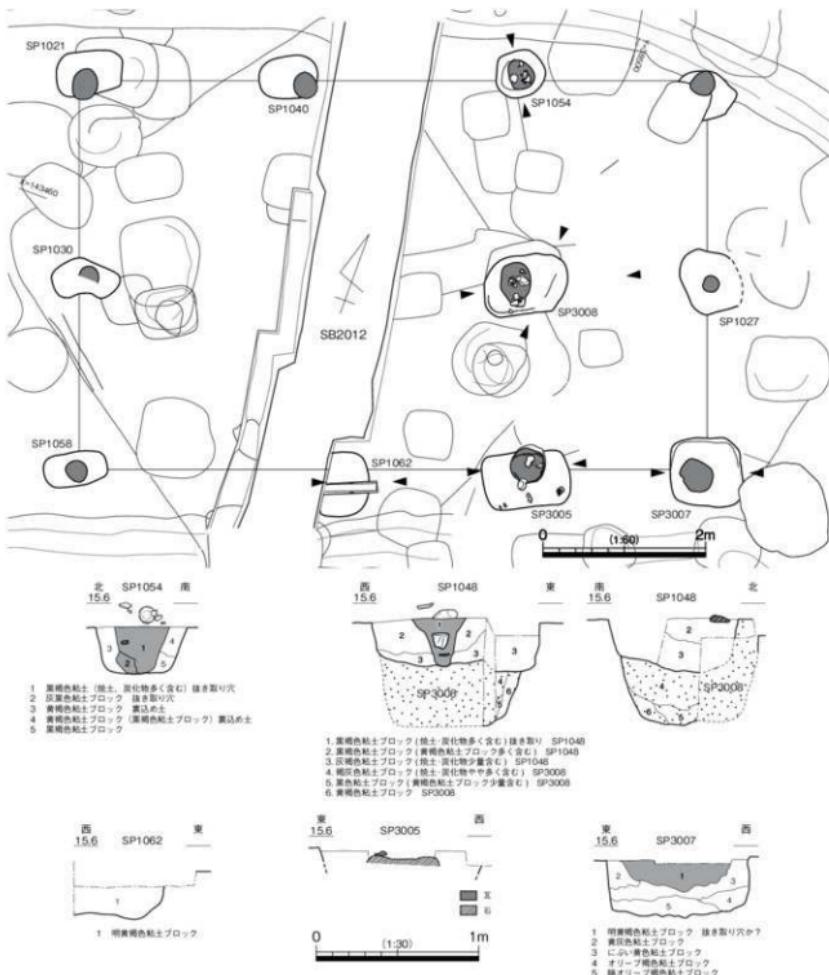


図 184 33-1Tr・SB2012 平断面図

出土遺物のうち、SP1054 抜き取りから出土した土師質土器杯（10-96, 10-97, 10-99）、SP3005 の抜き取り出土の土師質土器杯（8-391）、SP3005 の裏込めからの土師質土器杯（8-392）の年代観より、本建物は 10 世紀中葉に構築され、1 回程度の改修を経て、11 世紀前葉に廃絶したものと考える。SP3005 の裏込めから出土した篠産の須恵器鉢（8-393）は、10 世紀後半に比定される資料である。

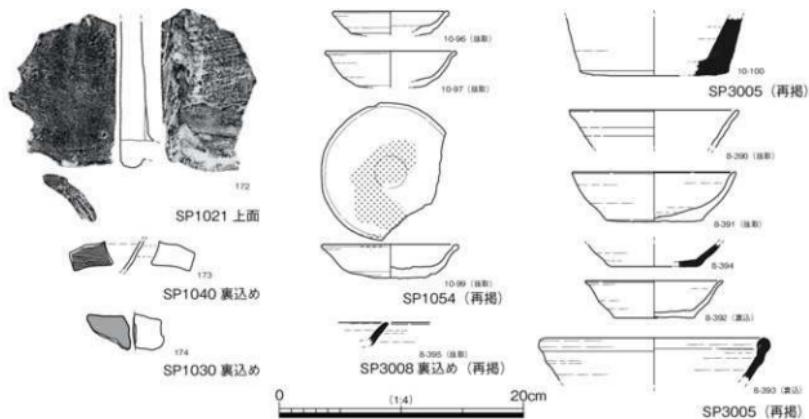


図 185 33-1Tr・SB2012 出土遺物

33-1 トレンチ柱穴出土遺物（図 186）

175～186 は、33-1 トレンチの柱穴のうち、建物復元に至らなかつたものから出土した資料である。本調査区における造構成時期を示す資料であるので、ここに提示しておきたい。

176・181 は製塩土器であり、7 世紀中葉から 8 世紀前半の資料と考えられる。180 は轆羽口、185 は瓦堀、186 は白色凝灰岩片である。

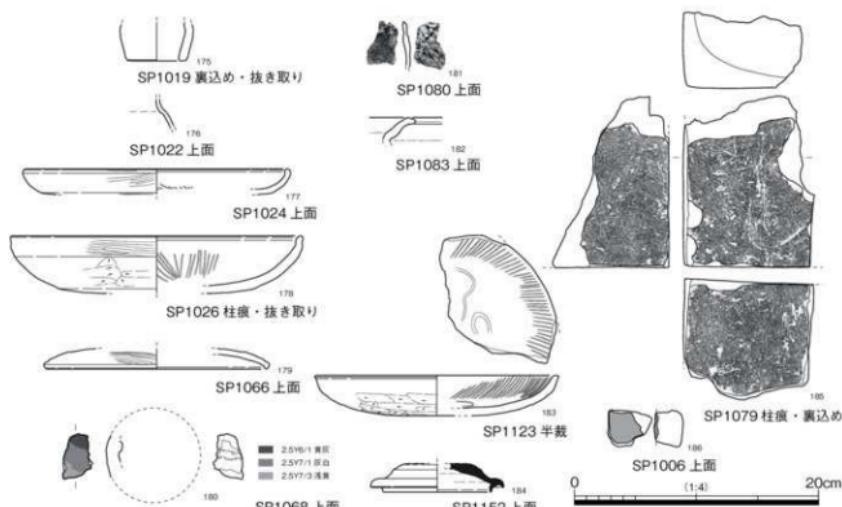


図 186 33-1Tr・柱穴出土遺物

SH1074.1095 (図 187)

33-1 トレンチ東部で検出した堅穴建物である。

SH1074 は、32 次調査において東半部を検出し、本次調査において一辺が約 5 m の堅穴建物であることが確定した。

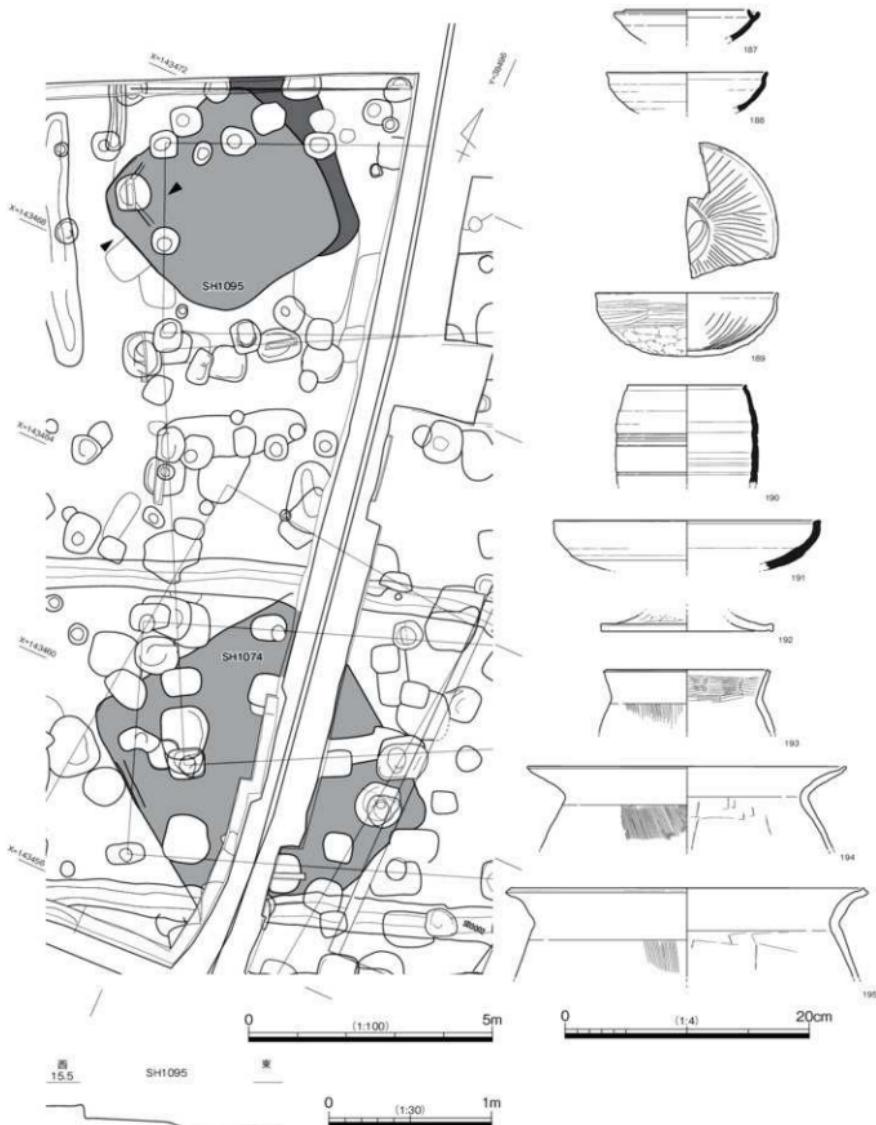


図 187 33-1・32-1Tr・SH1074.SH1095 平断面図及び出土遺物

SB2010, 2011, 2012, SD1010 等の遺構に切られるもので、層位的には本調査区で最も先行する時期の遺構であると考えられる。

調査範囲内で出土遺物はみられないが、層位及び周辺における竪穴建物の年代観からみて、7世紀中葉の所産と考えられる。

SH1095 は、一辺約 4 m の隅丸方形を呈し、SA2013, SB2018 に切られる。遺構番号を与えていないが、北東部に先行する同規模の竪穴建物が存在している。現状で竪をもたず、約 0.15 m の壁高が遺存している。

出土遺物（187～195）は全て埋没土中から出土した。これらの資料は、7世紀中葉に位置付けられるものと考えられる。

SK1009 (図 188～192)

33-1 トレンチ南西部で検出した大型土坑である。条里地割に合致した東西方位を示し、SB2015 を切り、SD1001, 1002 に切られる。現状で東西長さ約 7 m、南北幅 2.1 m、深さ 0.3 m を測る。断面形は逆台形を呈し、底面は平滑である。埋没土は褐灰色粘土の偽礫が主体をしめており、部分的に茶褐色粘土の偽礫がまとまってみられる箇所がある。掘開後の流入・流水を示す堆積層は確認しておらず、早期に一括して埋め戻されたと考えられる。

層位的にはほぼ単一層であるが、遺物はレベルにより上位・下位の 2 単位に区分して取り上げた。

196～235 は上位出土遺物である。216～218 は須恵器蓋の内面を利用した転用碗であり、218 の内面には字義不明の墨書が確認できる。219 は異形の土師器鉢。軒丸瓦（220）は、開法寺でみられる KH106 型式と考えられる。平瓦（223～232）は細い繩目叩き、部分的な棒線をもつ格子叩きが主体となるが、平行叩き（232）が 1 点のみみられる。233・234 は白色凝灰岩片である。本遺構から出土した瓦の出土量は破片数 69 点（丸瓦 19 点（28%）、平瓦 50 点（72%）、総重量 19,917 g（丸瓦 3,916 g（20%）、平瓦 16,001 g（80%））を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと繩叩きの比率は破片数では 42% : 58%、重量比では 57% : 43% となる。

236～239 は、底面直上から出土し、下位として取り上げた資料である。薄手の土師器皿（237）外底面に手持ちケズリが確認されるため、回転台の使用を想定することはできない。238 は法量・器形からみて、大型の円面鏡と考えられる。

これらの資料のうち、一部に須恵器杯（202）や同横瓶（213）等の古相を示す資料がみられるが、大半の資料は 8 世紀後葉に比定されるため、本遺構の形成時期を同時期と推定しておきたい。

SD1014 (図 188, 193, 194)

33-1 トレンチ北西部で検出した東西溝である。SB2017・SA2012 を切り、SD1001, 1002 に切られる。現状で東西長さ約 8 m、南北幅 1.2 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m を測り、西側の調査区外へ延びる。埋没土は、灰褐色粘土の偽礫による単一層であり、流水痕跡はみられない。

出土遺物（240～262）は 3か所程度にまとめて出土している。246 は製塙土器片であり、5世紀代に遡る資料と考えられる。247 は瓦当面が剥落する軒丸瓦。丸瓦（248）の凹面には竹状模骨痕が確認できる。262 は白色凝灰岩片である。本遺構から出土した瓦の出土量は破片数 59 点（丸瓦 23 点（39%）、平瓦 36 点（61%））、総重量 19,578 g（丸瓦 4,927 g（25%）、平瓦 14,651 g（75%））を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと繩叩きの比率は破片数では 28% : 72%、重量比では 27% : 73% となる。

これらの出土遺物のうち、須恵器（240～243）、土師器甕（245）の年代観から、本遺構は 9 世紀前葉に埋め戻されたと考える。

SD1010 (図 188, 195)

33-1 トレンチ中央で検出した東西溝である。本調査区西側における 30 次調査 30-3 トレンチ（SD3046）、32 次調査 32-1 トレンチ（SD1012）と同一溝と考えられる。

上面幅 1 m、深さ 0.5 m を測り、逆凸形の断面をもっている。埋没土は 3 つに区分できる。最下層は、ラミナがみ



図 188 33 次調査区各溝断面図

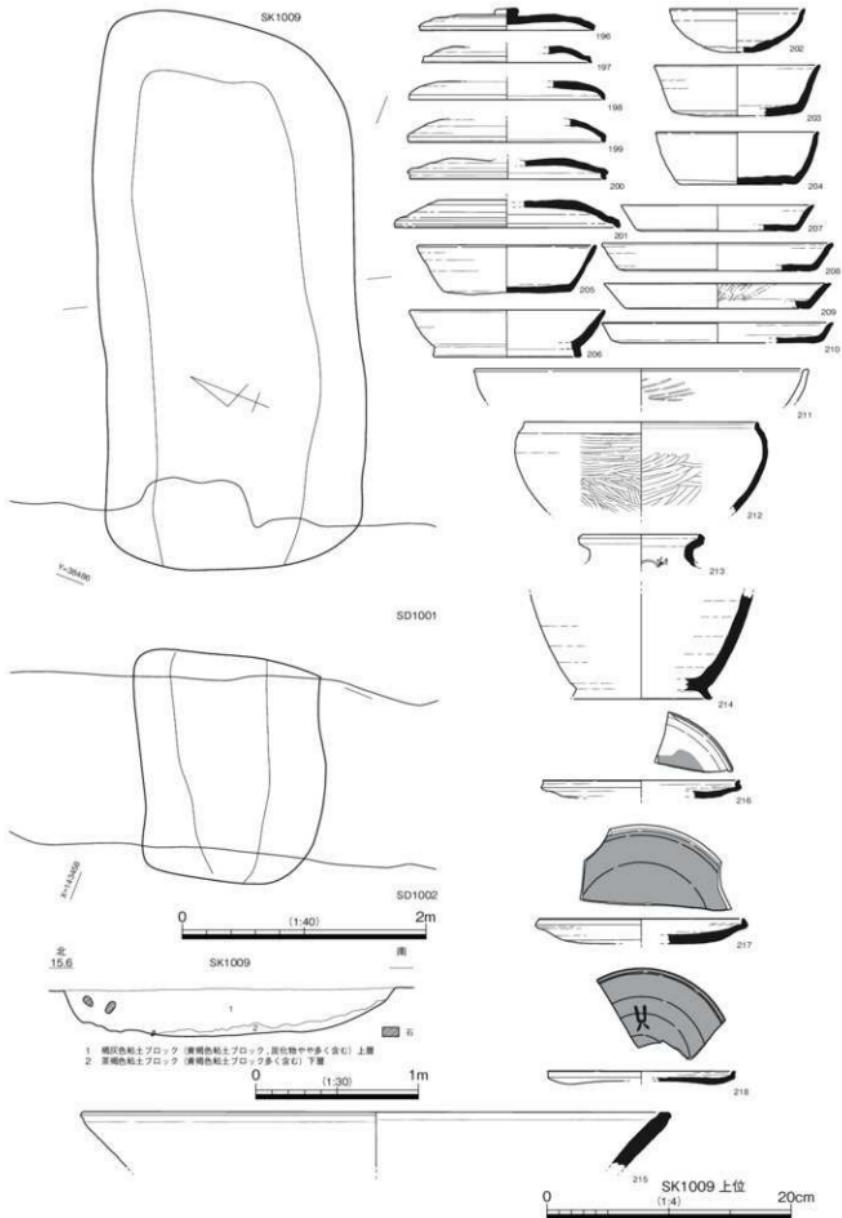


図 189 33-1Tr・SK1009 平断面図及び出土遺物

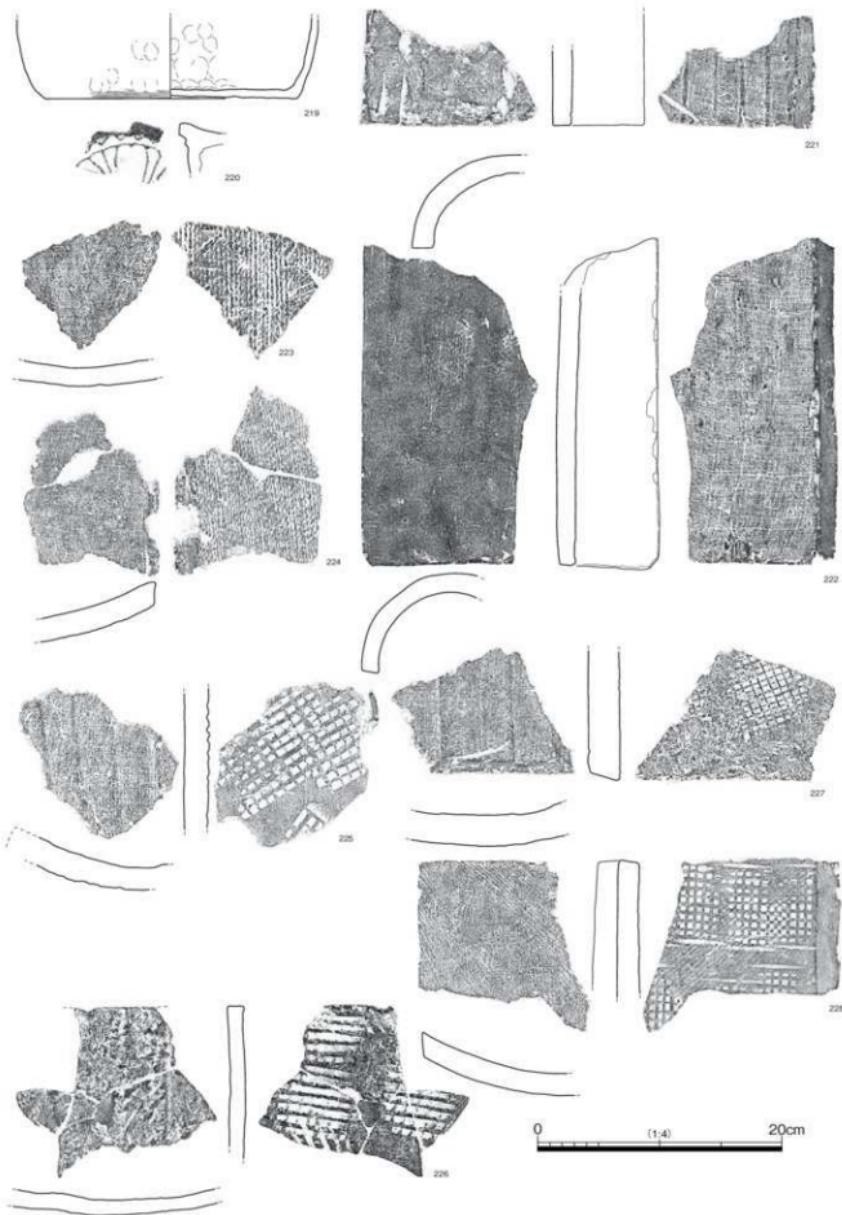


図 190 33-1Tr・SK1009 上位出土遺物 1

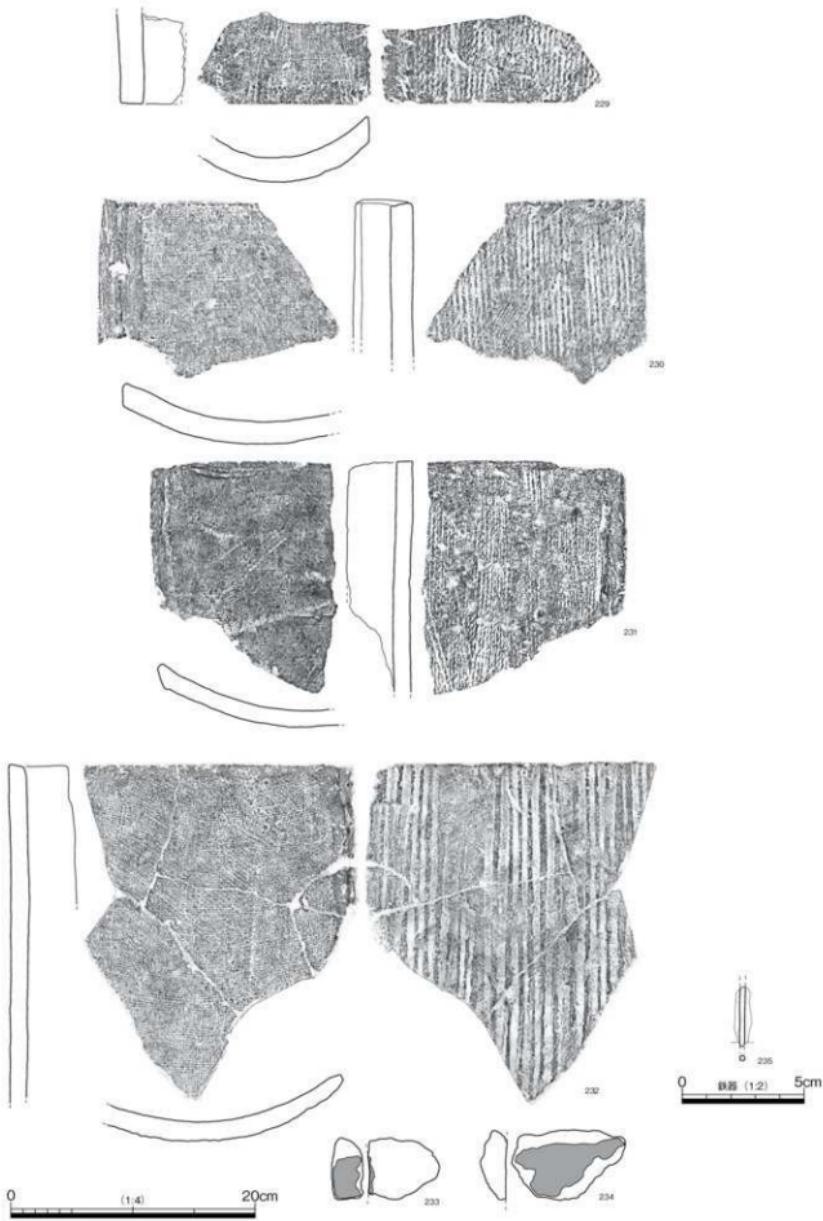


図 191 33-1Tr・SK1009 上位出土遺物 2

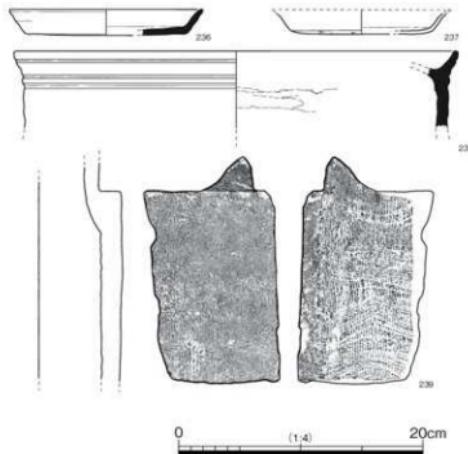


図 192 33-1Tr・SK1009 下位出土遺物

SD1001.1002.1003 (図 196.197)

SD1001, 1002 は、33-1 トレンチ西部を 2 条並行で南北に延びる溝である。検出位置や埋没土の特徴からみて、トレンチ南東隅の SD1003, 32 次調査 32-1Tr・SD1005, 1006 は同一溝と考えられる。SD1001, 1002 とともに、基本層序 2 層に類似する灰色系シルトで同時に埋没している。SD1001 の調査区南壁付近では、土器・瓦片とともに動物遺存体がややまとまって出土している。

285～292 は SD1001 からの出土遺物である。286 は近江産の縁軸陶器皿である。土師質土器鍋(288)、同把手付鍋(287)は、16 世紀後半から 17 世紀前半まで下る資料と考えられる。290・291 は須恵器蓋の内面を利用した転用硯。軒丸瓦(292)は、開法寺でみられる KH109 型式と考えられる。

これらの出土遺物からみて、本溝群は中世後半から近世初頭まで機能したものと考えておきたい。

その他の遺構 (図 195)

図 195 には、33-1 トレンチにおいて詳細な報告に至らなかった遺構からの出土遺物をまとめて掲載している。本調査区の遺構形成時期を示す資料として提示しておきたい。

られる灰色細砂であり、流水状態を示す機能時堆積層と考えられる。下・上層とも、大振りの偽縫を含む埋め戻し土であり、上層には焼土粒・炭化物が含まれている。底面は東西で 0.15 m 程の比高差があり、西へ流下方向を推測できる。弧状を描く平面形や底面の機能時堆積層からみて、微高地 1 上面の排水目的で掘削された溝として考えられる。

263～270 は本溝からの出土遺物である。271 は回面に布目をもつ丸瓦片にみえるが、全ての側縁に焼成前の面取りが確認できる。機能不明の特殊瓦としておきたい。

土師質土器 (263～267) の年代観から、本遺構は 11 世紀前葉から中葉に機能したものと推定しておきたい。

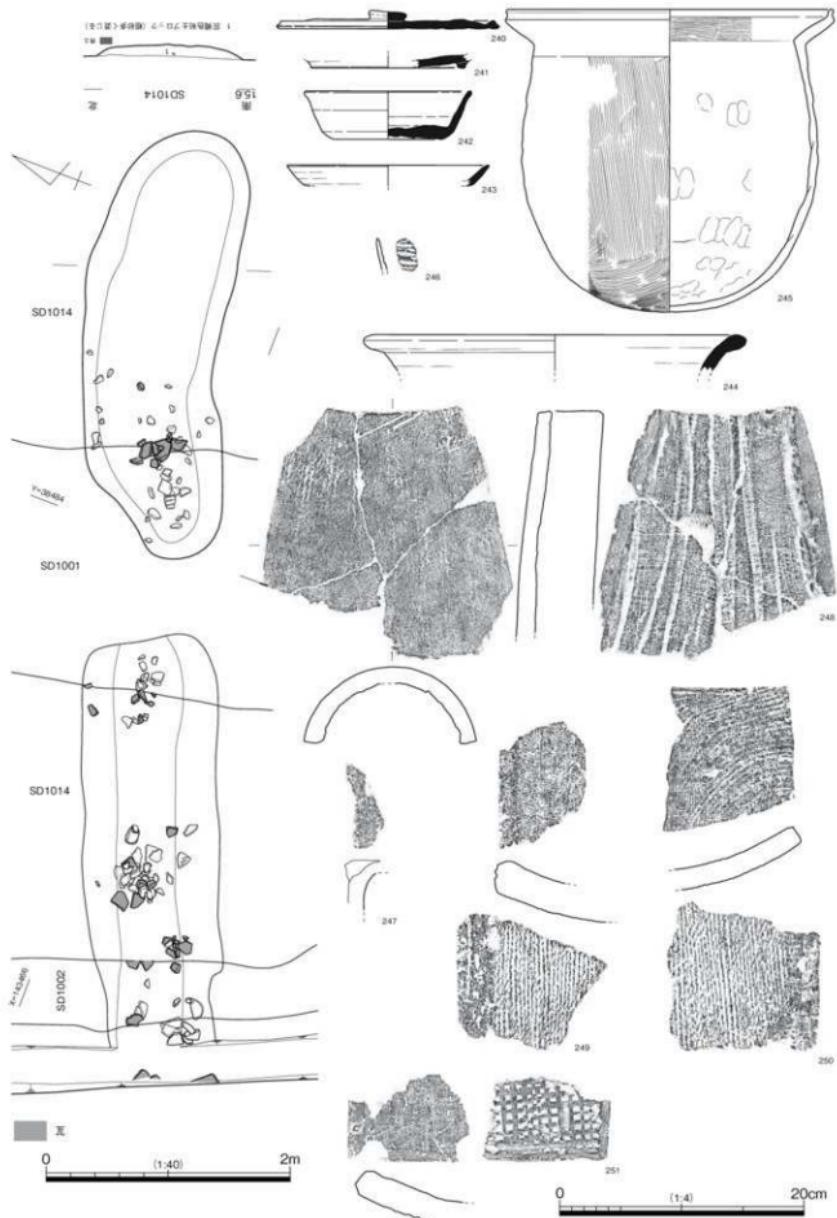


図 193 33-1Tr・SD1014 平断面図及び出土遺物

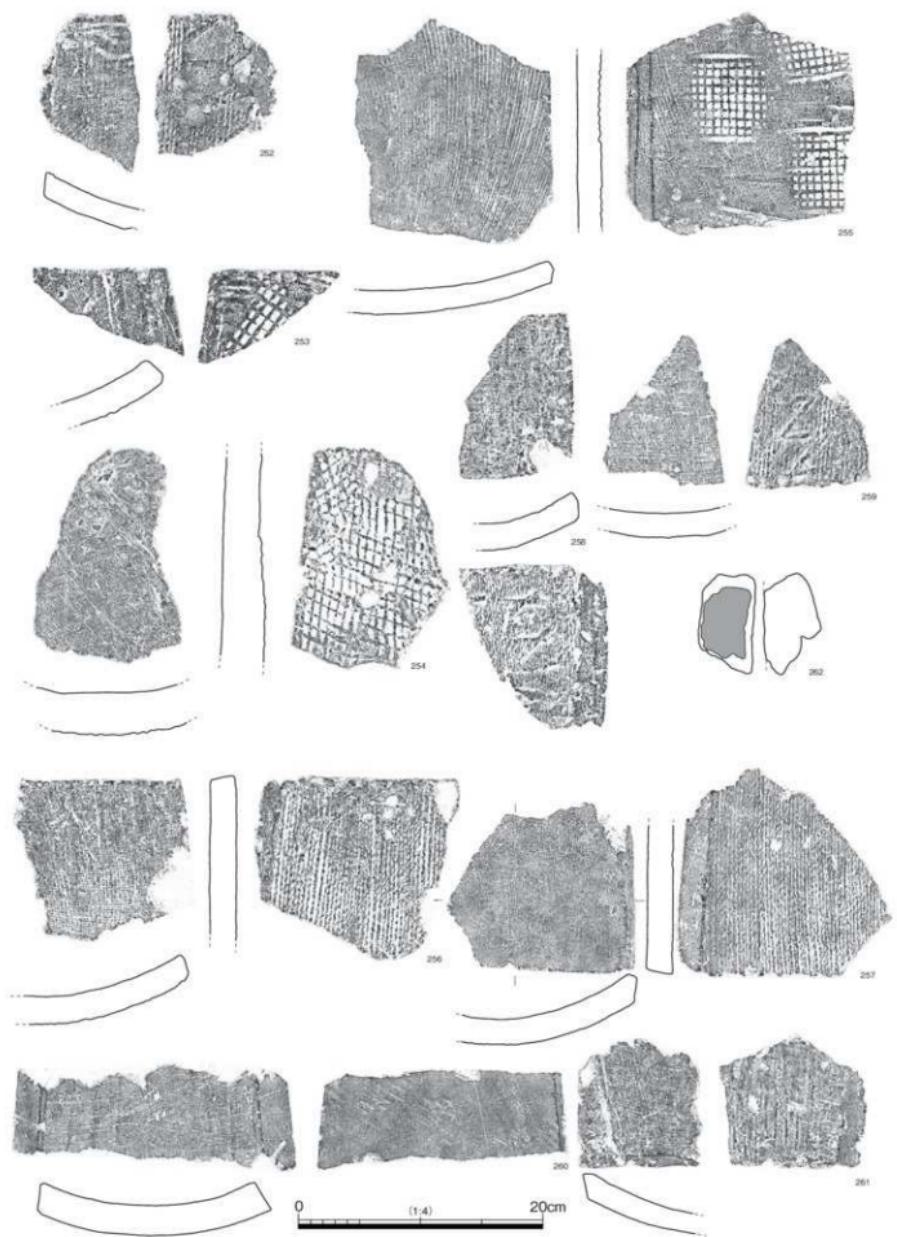
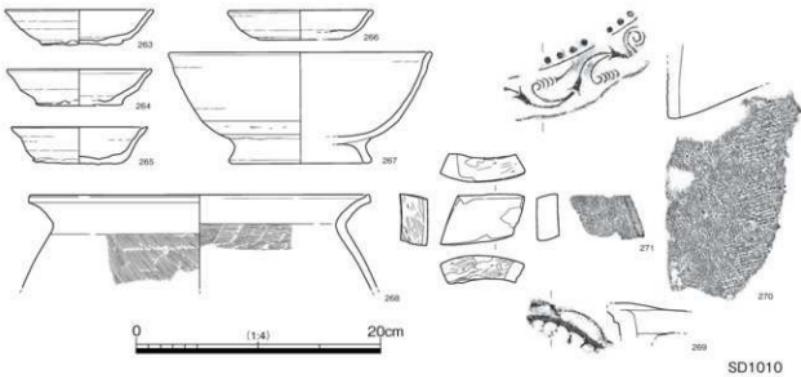


図 194 33-1Tr・SD1014 出土遺物



SD1010

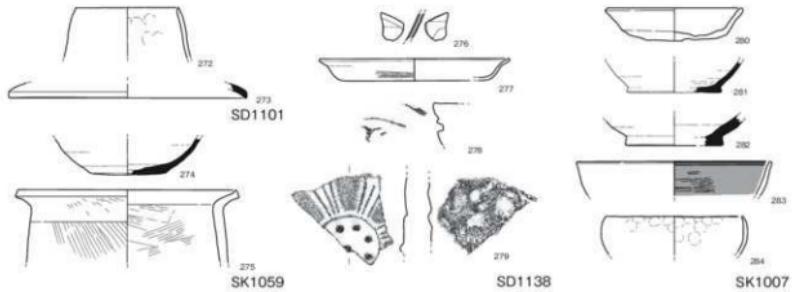


図 195 33-1Tr・SD1010ほか出土遺物

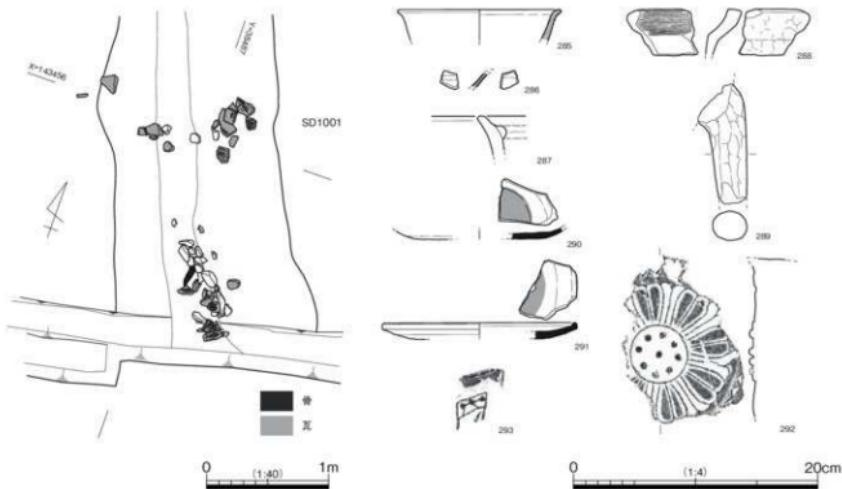


図 197 33-1Tr・SD1001 南端遺物出土状況及び出土遺物

図 196 33-1Tr・SD1001,1002 ほか平断面図



(4) 33-2 トレンチ

①概要及び層序 (図 199)

33-2 トレンチは、31 次調査 31-4 トレンチで確認された大型建物 SB2022, 2023, 2024 の全容把握を目的とする調査区である。調査前は水田として利用されていた。

1 層は現在の耕作土の基盤層となる灰黄色粘土であり、近代以降の耕作土と考えられる。2 層の灰白色シルトは、分級が悪いため旧耕作土と考えられるもので、トレンチ東部では 1 层により大きく削平を受ける。2 層下位は箇所により、層位が異なる。トレンチ東半部では、焼土・炭化物をやや多く含む黒褐色シルト～粘土（北壁 26 層、東・南壁 3 層）、同西半部は灰色シルトの偽縛や小礫をやや多く含む淡灰色・灰白色シルト（北壁 3 層・西壁 10 層、南壁 4 層）が分布する。トレンチ東半部の黒褐色シルト～粘土は、周辺における既往調査で確認されている 12 世紀から 13 世紀の削平・整地層と考えられる。

トレンチ西半部の淡灰色・灰白色シルトは、31 次調査 31-2 トレンチで検出されていたが、本次調査により、本トレンチ西部を中心とした範囲のみ分布することが明らかになった。本トレンチ西部では、本層を介して遺構検出面が分かれる。7 世紀後葉から 9 世紀の年代が想定される SB2022, 2023, SD2187, 2115, 2107 は本層下面より掘り込まれている。9 世紀末から 10 世紀前葉の SD2106 は本層により埋没、10 世紀中葉以降の SB2024, SD2100, 2104 は本層上面から穿たれている。層相から判断して、自然堆積層と捉えられないことや、これらの遺構の掘り込み面の様相からみて、本層は整地土として敷設されたと考える。本層の形成時期を示す遺物は少ないが、SD2106 の出土遺物からみて、10 世紀前葉と考えられる。

黒褐色シルト～粘土及び淡灰色・灰白色シルトの下位は、古代以降の基盤層である黄褐色シルト～粘土がみられるが、トレンチ南西部ではグライ化した淡灰色シルトとなる。トレンチ南西部で行った深掘り調査では、グライ化した淡灰色シルトの下位にラミナが認められる灰色粗砂が確認された。この灰色粗砂は、微高地 1 形成層の一つであり、既往の調査において縄文晚期土器の包含が確認されている粗砂層に対比されるものと考えられる。

各層からの出土遺物 (図 200)

294 ～ 314 は、2 層及び遺構面からの出土遺物である。302 は須恵器甕の胸部片の内面を利用した転用硯であり、破断面に磨滅痕が及んでいる。転用硯（303）は、須恵器杯の内面に強い磨滅痕が確認できる。304 は風字硯であり、下面及び側縁にはケズリ、内面に磨滅痕が確認できる。軒丸瓦（305）は周縁の巻線のみであり型式不明となる。312 は鹿角袋の刀子、鉄器片（314）は鉗具の可能性がある。308 ～ 311 は白色凝灰岩片である。

②検出遺構・出土遺物

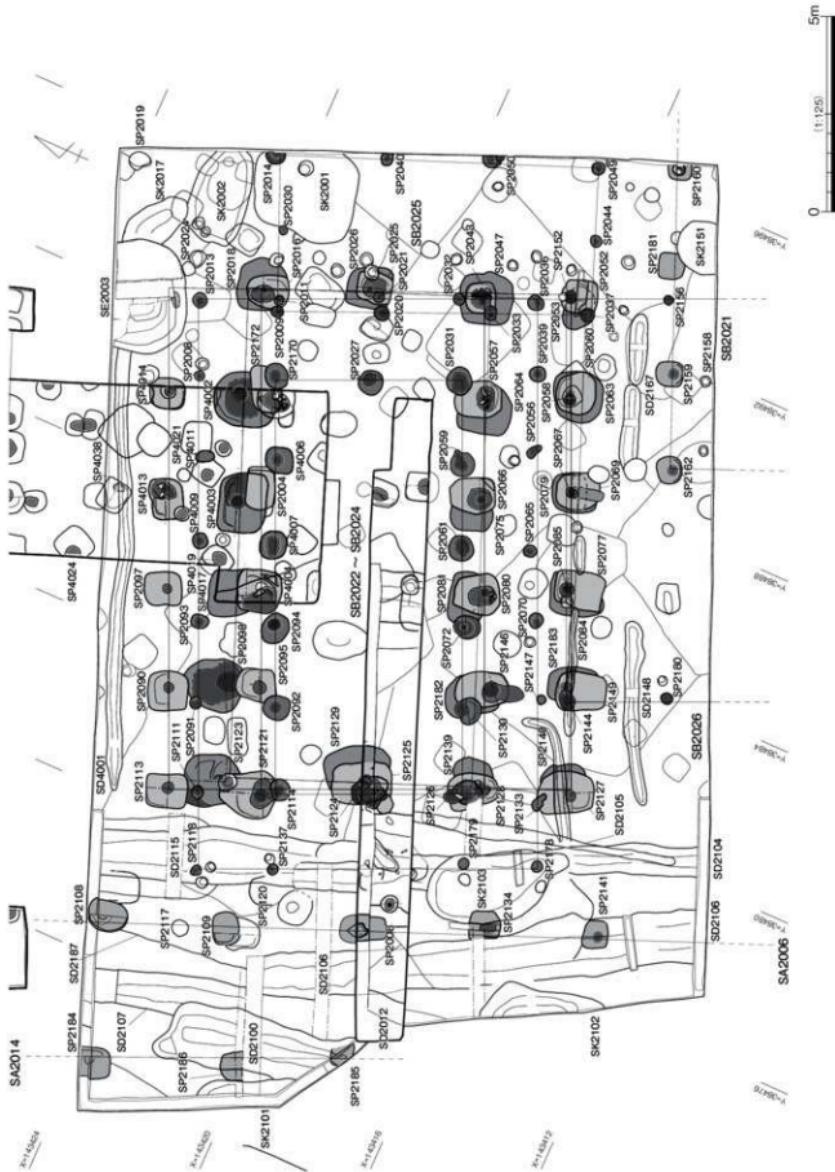
SB2022 (図 201 ～ 203)

33-2 トレンチ中央で検出した東西棟の片廻建物である。建物敷地の区画の機能が想定できる東西溝 SD4001, 2148, 2167 に挟まれた約 189 m² (13.5 × 14 m) の範囲に、本建物を先駆けとして SB2023, SB2024 の順で建て替えが行われる。

身舎は梁行 2 間 (6.2 m)、桁行 5 間 (12.5 m) の柱配置に対して、南平側一面に廻をもつ。建物主軸は座標北より 112° 西偏し、身舎の床面積は 77.5 m²、廻を含めると 109.18 m² を測る。柱掘方の平面規模は、身舎で長軸 1.1 ～ 1.6 m、短軸 1 ～ 1.4 m の隅丸長方形を基本とし、検出面からの深さは 0.55 ～ 0.9 m を測る。柱掘方の埋土は、細かな単位で入念に込められた黒色粘土・黄褐色粘土の偽縛を中心とするが、単位によっては粘性が強い真砂土が多く含まれている。この真砂土は、微高地を形成する基盤層に含まれず、遺跡周辺の花崗岩地質の山麓部で採取が可能と考える。

多くの柱穴が SB2023 と重複するため十分な断ち割り調査が行えていないが、北西隅柱 SP2123、北側柱 SP4002, 4003 では径 0.25 ～ 0.3 m の柱痕跡が検出された。また、柱掘方の途中で柱痕跡が途切れるなど埋土に不整合が確認されるとともに、掘方壁面にも階段状の食い違いが認められたため、最低 1 回の改修が行われたことを想定しておきたい。本建物のうち、当初の段階を SB2022 a、その後を SB2022 b と呼称する。なお、各柱穴の土層注記においても a, b の記号を付することで、諸段階を区分する。

図 198 33-2T 造構平面図



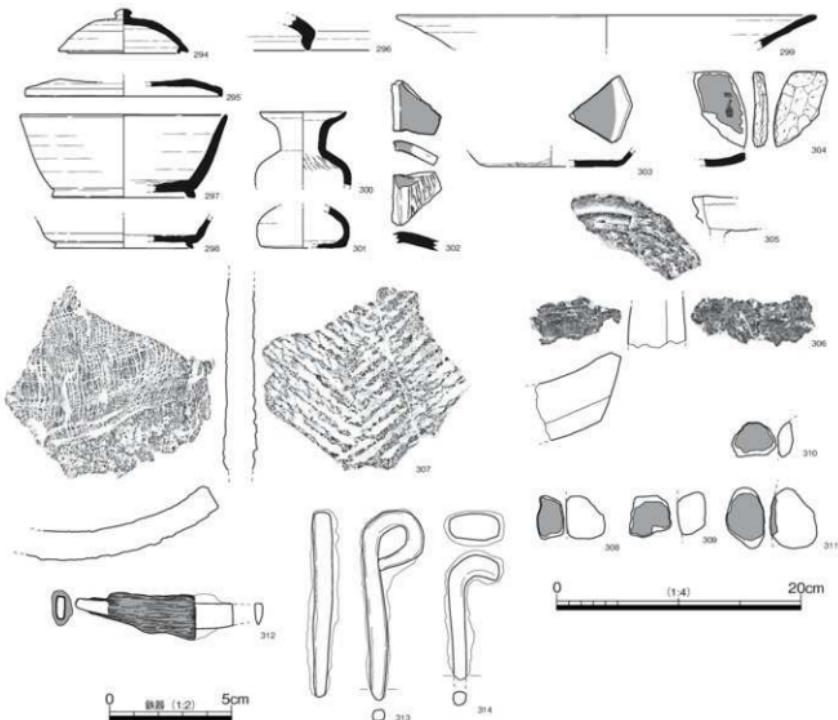


図200 33-2 Tr2 層遺構面出土遺物

柱痕跡が確認されているのは SB2022 a 段階の SP4002, 4003, SB2022b 段階の SP2123 のみであり、SB2022 b 段階は、SP2098において抜き取り痕跡が確認されている。これららや柱掘方から推定した柱間は、梁行 3.1 m、桁行 2.4 m と推定できる。

南の平側の廂の柱掘方は、後出する SB2023 の廂柱穴と重複が激しく、正確な平面規模をうかがい知ることが困難であるが、比較的広範囲に掘方を検出することに成功した SP2084, 2063 を主たる材料として、長軸約 1.2 ~ 1.4 m、短軸約 1 m の規模を推定することができ、これらは身舎の柱穴と比較して遜色ないものである。廂の出は 2.4 m と推定され身舎梁行の 3 m に比べてやや短いが、柱掘方規模からみて、附廂ではなく身舎と一体的な屋根構造を推定しておきたい。

315 ~ 321, 9-90 ~ 92 は出土遺物である。これらの資料は、前述した建て替えの事実を把握する以前に取り上げたものがほとんどであり、段階別に提示することができないことをお断りしておく。

315, 316 は SP2098 の裏込土から須恵器甕、317, 318 は丸瓦片である。須恵器甕（315）は、7世紀末から8世紀前半の時間幅で捉えられる。須恵器甕（319）は SP2123 の裏込土から出土した。土師器杯（320）は建て替え後の SP4002 b 裏込土から出土したもので、7世紀後葉の畿内系土師器である。土師器甕（321）は SP4017 の上層から出土した。9-90 ~ 9-92 は、SP4003 の裏込土から出土したもので、31次調査時資料を再掲する。土師質土器杯（9-90）は 12世紀に下る資料であり、他の資料と比較して明らかに後出するものであることから、混入品と考える。須恵器杯（9-91, 92）は、7世紀末から8世紀前葉の資料とみられる。

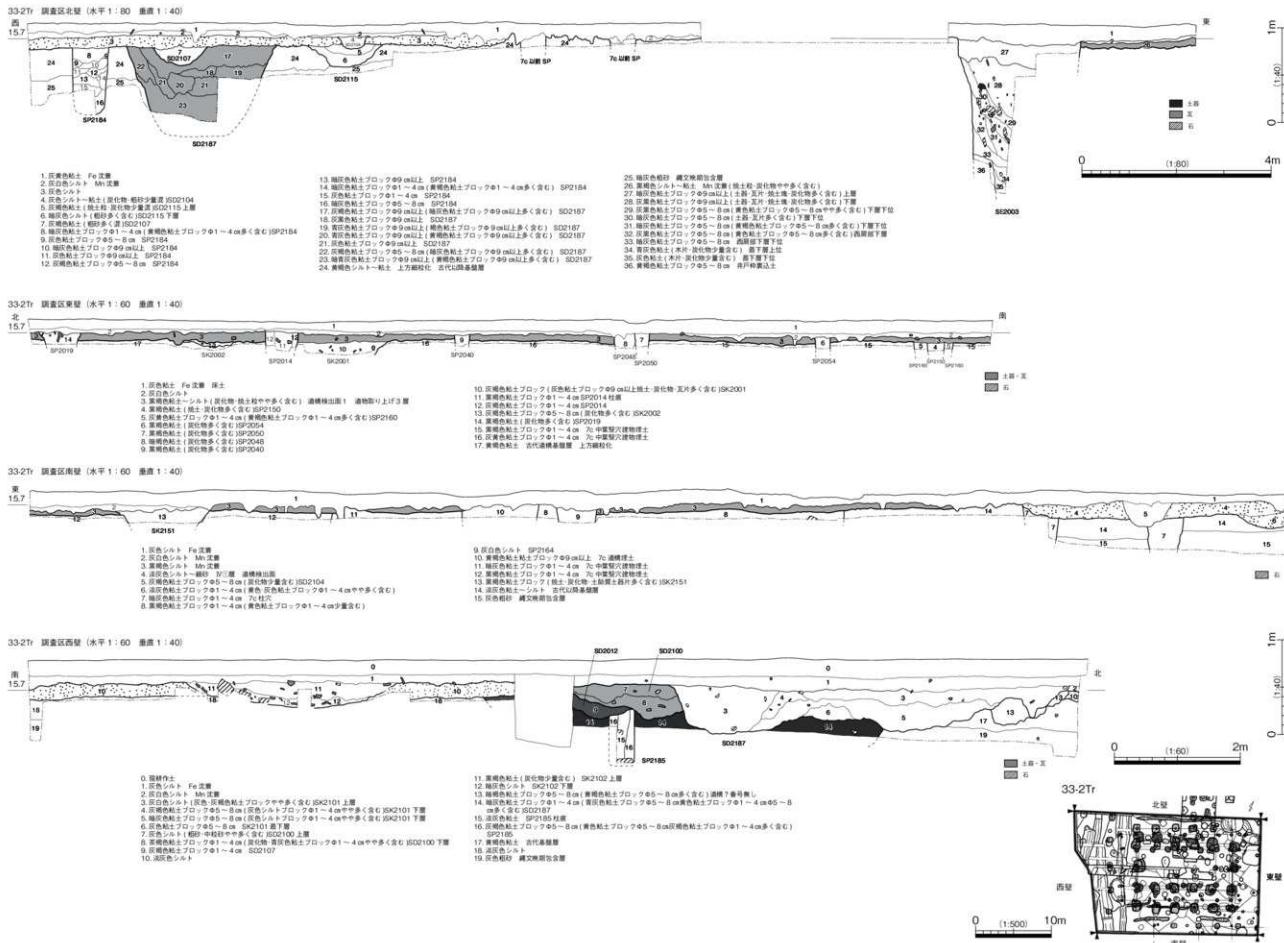
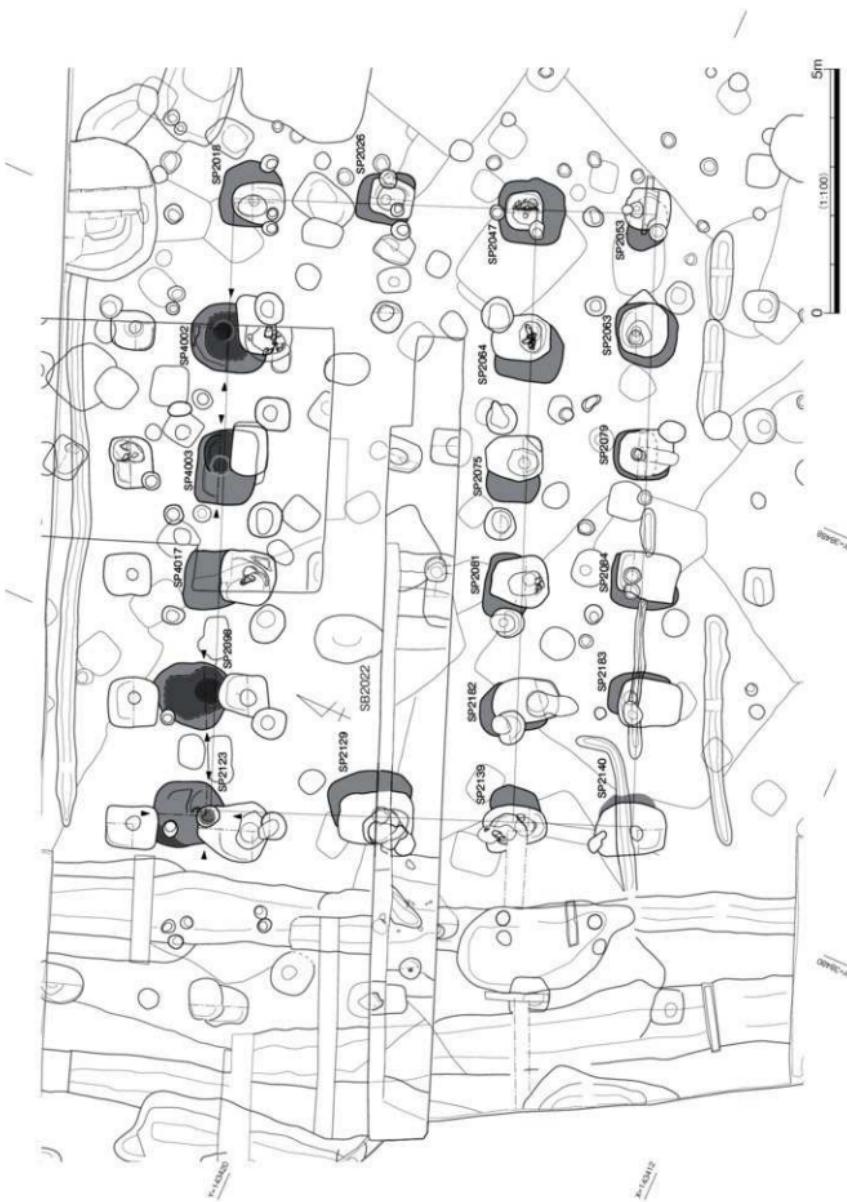


図 199 33-2Tr 各壁断面

図 201 33-2Tr・SB2022 平面図



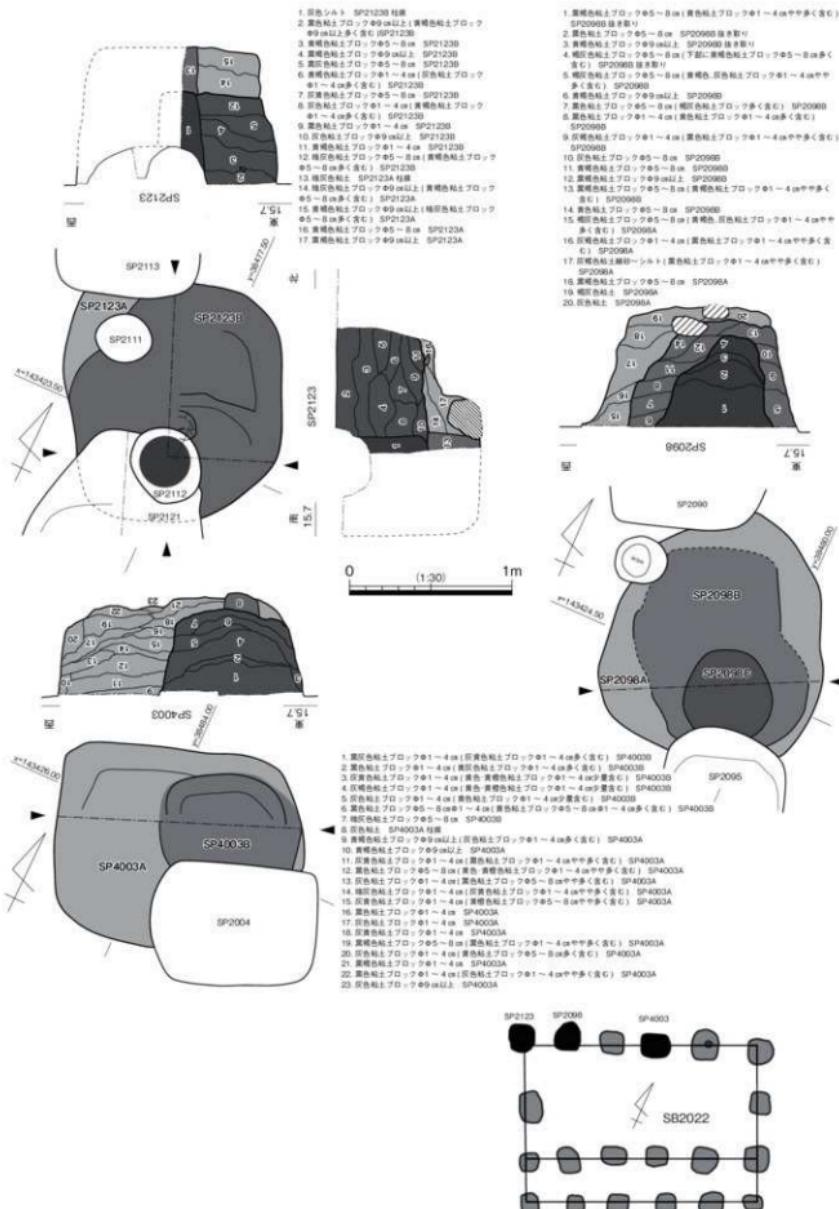


図202 33-2Tr · SB2022 断面図

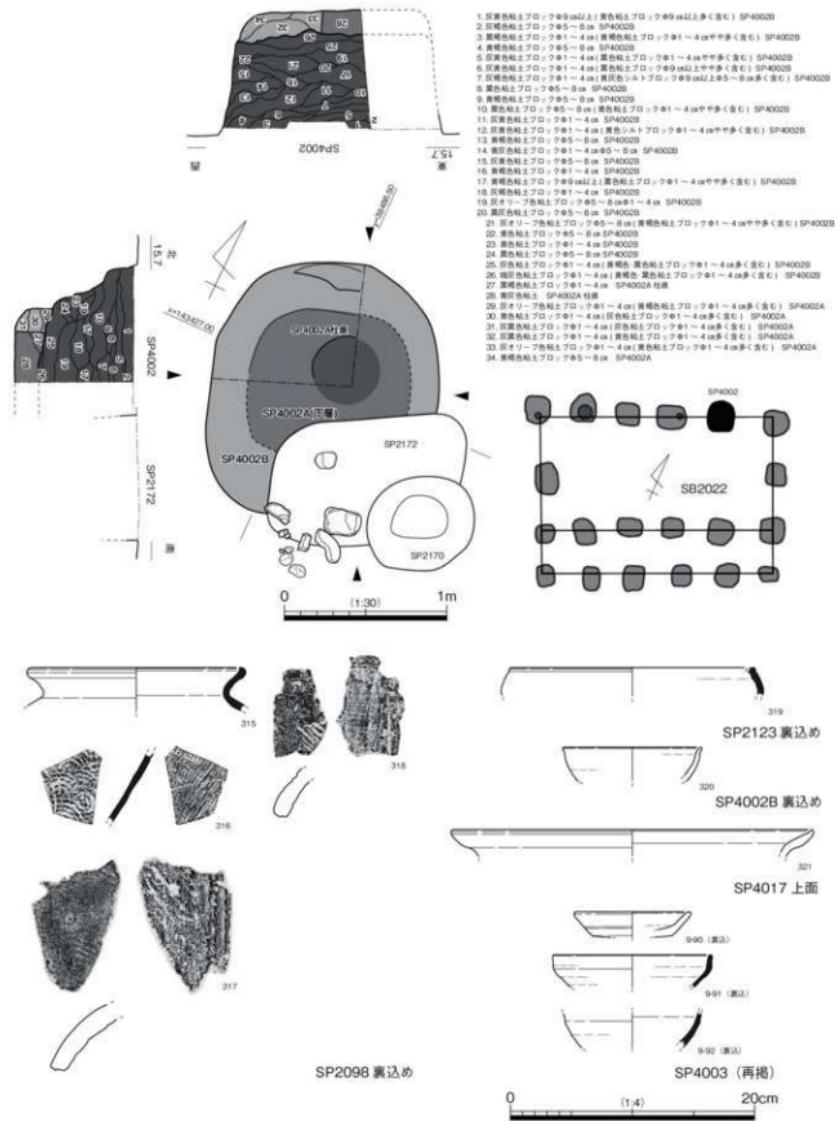


図 203 33-2Tr・SB2022断面図及び出土遺物

これらの出土資料の年代観は、一部の混入品を除いて8世紀前半を下る資料はみられない。また、建物方位が条里地割に合致する点を考慮すると、8世紀初頭を上限とすると考えられる。

柱掘方以外の資料は、本建物敷地を区画する機能が想定されるSP4001において、埋め戻しに伴い比較的の残存率の高い8世紀前葉の須恵器群（359～363）が一括廃棄されていることから、これらを上限年代として評価しておきたい。

一方で、改修後の段階（SB2022 b）及び廃絶年代を示す資料の提示は困難であるが、重複関係からみて、空白期を挟まずSB2023へ建て替えが行われたことは指摘できる。現状では、建物の耐用年数、改修が行われたことを踏まえて、9世紀前葉頃にSB2023へ建て替えられたと推定しておくことにとどめておきたい。なお、本建物の時期比定は、周辺の建物配置との関係で理解すべきである。

SB2023（図204～210）

SB2022の後身として建て替えられたと考えられる東西棟の二面廂建物である。身舎は梁行2間（5.8m）、桁行5間（12.9m）の柱配置に対して、南北平側の2面に廂をもつ。身舎床面積は74.82m²、廂を含めた場合には136.74m²を測り、建物主軸が座標北より114°西偏する。時期的に先行するSB2022とかなりの箇所で重複するが、建物主軸がSB2022と比べてやや西へ振れることにより、北側の入側柱の柱穴は外れた位置に設けられている。東梁行の柱穴掘方はSB2022の位置とほぼ一致するため、東梁行を建て替えに当たっての基準とした可能性が高い。

身舎の柱掘方の平面規模は、長軸0.8～1.2m、短軸0.8～1.1mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは0.5～0.7mである。東側梁行のSP2043の底面には、砂岩礫・瓦片を敷き詰めて入念な基礎固めを行っている。廂の柱掘方の平面規模は長軸0.9～1.2m、短軸0.9～1.1mの隅丸長方形ないし隅丸方形を呈し、検出面からの深さ0.4～0.5mを測る。廂柱掘方は、身舎に比べてやや小規模となっている。柱掘方の埋土は、細かな単位で込められているが、西側梁行のSP2125では白色粘土の偽礫が多くみられた。

断ち割り調査を多くの柱穴で行った結果、径0.2～0.25mの柱痕跡が確認され、身舎と廂での規模的な差違はみられない。これらの柱痕跡を基にした柱間は、身舎梁行で2.9m、同桁行で2.7mとなる。入側柱から廂の出は、南の平側で2.1m、北の平側は2.4mとやや長い。

多くの柱穴で柱抜取痕跡が確認されているが、中にはSP2057、2069、2125、2121、4004を典型として、通常の抜き取りとは異なる入念な埋め戻しを行っているものがみられる。SP2069では、当初の柱抜取内に柱痕跡が確認されていることを踏まえると、最低1回の改修が行われたと考えられる。この状況を踏まえて、本建物のうち、当初の段階をSB2023 a、改修後をSB2023 bとして区別しておきたい。なお、各柱穴の土層注記においてもa、bの記号を付することで、諸段階を区分する。

322～341、9-93～9-110（再掲）は本建物からの出土遺物である。須恵器杯（322）は北東隅入側柱SP2016の抜き取りから出土し、9世紀末から10世紀初頭の年代が想定される。須恵器転用硯（323）は蓋に内面を利用するもので、SP2016上層の出土。須恵器高杯脚（332）は、SP4004の上層から出土しもので、7世紀代に遡る。平瓦（324）はSP2057 bに伴うものである。土師器杯（325）はSP2095の柱痕跡から出土したもので、7世紀中葉と考えられる。326は土師器甕の口縁で、SP2095の裏込土からの資料。須恵器甕（327）、丸瓦（328）はSP2113裏込土から出土した。須恵器杯（329）はSP2146抜取、土師器甕（330）は同裏込土から出土した。土師器甕（331）は7世紀代の資料とみられ、SP2090の裏込から出土している。軒丸瓦（333）は瓦当部の小片でSP2128の裏込土から出土し、型式不明とせざるを得ない。土師器杯（334）はSP2128の裏込土から出土したもので、7世紀代の資料と考えられる。

平瓦（335～337）、丸瓦（338）はSP2090の上層から出土した。丸瓦（339）、不明鉄器片（340）はSP2121 b、不明鉄器片（341）はSP2121 a裏込土から出土した。

9-93～9-98は、SP4004 bに伴う資料である。土師質土器杯（9-93, 9-94）は小片ながら9世紀末から10世紀初頭の資料と考えられる。須恵器杯（9-95～9-97）は9世紀後葉から10世紀初頭の時間幅の中で捉えられる。

9-99はSP4004 aに伴う土師器高杯脚であり、6世紀後葉から7世紀前葉の古相を示す資料である。9-100～9-104はSP4013の上層から出土しているが、帰属する層位を確定できない。9-105はSP4014の柱痕跡、9-106, 9-107は同柱穴の上層から出土した。須恵器杯（9-108）土師質土器杯（9-109）はSP4018上面の石材群に伴って出土した資料

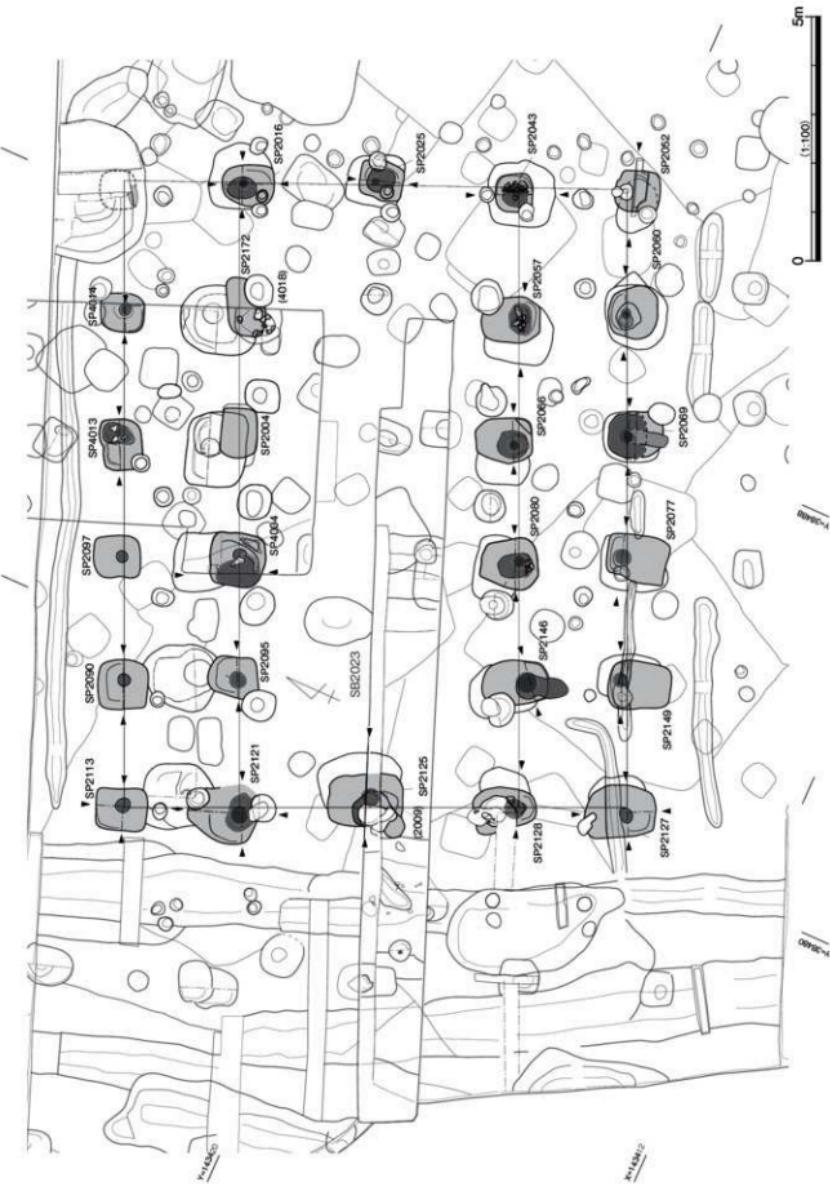


圖 204 33-2T1 · SB2023 平面圖

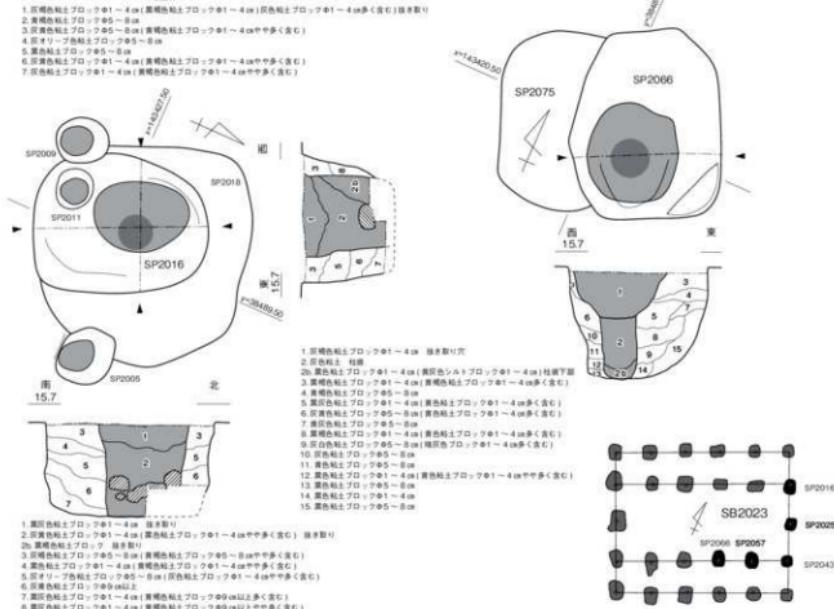
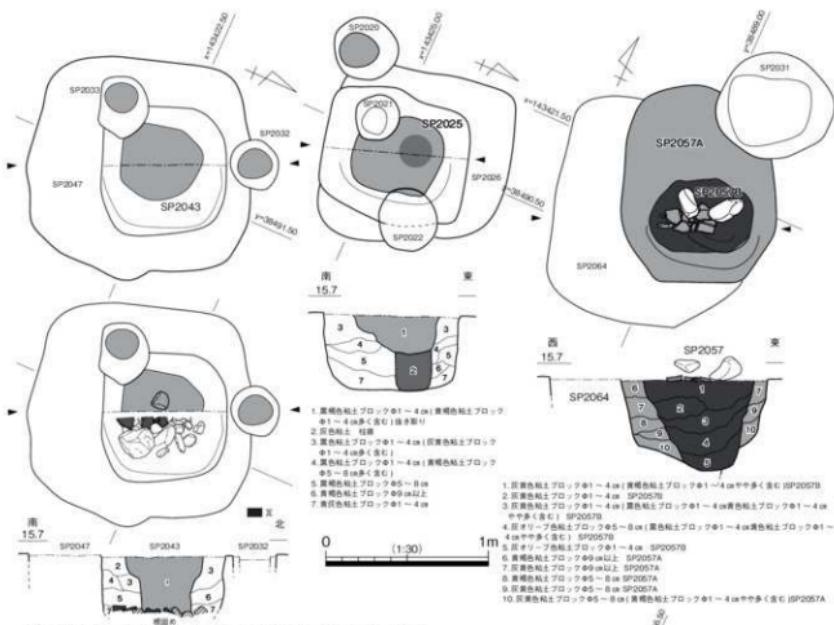


図 205 33-2Tr · SB2023 断面図 1

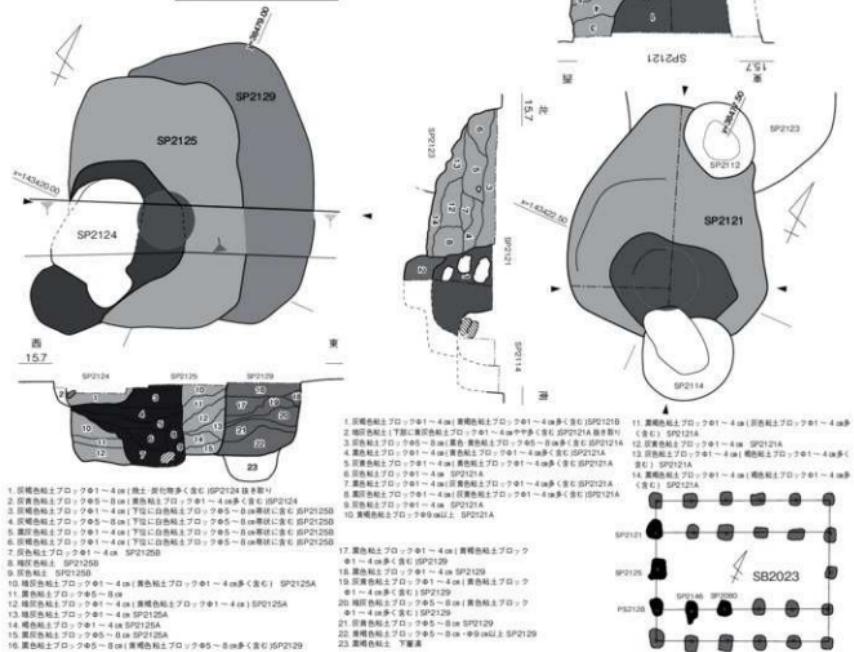
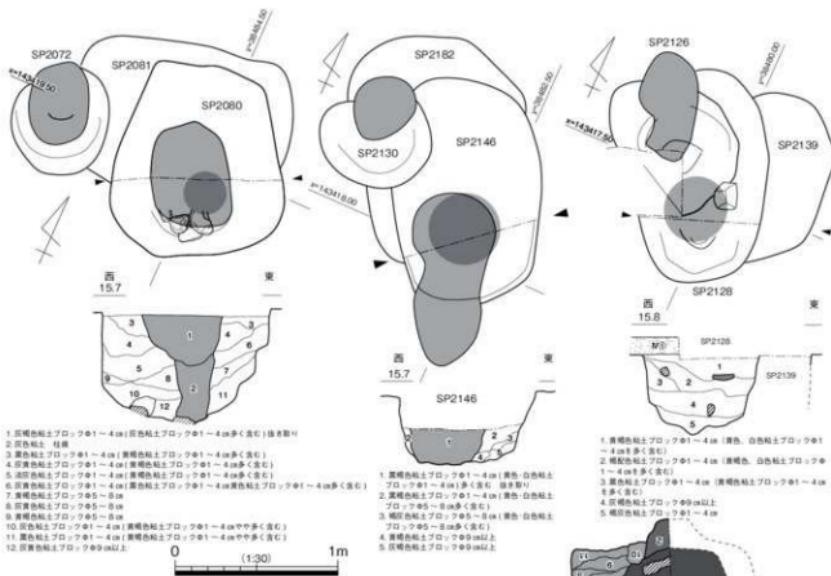


図 206 33-2Tr・SB2023断面図

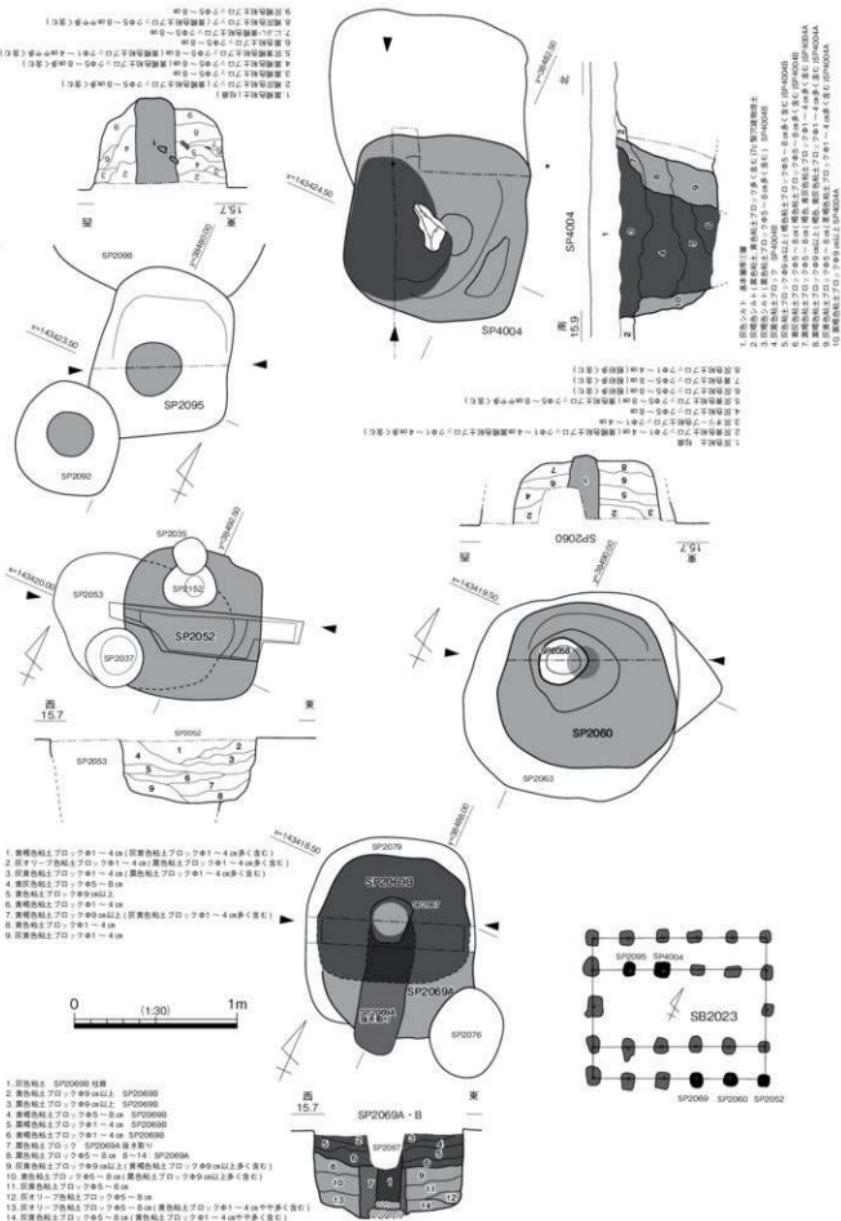


図 207 33-2Tr・SB2023 断面図 3

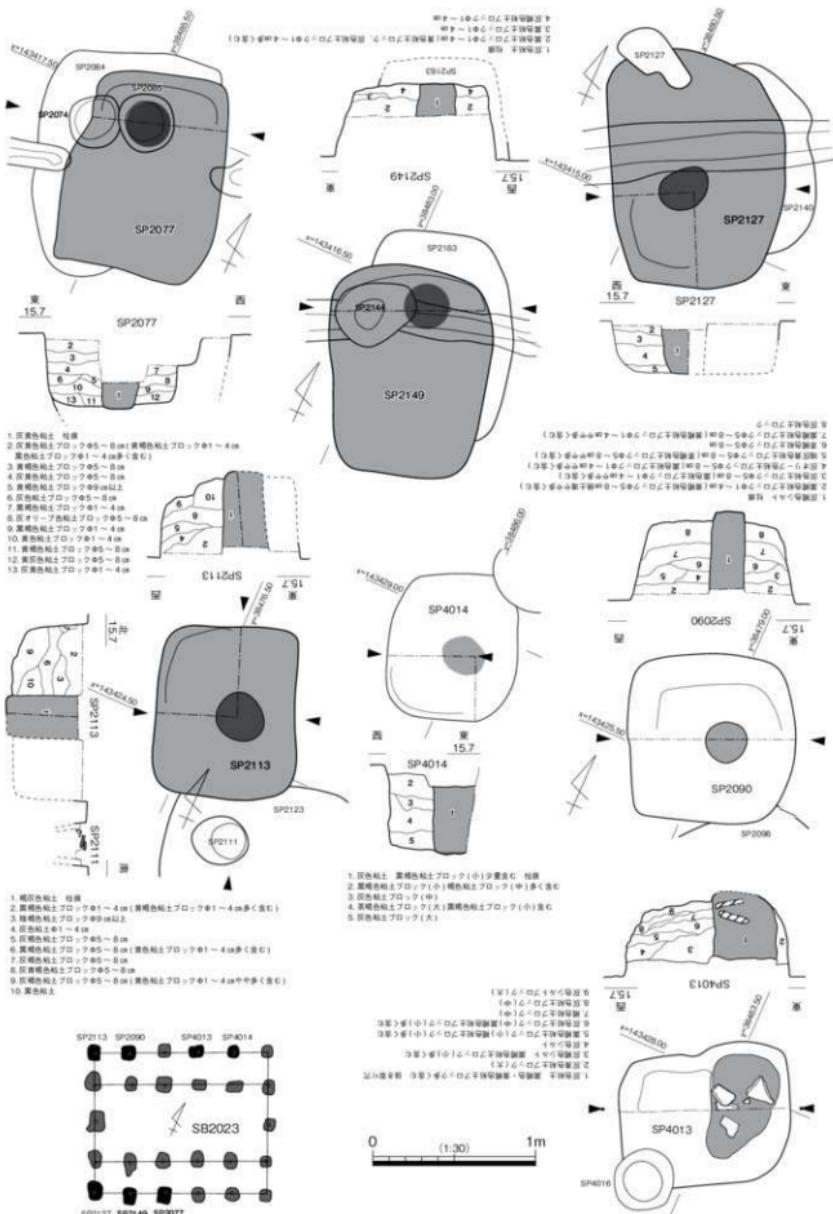


図 208 33-2Tr・SB2023 断面図 4

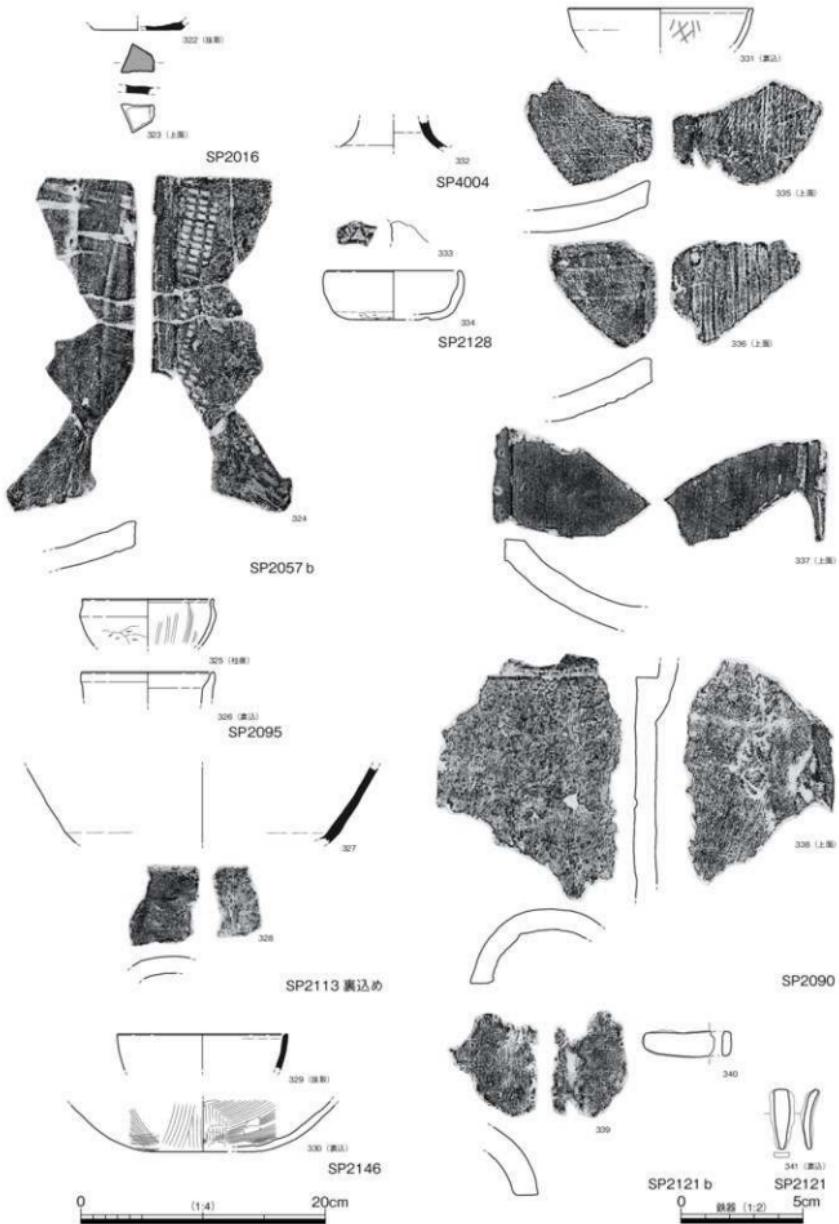


図 209 33-2Tr · SB2023 出土遺物 1

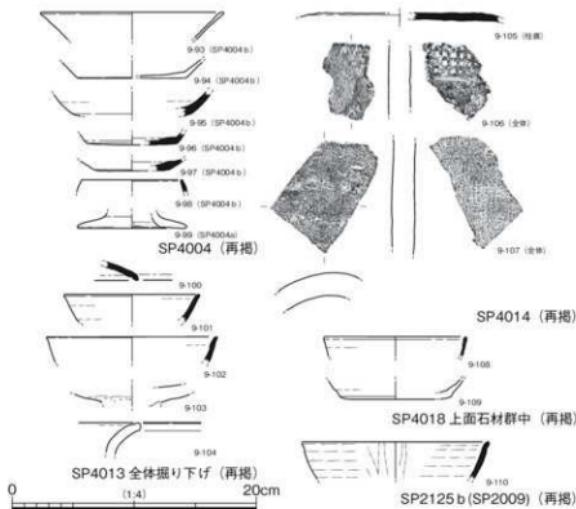


図 210 33-2Tr · SB2023 出土遺物 2

である。土師質土器杯 (9-109) は 10 世紀後葉以降に下がる可能性があるが、柱掘方内の資料ではないことを留意する必要がある。須恵器杯 (9-110) は SP2125 b に伴う資料であり、9 世紀末から 10 世紀初頭に帰属したものと考える。

以上の出土遺物のうち、時期決定に有効な資料は北東隅入側柱 SP2016 抜取の須恵器杯 (322)、SP4004 b に伴う土師質土器杯 (9-93, 9-94) 須恵器杯 (9-95 ~ 9-97)、SP2125 b の須恵器杯 (9-110) である。これらの資料は 9 世紀後葉から 10 世紀初頭の時間幅に納まり、最も後出する資料を取り上げると、建て替え又は改修と抜き取りによる廃絶の時間差を抽出が困難な状況にある。

しかし、資料の層位的な取り上げが不十分であったことは否めないため、ここでは SB2023 b とした改修が 9 世紀後葉に行われ、その後の 9 世紀末から 10 世紀初頭に廃絶したと考えておきたい。

一方で、SB2022 の廃絶年代と同様に、本建物の造営の年代を示す資料として適当なものはみられない。また、先行建物である SB2022 との重複関係からみて、空白期を挟むことは想定できない。

ここでは、SB2022 の建て替えとして 9 世紀前葉に造営された後、9 世紀後葉の改修を経て、9 世紀末から 10 世紀前葉に廃絶したと考えておくが、詳細な時期比定は周辺の建物配置との関係で理解すべきである。

SB2024 (図 211 ~ 213)

SB2023 の後身となる東西棟の四面廂建物である。SB2022, 2023 を切り、SK2103 に切られる。身舎は梁行 2 間 (4.8 m)、桁行 5 間 (15 m) の柱配置に対して、四面廂をもつ。SB2023 との位置関係は、東妻側の廂の出を SB2023 の梁行に、身舎西側梁行を SB2023 の西側梁行に重複させている。四面廂を採用したために、西妻側の廂の出は、SB2023 の梁行よりも西側へ延びる。建物主軸は座標北より 114° 西偏し、身舎の床面積は 72 m²、廂を含めた場合は 127.02 m² を測る。建物西半分の柱掘方は、整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁 3 層・西壁 10 層、南壁 4 層）上面において検出され、先行建物である SB2022, 2023 の柱掘方と掘り込み面が異なっている。柱掘方の平面規模は、身舎で長軸 0.6 ~ 0.8 m、短軸 0.4 ~ 0.6 m の円形乃至梢円形を基本とし、検出面からの深さは 0.3 ~ 0.4 m を測る。廂柱掘方の規模は、径 0.2 ~ 0.3 m の円形を呈する。身舎と比べて小規模なものとなるが、基本的に身舎柱にそろえた位置に配置されている。廂柱穴掘方の平面規模は、身舎の屋根と非一体化の廂の屋根構造を反映したものと考えられる。

柱掘方の埋土は、灰褐色粘土の偽礫を中心とするが、やや粗い単位で込められている。身舎を中心にして、多くの柱掘方で抜き取りが行われているが、南入側柱 SP2072 では径 0.15 m の柱痕跡が検出され、北西隅柱の SP2114 抜き取り下位の底面では、拳大の砂岩礫を敷き詰めた基礎固めが確認された。抜き取りを含めた現況から推定される柱間は、梁行 2.4 m、桁行 2.1 m を測る。廂の出は、南平側で 1.9 m、北平側で 2 m、両妻側で 2 m である。

342 ~ 358, 9-111 ~ 9-114 (再掲) は出土遺物である。土師質土器 (342) は、SP2059 の抜き取りからの出土。

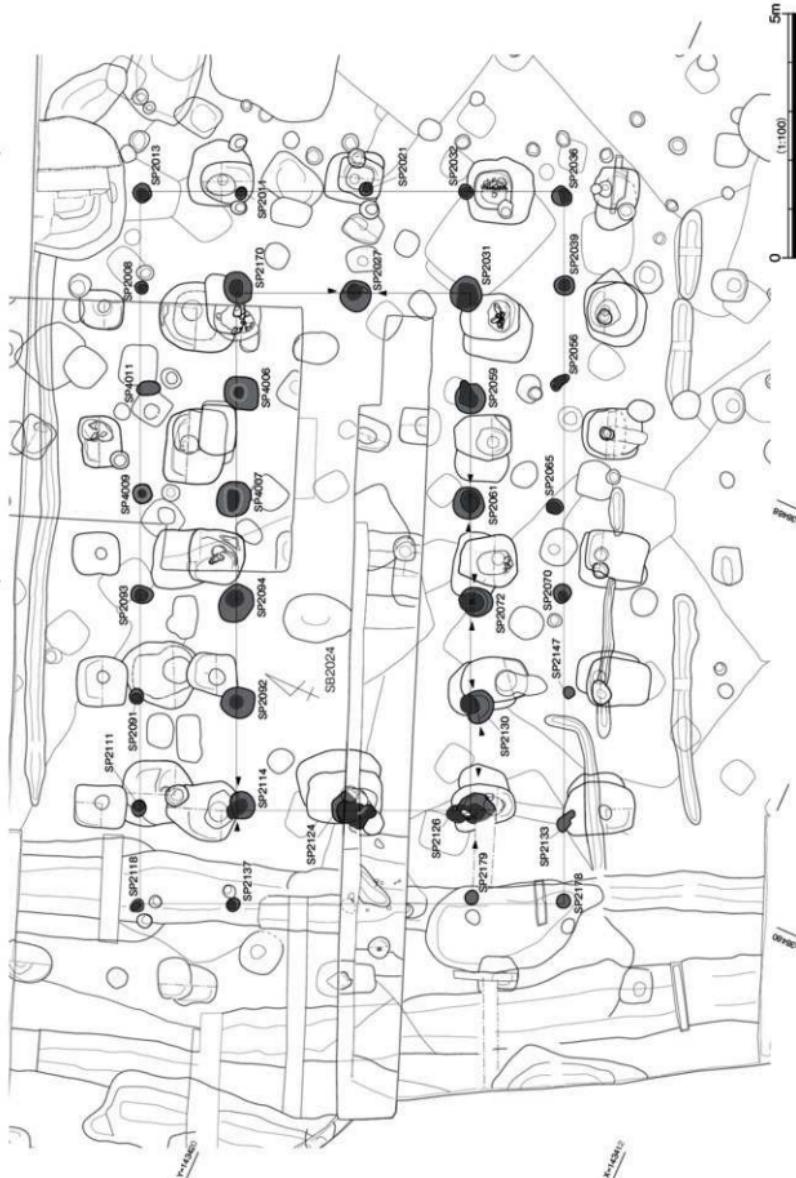
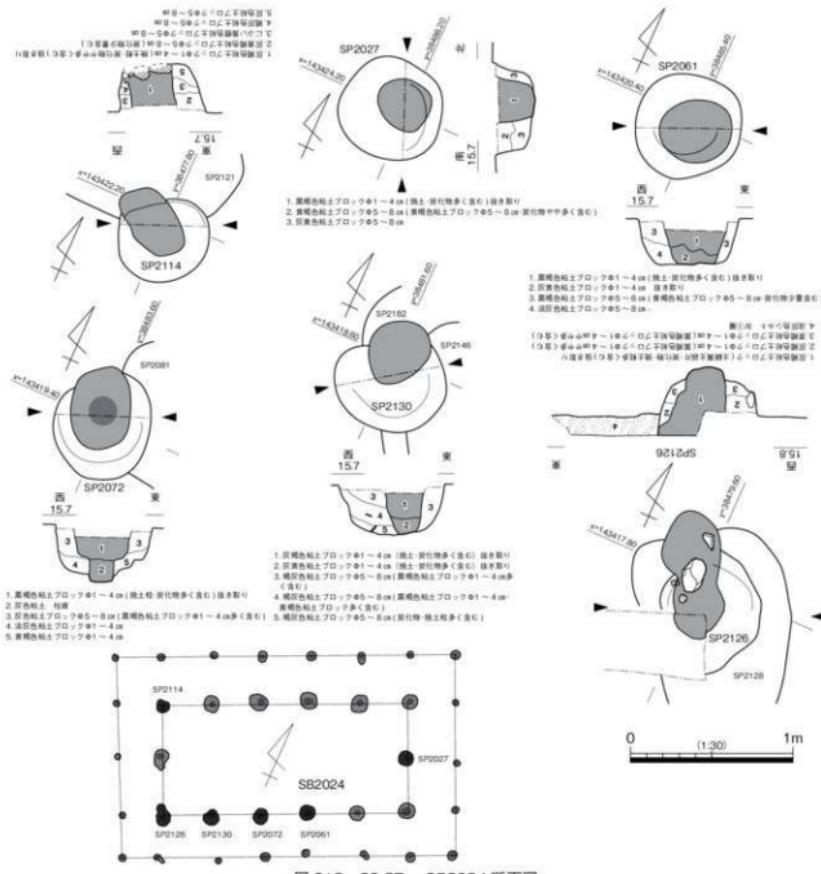


图 211 33-21r·SB2024 平面图



344, 345は大型の鉄釘とみられる。SP2072の353、SP2126からの356～358をはじめとして、抜き取りからの大型鉄釘の出土が目立つ。SP2146の抜き取りから出土した土師質土器杯（346）、土師質土器台付皿（347）は11世紀前葉の資料と考えられる。SP2130の土師質土器杯（349）は10世紀前葉の資料であるが、帰属する層位は確定できない。土師質土器（350）はSP2072の裏込土からの出土であり、10世紀前葉から中葉の時間幅で捉えられる。土師質土器杯（351）はSP2072の抜き取りからの資料であり、11世紀後葉に比定される。土師質土器皿（9-111）はSP4009の上層出土であり、11世紀後葉の資料とみられる。SP4007抜き取りの土師質土器杯（9-112）、SP4011上層の土師質土器台付皿（9-114）についても、11世紀後葉に比定されるものである。

以上の出土遺物の帰属時期や整地土である淡灰色・灰白色シルト（北壁3層・西壁10層、南壁4層）の年代観より、本建物は10世紀前葉に造営され、11世紀後葉に廃絶したものと考えておく。先行建物のSB2022, 2023と比較して改修痕跡が認められないにも関わらず、長期の継続期間を想定することになるが、現状では層位・出土遺物の時期比定に基づき所見を提示しておきたい。

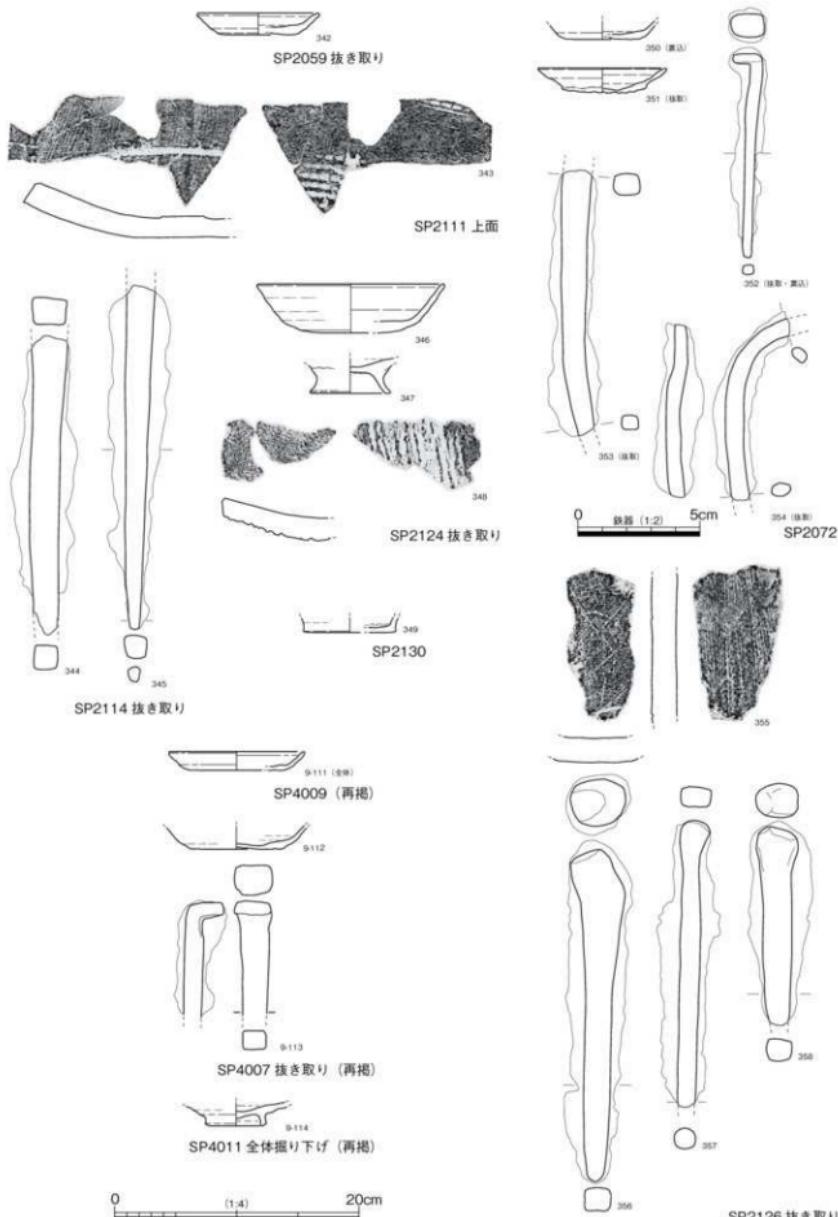


図 213 33-2Tr · SB2024 出土遺物

SD4001.2148.2167 (図 214.215)

SB2022. 2023. 2024 の南北に位置する東西溝であり、SD4001 及び SD2148 の西端は、SB2022. 2023 の西妻の柱筋に一致し、SD4001 は SE2003 に切られるものの SB2022. 2023 の東妻を越えず、SD2167 も同様に収束するなど、平面位置からみてこれらの建物との関係性を指摘できる。埋土の状況から、基壇外装に伴う据付とは考えられないため、SB2022 の適営開始時に建物敷地を区画・明示するために掘開されたと考えられる。一方、その後の SB2022 から SB2023. 2024 への建て替えにおいても、建物敷地が区画範囲を越えるものではないことからみて、埋め戻された溝上面において基壇以外の何らかの区画表示施設が存在していた可能性がある。

SD4001 は、SB2022. 2023. 2024 の北側に位置し、上面幅 0.35 m、深さ 0.15 m を測り、U 字形の断面をもつ。埋土は褐灰色シルトの偽礫の単層である。底面に流入等に起因する機能時堆積層がみられないため、掘開後の早期に埋め戻されていると考えられる。基壇外装の据付痕跡は確認できない。西端付近では、須恵器・平瓦・砂岩礫がまとまって廃棄されていた。須恵器は比較的残存率の高いものであり、埋め戻しの年代を示す良好な資料となる。

359 ~ 365 は出土遺物である。須恵器蓋 (361) の内面には「女」の墨書が確認できる。平瓦 (364. 365) は、接合関係はみられないが同一個体とみられる。須恵器の年代観は 8 世紀前葉にまとまっている。

SD2148. 2167 は SB2022. 2023. 2024 の南側に位置し、上面幅 0.35 m、深さ 0.1 m を測り、緩やかに落ち込んだ断面をもつ。埋土は灰褐色シルトの偽礫からなる単層である。両者は接続していないが、残存深度からみて、元来は同一溝であった可能性が高い。調査範囲内で出土遺物は確認できなかった。

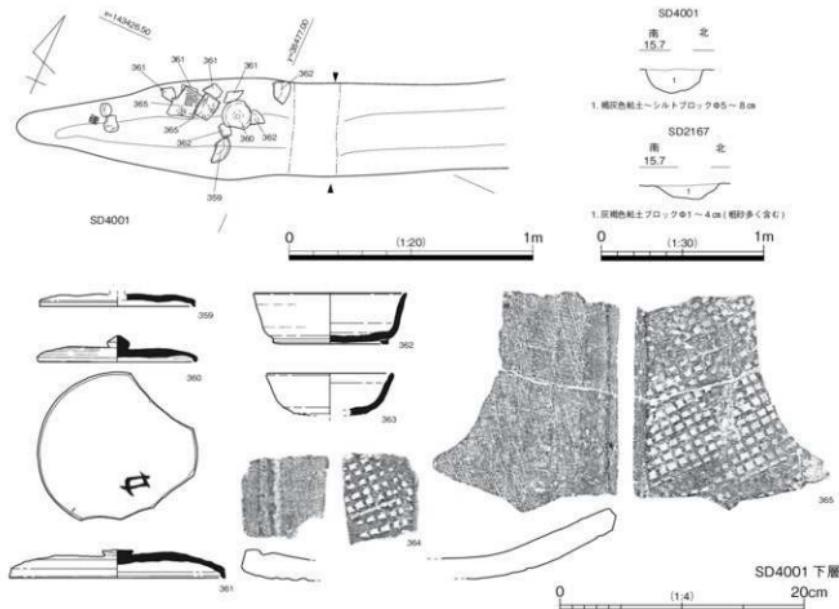


図 215 33-2Tr・SD4001 西端遺物出土状況、断面図及び出土遺物

SA2006 (図 216.217)

33-2 トレンチ西部で検出した南北方位の樋である。整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁 3 層・西壁 10 層、南壁 4 層）下面で検出し、SD2187 を切り、SD2106 に切られる。北から、SP2108. 2109. 2008. 2134. 2141 が、座標北から 22° 西偏する方位をもち、柱間 1.5 m で南北方位に並ぶ。SP2109. 2008. 2134 は SB2022. 2023 の梁間の柱筋に一致しているため、これら建物と同時に併存する樋と考えられる。

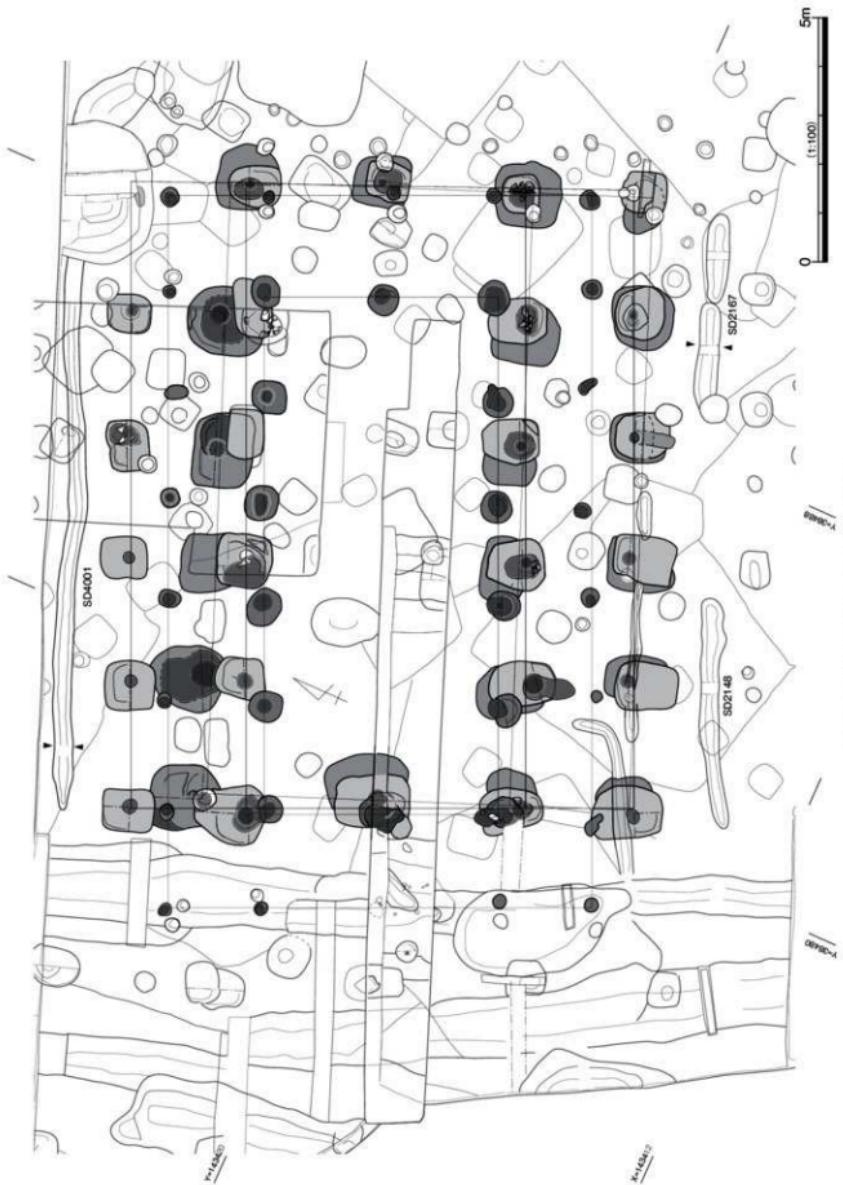


図 214 33-2Tr・SD2167・4001 平面図

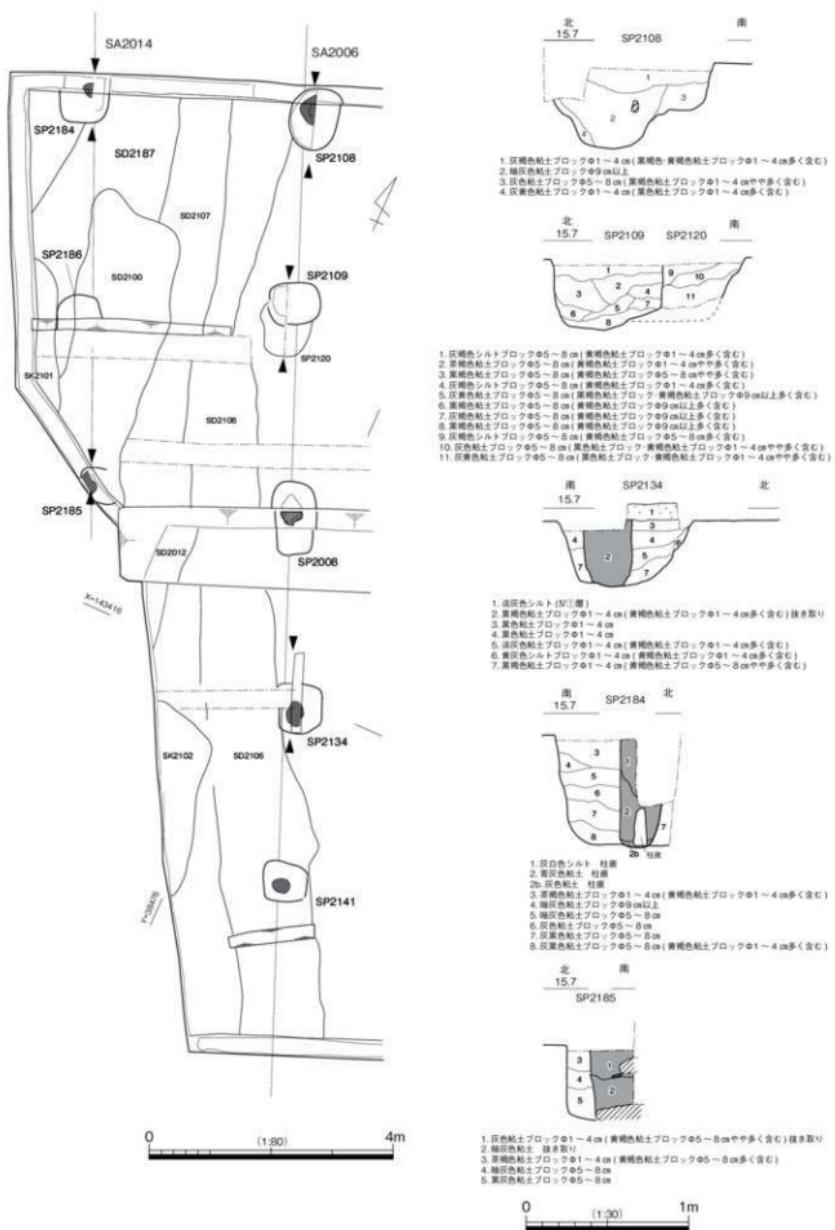


図 216 33-2Tr・SA2006.2014 平断面図

SP2185は、柱掘方の平面規模は長軸1.2m、短軸0.6mの隅丸方形を呈し、底面には厚さ0.2mの安山岩製の礎板石が据え付けられている。

須恵器鉢(366)はSP2134の断ち割りより出土したもので、柱掘方内の層位を確定できないが、8世紀代の資料と考えられる。SB2022、2023の梁間の柱筋に一致していることを踏まえると、8世紀前葉から10世紀前葉に属すると考えられるが、須恵器鉢(366)の年代観やSD2106との層位関係を踏まえると、SB2022が機能した8世紀前葉から9世紀前葉に帰属する權と考える。

SA2014 (図216.217)

33-2トレンチ北西部で検出した柱列である。SD2187を切り、SD2100・SK2101に切られる。SA2006と同じ座標北22°西偏する方位で、北よりSP2184、2186、2185が並ぶ。柱間はSP2184・2186間では約3.6m、SP2186・2185間では約2.4mと一定ではないが、SP2184、2185とSA2006の柱筋が一致することを重視し、柱列として提示しておく。現状で建物と權の判断はできない。

SP2108は、柱掘方の平面規模が長軸1m、短軸0.5mの隅丸方形を呈する。柱掘方は、残存深度0.65mを測り、径0.25mの柱痕跡の下部には柱根(369)が遺存しているため、廃絶に際しては柱材が切断されたと考えられる。SP2185の底面には安山岩製の礎板石の据付を行っている。

須恵器横瓶(368)はカキ目を失った7世紀後葉から8世紀初頭の資料と考えられるため、SD2187からの混入品と考えられる。時期決定可能な出土遺物はみられないが、東側のSA2006と方位・柱筋が一致することから判断して、8世紀前葉から9世紀前葉に帰属するものと考える。

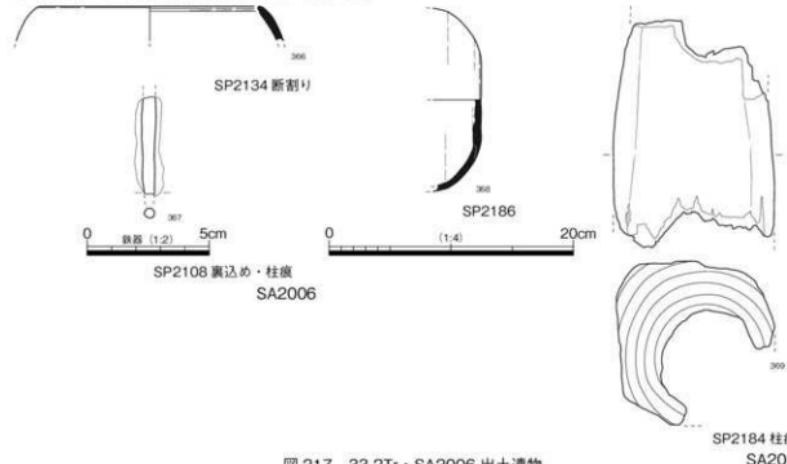


図217 33-2Tr・SA2006出土遺物

SB2020 (図218.219)

33-2トレンチ北部で検出した掘立柱建物である。SB2022、2023、SD4001に切られる。31次調査31-4トレンチの成果と合わせて建物復元を行った。梁行2間(3.1m)、桁行3間(4.5m)の柱配置をもち、建物主軸は座標北から73°西偏する東西棟である。

柱掘方の平面規模は、長軸0.8～1m、短軸0.7～0.8mを測る隅丸長方形、隅丸方形を呈する。断ち割りを行ったSP4038では径0.2mの柱痕跡を確認し、SP4019、4024では抜き取り痕を検出している。これらからみた柱間は、梁行、桁行ともに1.8mと推定できる。

SP4038の裏込土から土師器甕の胸部片が出土しているが、詳細な時期決定には至らない。真北を指向した建物方位からの推定により、7世紀後葉から8世紀初頭に属する建物と考えたおきたい。

圖 218 33-1Tr 正方位主軸建築・柱穴等分布図



真北を指向する33-1トレーナーのその他建物・柱穴（図218）

33-2トレーナーでは、SB2020以外にも真北を指向する建物・柱列が検出されている。平面検出のみにとどまるものが多いが、これらは7世紀中葉とみられる堅穴建物を切り、8世紀前葉以降の諸遺構に切られるという層位関係を有している。切り合による欠落部が多く、復元に至らなかったものが多いが、7世紀後葉から8世紀前葉の遺構形成の状況をしる上で重要と考えられるため、図218（仮11-37）に分布図を掲げて概況を説明しておきたい。

SB2206は、SB4053東側に位置する3間（6m）×3間以上（4.8m）の柱配置をもち、建物主軸は座標北から72°西偏するもので、東西棟となる可能性が高い。

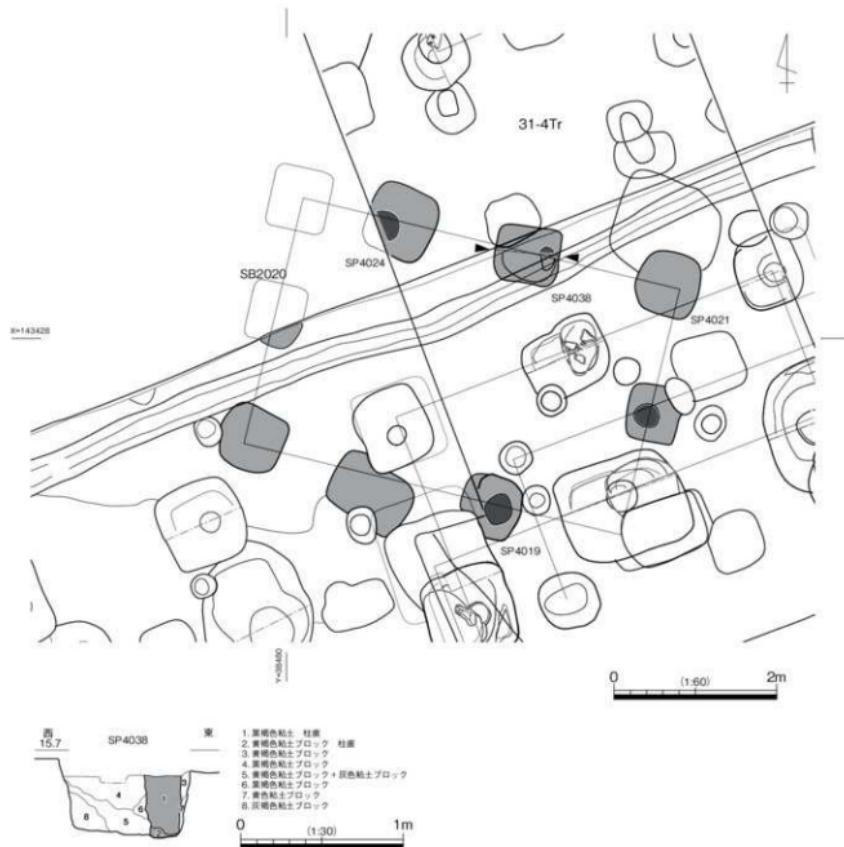


図219 33-2Tr・SB2020 平面図

SB2025,2026 (図 221)

33-2 トレーナー東部・南部で検出した掘立柱建物である。SB2025は、梁行2間(4m)、桁行3間(8m)の柱配置をもち、建物主軸は座標北から22°西偏した南北棟である。柱掘方は径0.3~0.4mの円形を呈し、径0.1mの柱痕跡が確認できる。柱掘方の断ち割りは行っていないが、上層より370~374の出土遺物がみられ、12世紀に帰属する建物と考える。

SB2026は、梁行2間(2.4m)以上、桁行4間(10.2m)の柱配置をもち、建物主軸は座標北から113°西偏するもので、南側桁行は調査区外となる。柱掘方は径0.2~0.3mの円形を呈し、径0.1mの柱痕跡を確認できる。SP2144の柱痕跡より土師質土器皿(375)、SP2058の柱痕跡より土師質土器杯(376)が出土しており、12世紀に廃絶した建物と考える。

SB2021(図 220)

33-2 トレーナー南東部で検出した東西方向の柱列である。東より SP2162, 2159, 2181, 2160 が座標北より113°西偏した方位で並ぶ。SP2162, 2159, 2160 では径0.2mの柱痕跡が確認されており、2.5mの柱間を推定できる。現状で、建物と柵を判別する材料はない。

調査範囲内で時期決定可能な出土遺物はみられなかったが、埋土の特徴からみて、8世紀前葉から中葉に帰属する遺構と考えておきたい。

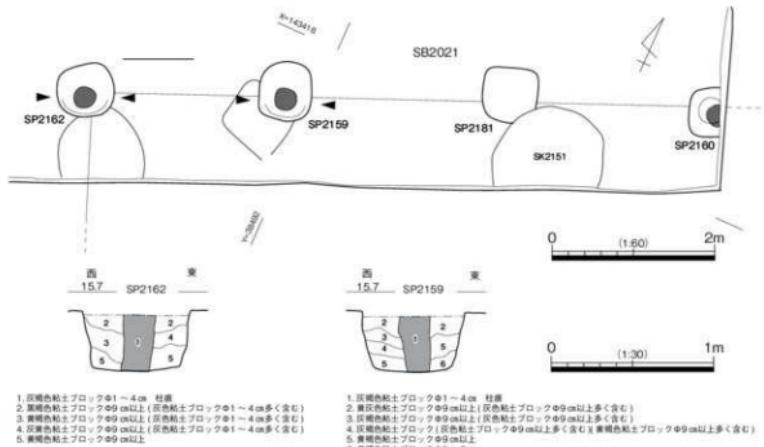


図 220 33-2Tr - SB2021 平面図

堅穴建物群(図 222)

33-2 トレーナーの西部及び南東部を中心に堅穴建物を検出している。堅穴建物は、顕著な重複が認められるが、真北を意識した主軸方位に共通性をもっている。31次調査 31-2 トレーナーの壁面の観察では約0.25mの深さを有し、層厚0.1mの貼床を敷設している。検出面上においては竈の付設を確認していない。

調査範囲内で時期決定に耐え得る出土遺物がみられないが、7世紀後葉以降の全ての遺構に切られていることや、周辺の調査成果からみて、7世紀中葉の遺構群と考える。

その他の柱穴・土坑出土遺物(図 223)

図223には、33-2 トレーナーで検出された柱穴・土坑よりの出土遺物のうち、建物復元や詳細な報告に至らなかった資料をまとめて掲載している。本調査区の遺構形成時期を示す資料として提示しておきたい。

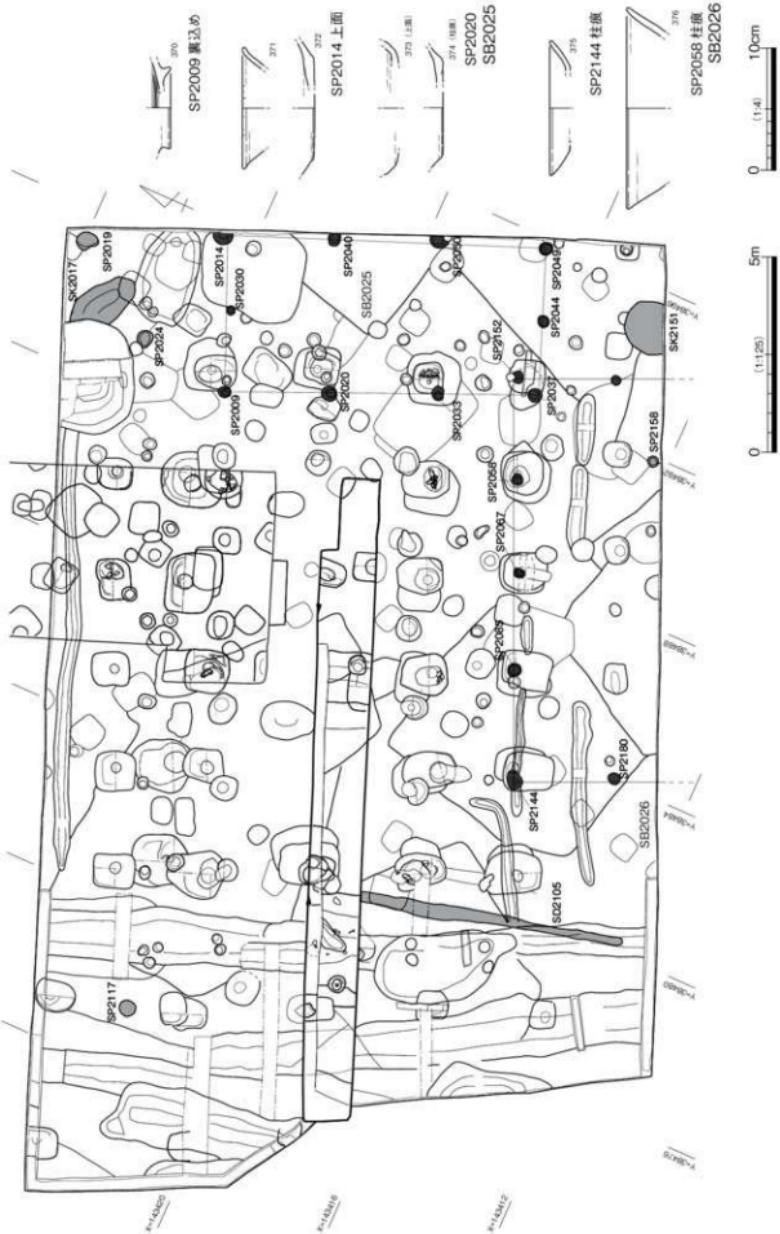
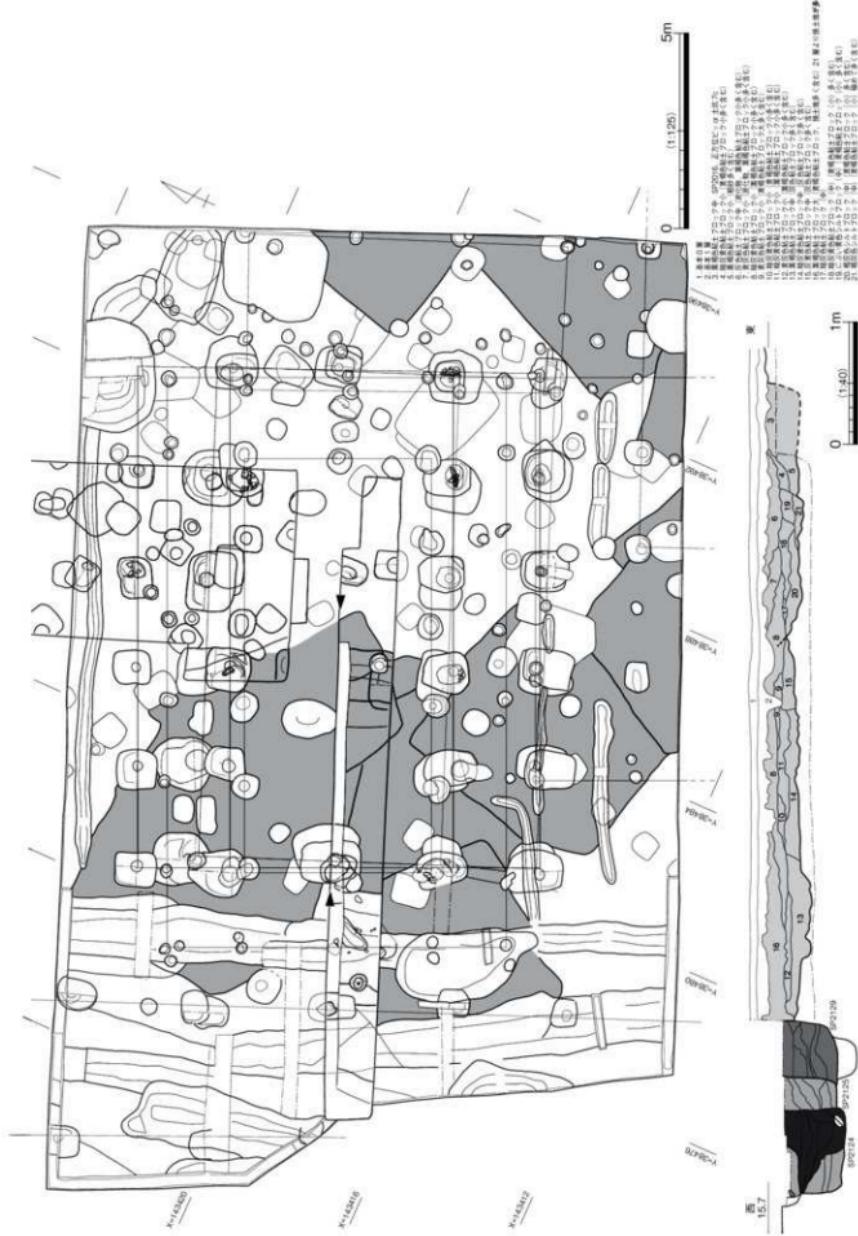


図 221 33-2T1・SB2025-2026 平面図及び出土遺物

図 222 33-2Tr 穹穴建物平断面図



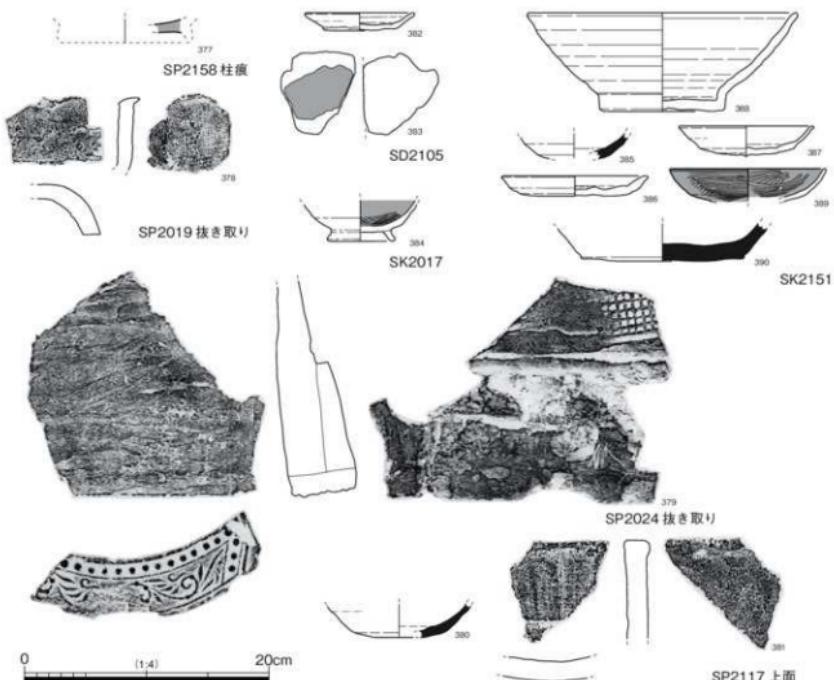


図 223 33-2Tr 柱穴ほか出土遺物

SD2104 (図 224 ~ 226)

33-2 トレンチ西部で検出した南北溝である。整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁 3 層・西壁 10 層・南壁 4 層）上面で検出し、SD2115、SB2024 を切り、SK2103 に切られる。上面幅 0.8 m、深さ 0.15 m の規模を測り、断面形は緩い U 字形を呈する。SD2107、2115 等の本調査区西部に集中する南北溝のうち、層位・出土遺物からみて最も後出するものである。

土師質器台付皿（391）は 12 世紀代の資料と考えられる。393 は中空の円環状の不明青銅器盤で、表面は銅地のままである。

SD2106 (図 224 ~ 226)

33-2 トレンチ西端で検出した南北方向の溝である。SD2187、2107、SA2206 を切り、SK2102 に切られる。上面幅 1.2 ~ 1.5 m、深さ 0.1 ~ 0.15 m を測り、緩やかに落ち込む断面形をもつ。前述のとおり、灰色シルトの偽縞や小縞をやや多く含み整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁 3 層・西壁 10 層・南壁 4 層）下面で検出したが、同層により埋没している。SD2107、2115 等と同様に、微高地を南北に区画する機能が考えられる。

394 ~ 408 は出土遺物である。これらのうち、399 ~ 408 については本溝埋没と同時に敷設された淡灰色・灰白色シルトからの出土遺物である。

埋土からの出土遺物は、行基式丸瓦（394、395）、平瓦（396 ~ 398）以外に、図化可能な土器片はみられない。

淡灰色・灰白色シルトからの出土遺物（399 ~ 408）のうち、須恵器蓋（399）、同杯（400）、同皿（401）については、9 世紀前葉から後葉の資料と考えられる。畿内系土師器杯（402）は 7 世紀末から 8 世紀初頭、同皿（405）は 8 世紀

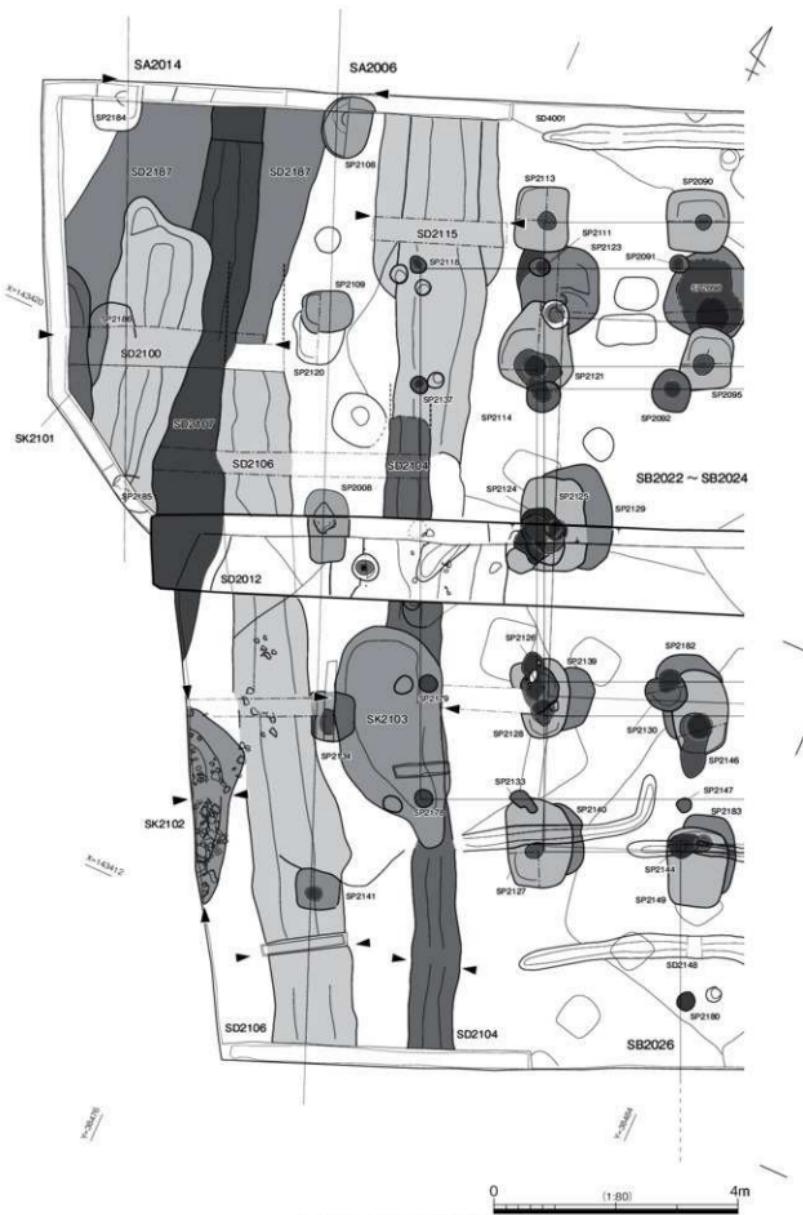


図 224 33-2Tr 西端部溝群平面図

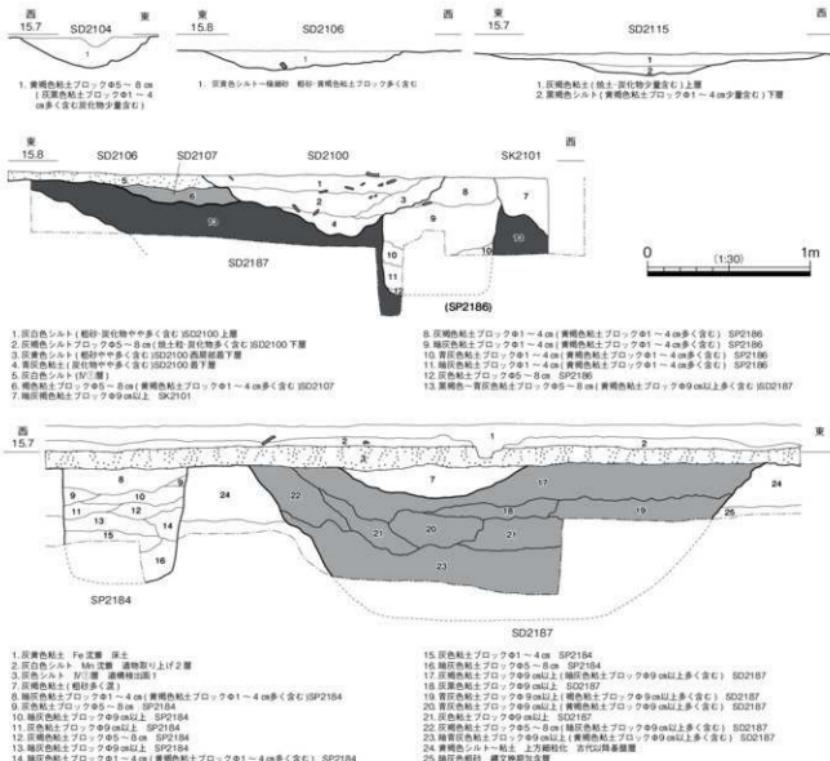


図 225 33-2Tr 西端部溝群断面図

中葉とみられる。土師質土器杯（403, 404）は10世紀前葉と考えられる。

淡灰色・灰白色シルトからの出土遺物の年代観より、本溝は10世紀前半に埋め戻されたと考えられる。東側に位置する大型建物（SB2022, 2023, 2024）との時間的な関係は、SB2023の一時期と同時併存し、本溝埋没と整地土（淡灰色・灰白色シルト）付設後にSB2024が造営されたと考えられる。

SD2107（図 224 ~ 226）

33-2 トレンチ西部の南北溝である。整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁3層・西壁10層・南壁4層）下面で検出し、SD2187, SA2207を切り、SD2106, 2100に切られる。SD2106, 2115等とともに、微高地1の開法寺伽藍東側を南北に区画する溝群の一つである。上面幅1~1.2m、深さ0.1~0.15mの規模を測り、埋土に褐色・黄褐色粘土の偽縫を多く含む。

409, 410は出土遺物である。須恵器杯（409）は8~9世紀の資料とみられるが詳細な時期決定に耐えられるものではない。

ここではSA2014・SD2106との切り合い関係から推定して、本溝は9世紀代に機能したものと考えておく。東側に位置する大型建物（SB2022, 2023, 2024）との時間的な関係は、SB2022・2023の一時期と同時併存し、本溝埋没にSD2106が掘開され機能が引き継がれたと考える。

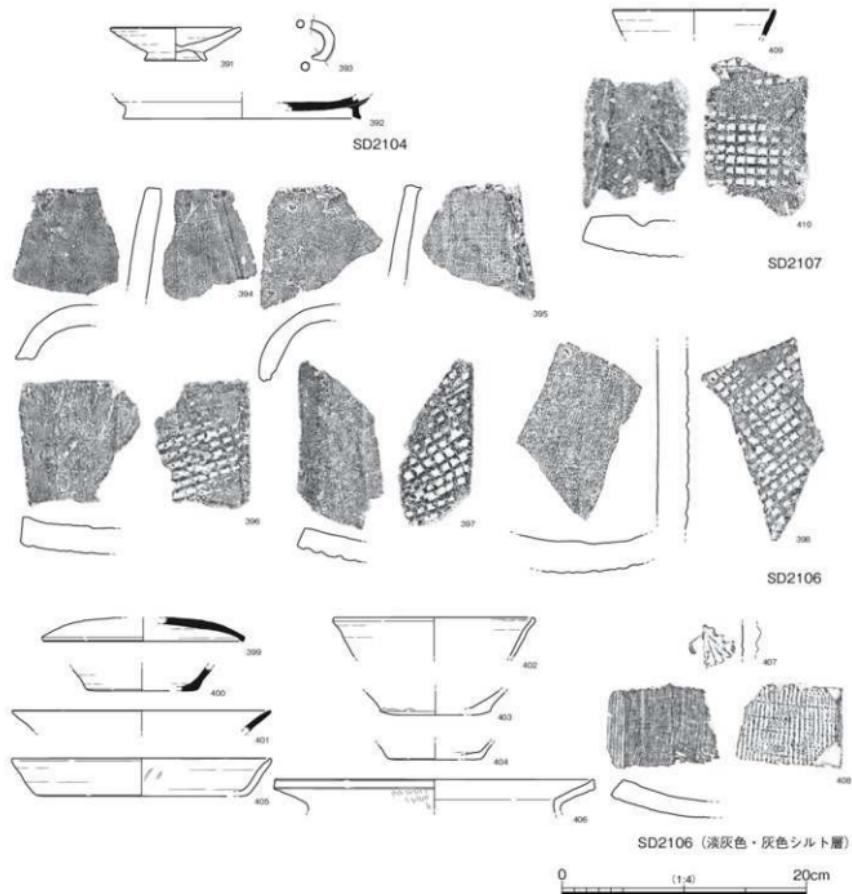


図 226 33-2Tr・SD2104.2106 ほか出土遺物

SD2100 (図 224.227.228)

33-2 トレンチ西部で検出した南北溝である。整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁3層・西壁10層、南壁4層）上面で検出し、SD2107.2107、SA2014を切り、SK2101に切られる。上面幅1.5m、深さ0.35mを測り、立ち上がりに小規模なテラス面をもっている。埋土は概ね4単位に細分されるが、いずれも灰色系の偽織や焼土・炭化物を含むことで共通しており、一括して埋め戻されたと考えられる。

埋土には、全体的に土師質土器を中心とした遺物が含まれている。遺物は上・下・最下層に区分して取り上げたが、前述した埋没状況を踏まえると、これらは一括廃棄されたものと考えられる。

411～444は下層として取り上げた一群である。土師質土器杯（424）の見込みには、タール状の物質が付着しており、灯明皿として転用されたものと考えられる。434は須恵器蓋の内面を利用した転用鏡である。軒平瓦（438）は型式不明。

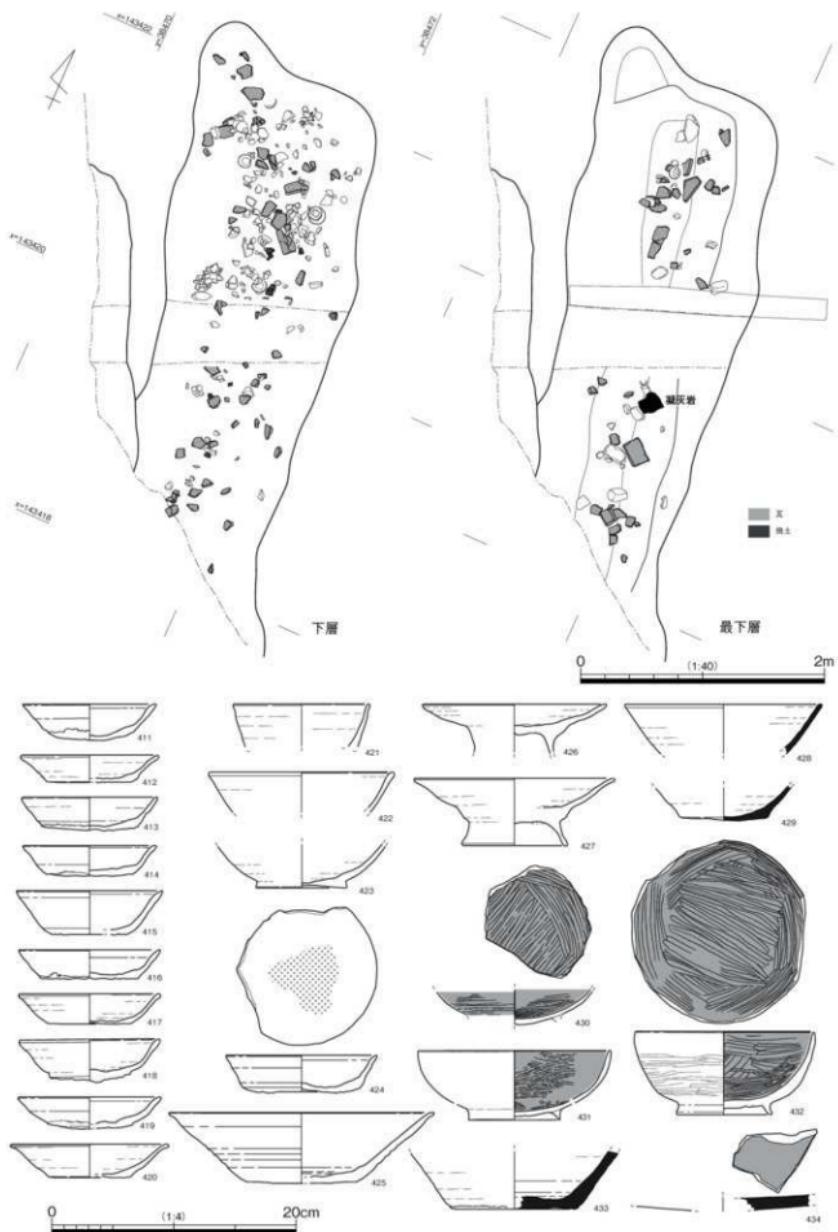


図 227 33-2Tr・SD2100 遺物出土状況及び下層出土遺物 1

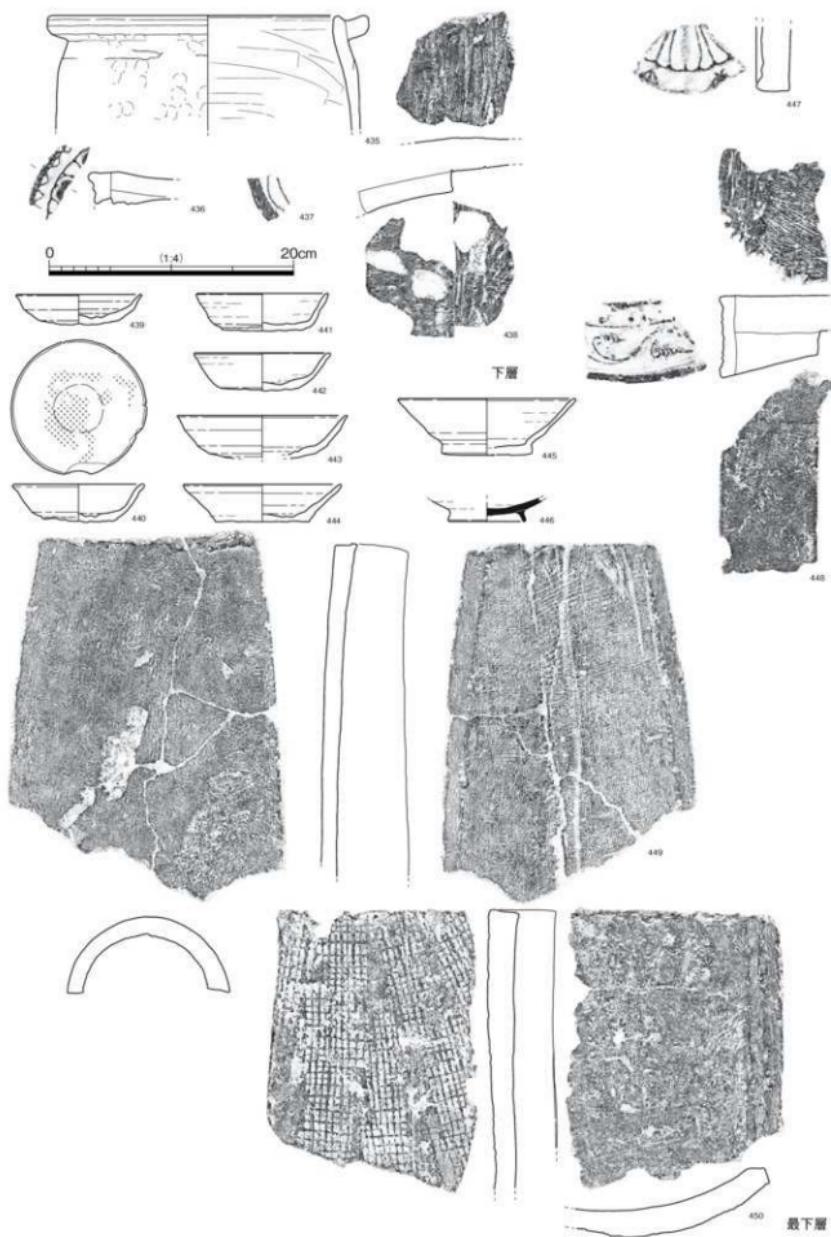


図 228 33-2Tr・SD2100 下層出土遺物 2. 最下層出土遺物

445～450は最下層として取り上げた一群である。軒丸瓦（447）は弁区文様がKH106型式に似るが、周縁の鋸歯文が異なるため、型式不明となる。軒平瓦（448）はKH203型式であり、開法寺で確認されているものである。本遺構の瓦出土量は破片数113点（丸瓦44点（39%）、平瓦69点（61%）、総重量34,156g（丸瓦11,433g（33%）、平瓦22,723g（67%））を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと繩叩きの比率は破片数では42%：58%、重量比では53%：46%となる。

これら出土遺物の年代観より、本溝は11世紀前葉に廃絶（埋め戻し）したと考えておきたい。

SD2115（図224.225）

33-2トレーナー西端で検出した南北溝である。整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁3層・西壁10層、南壁4層）下面で検出し、7世紀中葉の堅穴建物を切り、SB2044、SD2104に切られる。上面幅1.2～2m、深さ0.1～0.15mを測り、断面は緩やかに2段に落ち込む。33-2トレーナー中央から条里地割の方位で北に延び、31次調査31-1トレーナーのSD1001に接続すると考えられる。時期決定可能な出土遺物はみられなかったが、層位関係や31次調査の所見からみて、8世紀初頭までに開削され、8世紀中葉まで維持したと考えられ、本調査区西部の条里方位の南北溝群の中では最も古く位置付けられる。

東側に位置する大型建物（SB2022、2023、2024）との時間的な関係は、SB2022の一時期と同時併存すると考えるが、西侧に並走するSA2206との詳細関係は不明とせざるを得ない。東側に位置する大型建物（SB2022、2023、2024）との時間的な関係は、SB2024と同時併存するものと考える。

SK2001（図229～234）

33-2トレーナー東端で検出した大型土坑である。平面規模は、長軸2.6m、短軸2.2mの不定形を呈し、検出面からの深さは0.25mを測る。埋土は褐灰色粘土の単一層であり、灰褐色シルトの偽礫、焼土・炭化物、土器・瓦を多く含んでいる。

遺物は上・下層に区分して取り上げているが、埋土の状況からみて層位的には区分することはできず、一括廃棄された資料であることには相違ない。

451～461は上層として取り上げた一群である。丸瓦（461）は側縁に焼成前の湾曲する切り落としがみられ、面戸瓦の可能性がある。

462～476は下層出土遺物である。平瓦（473～476）は、打ち欠きが目立つもので、隅切瓦の可能性がある。本遺構の瓦出土量は破片数53点（丸瓦21点（40%）、平瓦32点（60%）、総重量33,274g（丸瓦10,237g（31%）、平瓦23,037g（69%））を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと繩叩きの比率は破片数では14%：86%、重量比では17%：83%となる。

これら出土遺物の年代観から、本土坑は10世紀中葉～後葉に形成されたと考えられる。要因については、焼土・炭化物が多く含まれることからみて、火災等の塵芥処理に伴い形成されたと考えられる。

SK2002（図235）

33-2トレーナー北東隅で検出した土坑である。平面規模は、長軸2.4m以上、短軸1.5mの楕円形を呈し、残存深度は0.2mを測る。埋土は黒灰色粘土の単層であり、黄褐色シルトの偽礫及び焼土・炭化物を少量含んでいる。

477～483は出土遺物である。須恵器杯（477）、同皿（478）は8世紀初頭から前葉の資料と考えられる。須恵器把手（479）の外側には、ヘラ描きによる文様が認められる。碇等の部品の可能性がある。軒丸瓦（480）はKH106型式、鉄器（483）は鉋具の可能性がある。481、482は白色凝灰岩片である。

出土遺物のうち、時期比定に有意な須恵器は8世紀初頭から前葉の年代を示しているが、埋土が隣接するSK2001とよく似るため、本土坑は10世紀中葉～後葉に形成されたものと考えておく。

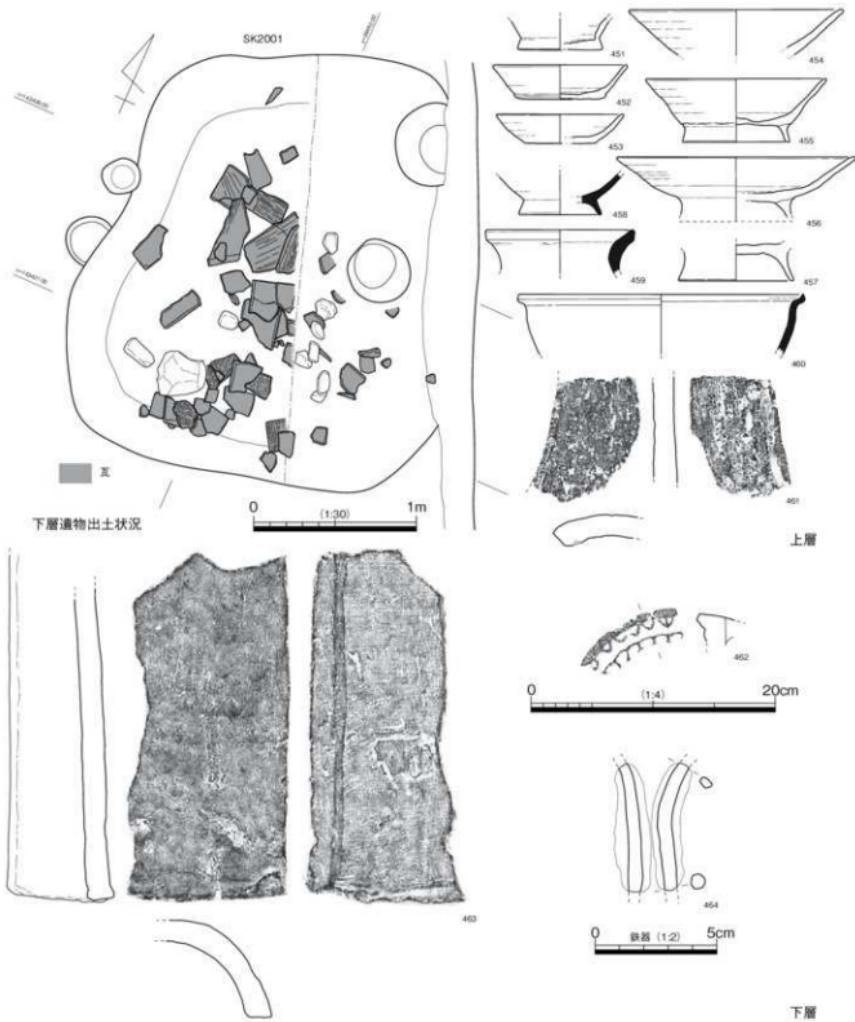
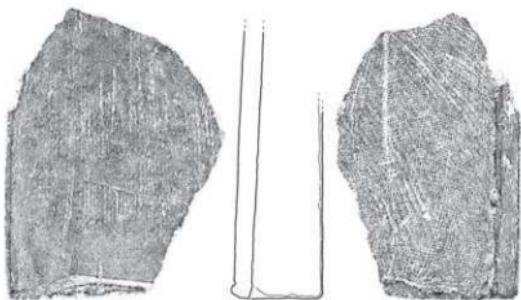


図229 33-2Tr・SK2001 下層遺物出土状況及び上層・下層出土遺物 1

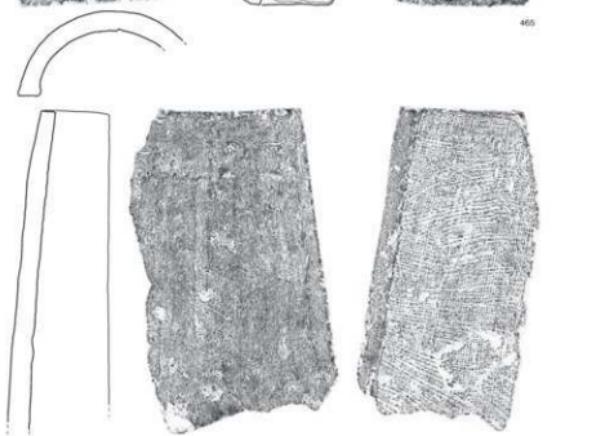
SK2102 (図224.236)

33-2 トレンチ西端で検出された構造である。整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁3層・西壁10層、南壁4層）上面で検出し、SD2106を切る。平面規模は、長軸3.2m、短軸0.9m以上を測る。緩やかに落ち込む断面形をもち、大半が調査区外となるため溝である可能性も考えられる。

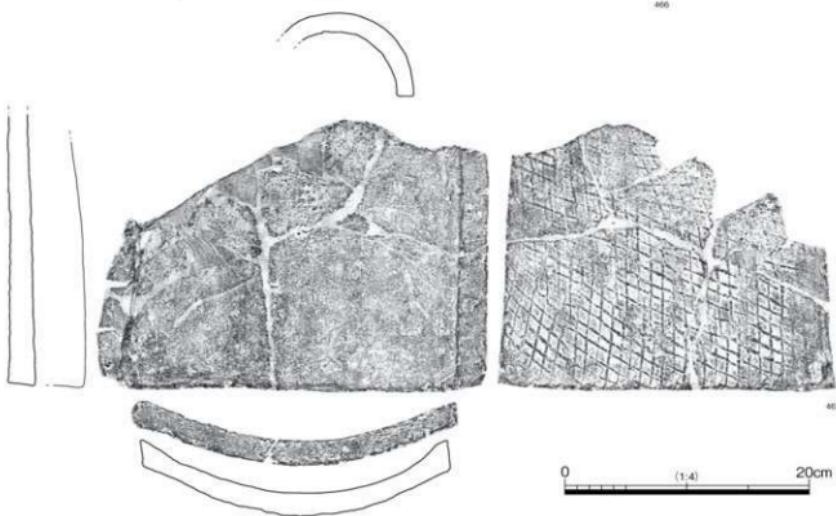
埋土は、黒褐色粘土を主体としており、層内に瓦を中心とした遺物が多く含まれる。出土遺物のうち、時期決定に有効な土師質土器を中心に図化した。土師質土器台付杯（484.485）の年代観より、本遺構は11世紀前葉に埋没したと考える。



465



466



467

0 (1:4) 20cm

図 230 33-2Tr・SK2001 下層出土遺物 2

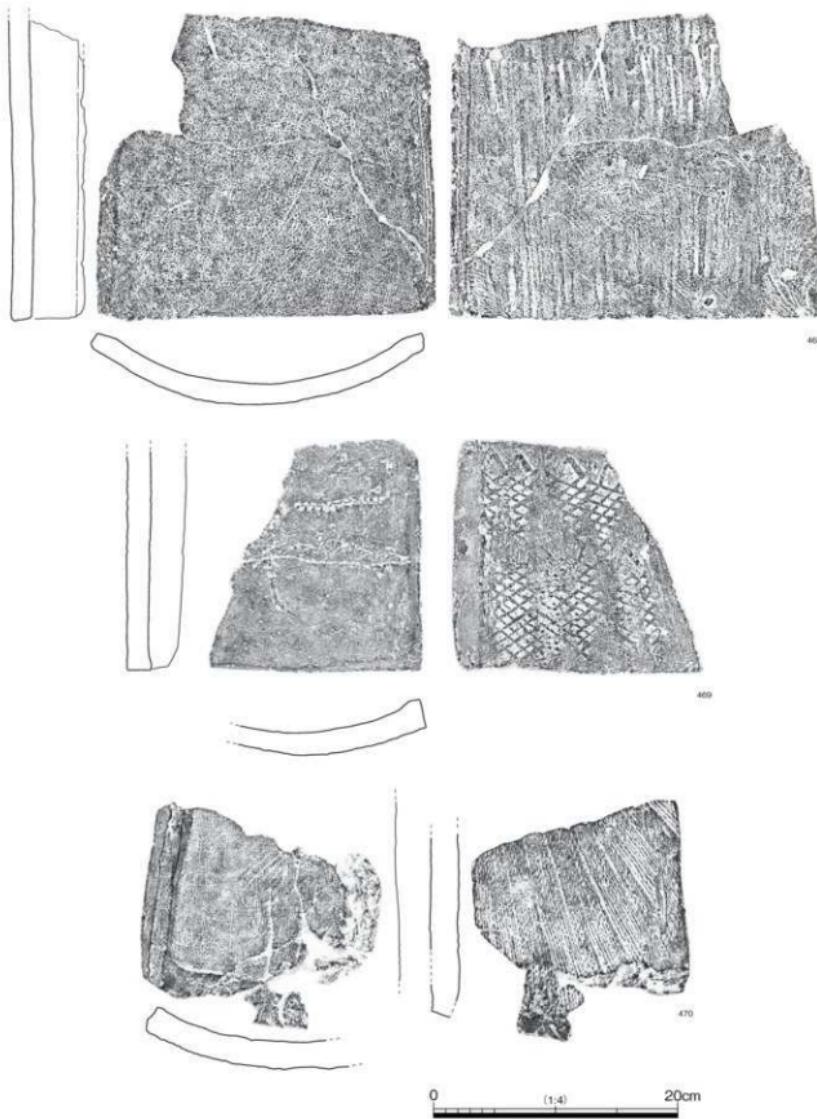
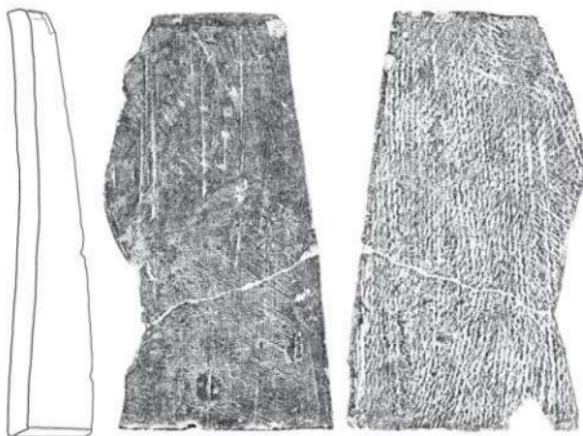
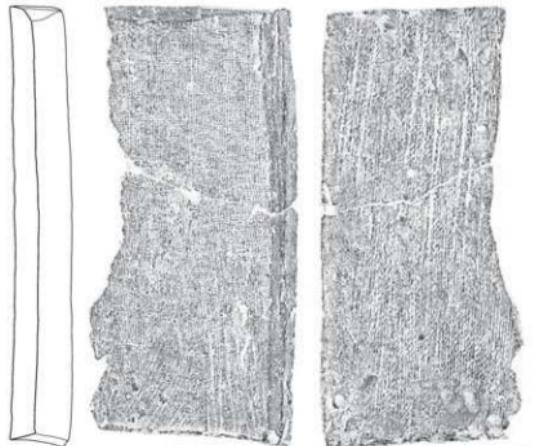


図 231 33-2Tr・SK2001 下層出土遺物 3



471



472

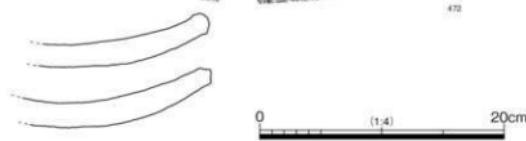
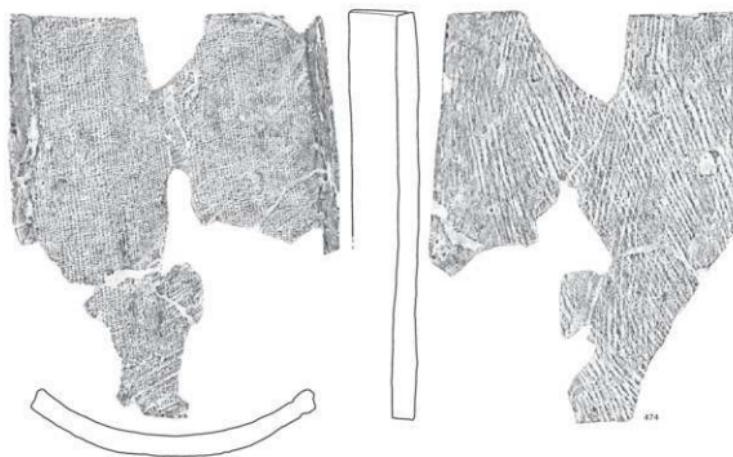
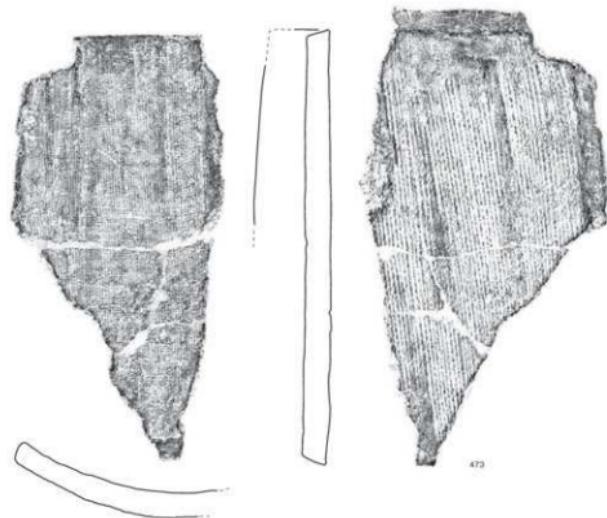


図 232 33-2Tr・SK2001 下層出土遺物 4



0 (1:4) 20cm

図 233 33-2Tr・SK2001 下層出土遺物 5

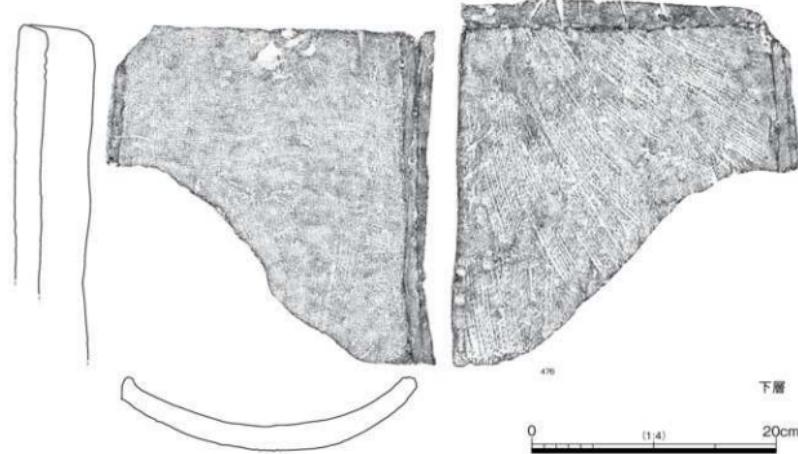
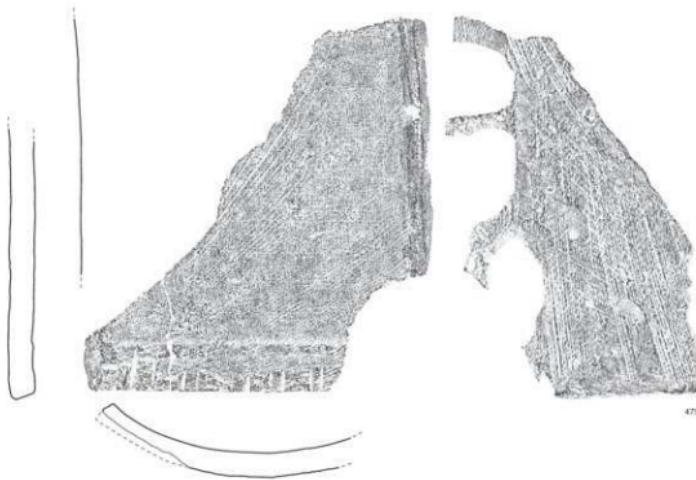


図 234 33-2Tr・SK2001 下層出土遺物 6

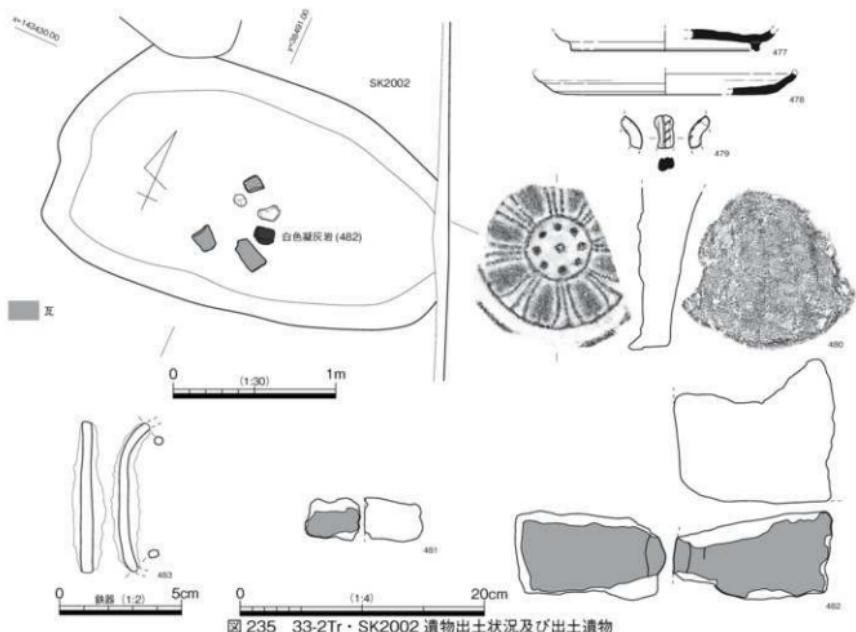


図 235 33-2Tr・SK2002 遺物出土状況及び出土遺物

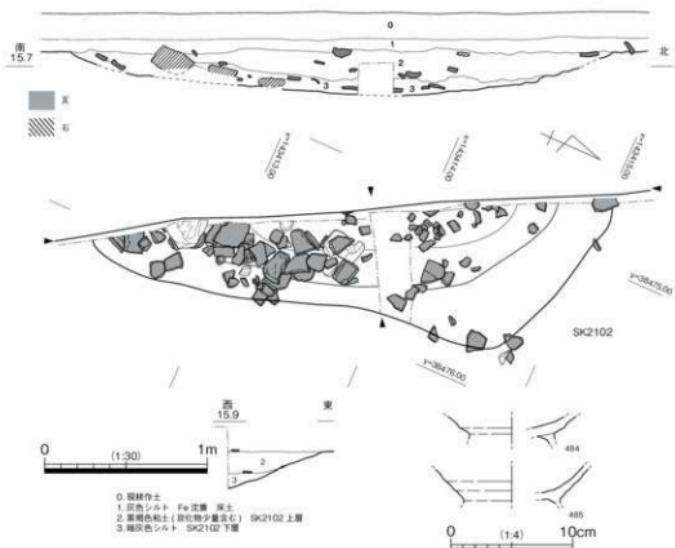


図 236 33-2Tr・SK2102 遺物出土状況及び出土遺物

SK2103 (図 224.237 ~ 239)

33-2 トレンチ西部で検出した大型土坑である。整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁3層・西壁10層、南壁4層）上面で検出し、SB2024、SD2104を切り込む。平面規模は、長軸3.6m、短軸1.7mを測る不定形を呈する。検出面からの深さは0.15mで、中央に向かって緩やかに落ち込む。埋土は暗灰色粘土の偽礫を主体に埋没しており、埋め戻された可能性が高い。また、中央部を中心として、土器、瓦、不明石材が多量に廃棄されていた。

486~513は出土遺物である。須恵器杯（498）は外底面に糸切りが確認されるため、搬入品と考えられる。軒丸瓦（507）は型式不明、同（508）はKH105型式であり開法寺を中心に知られている資料である。511.512は白色凝灰岩片。本遺構の瓦の出土量は破片数82点（丸瓦27点（33%）、平瓦55点（67%））、総重量46,799g（丸瓦13,863g（30%）、平瓦32,936g（70%））を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では41% : 59%だが、重量比では38% : 62%となる。

これら出土遺物の年代観より、本遺構は12世紀に形成されたものと考える。

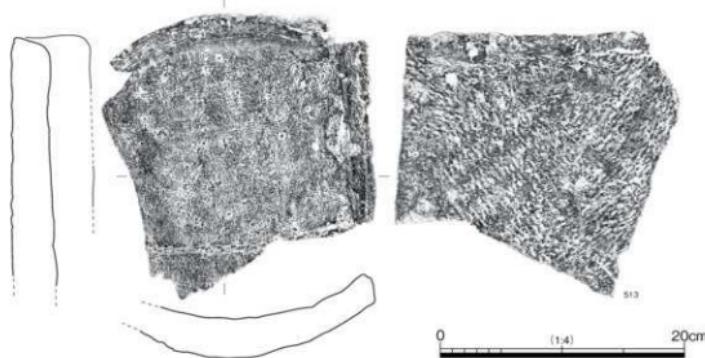


図239 33-2Tr・SK2103 出土遺物3

SE2003 (図 240 ~ 243)

33-2 トレンチ北東隅で検出した井戸である。北肩が未検出であるが、平面規模は径3mのやや歪な円形を呈する。断ち割りは検出面から深さ1.5mまで実施したが、湧水が激しく底面を確認していない。また、井戸側についても検出できていないが、下位において黄褐色粘土の偽礫（12層）が壁面に張り付いた状態でみられることから、これを井戸側の固定の裏込土と考える。井戸側は抜き取られたのであろう。

裏込土以外の埋土は、数単位に区分できるが、いずれも偽礫が多く含むことで共通しており、廃絶時には一括して埋め戻されたと考えられる。

遺物は、裏込土・下層・上層に区分して行った。514~518は、井戸側裏込土より内側で最下層として取り上げた一群である。519~521は井戸側裏込土からの出土遺物である。黒色土器碗（519）はやや深手であり、11世紀末から12世紀の資料と考えられる。

522~553は上層出土資料である。縁釉陶器托（522）は近江産の10世紀中葉から後葉の年代が想定される。

これらの出土遺物の年代観より、本遺構は11世紀末から12世紀初頭に形成され、12世紀前半に廃絶したと考えておきたい。

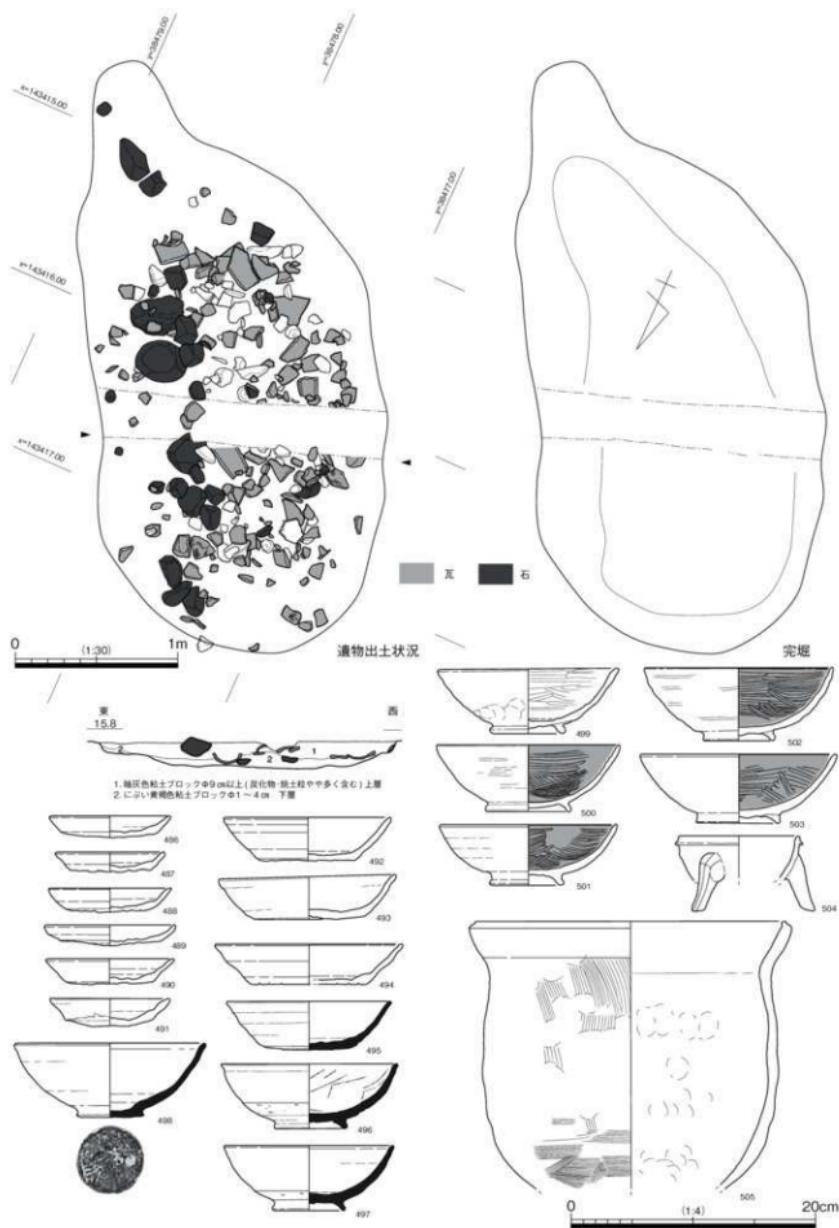


図237 33-2Tr・SK2103 遺物出土状況・平面図及び出土遺物 1

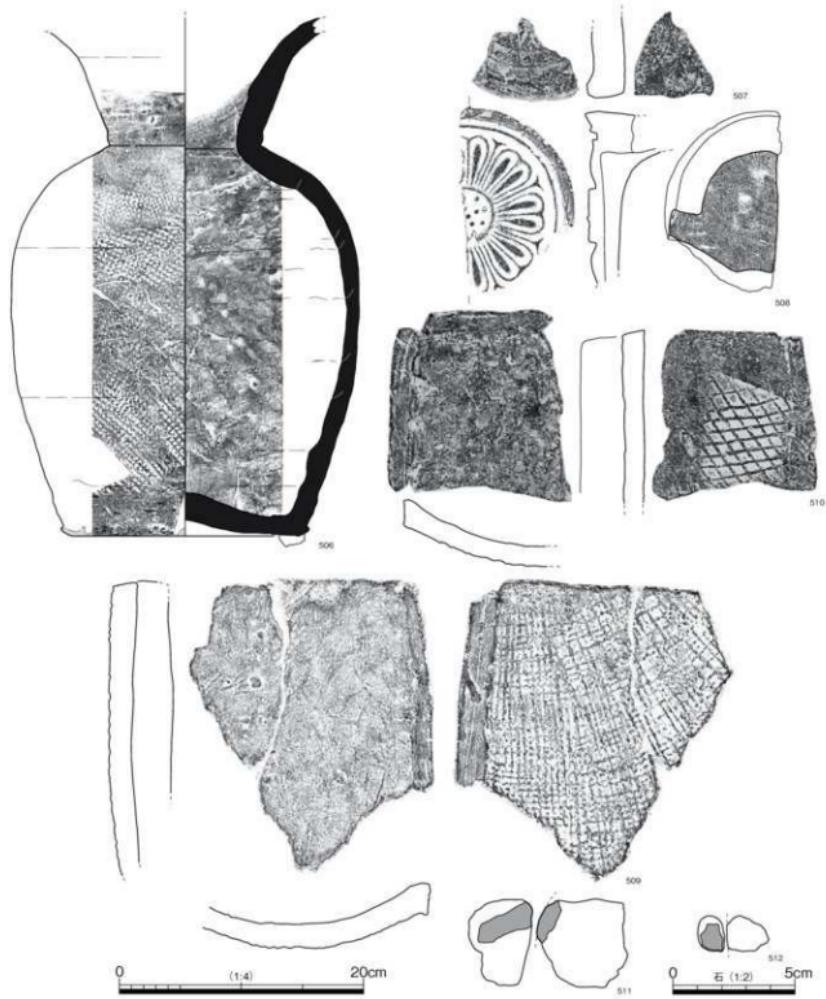


图 238 33-2Tr · SK2103 出土遗物 2

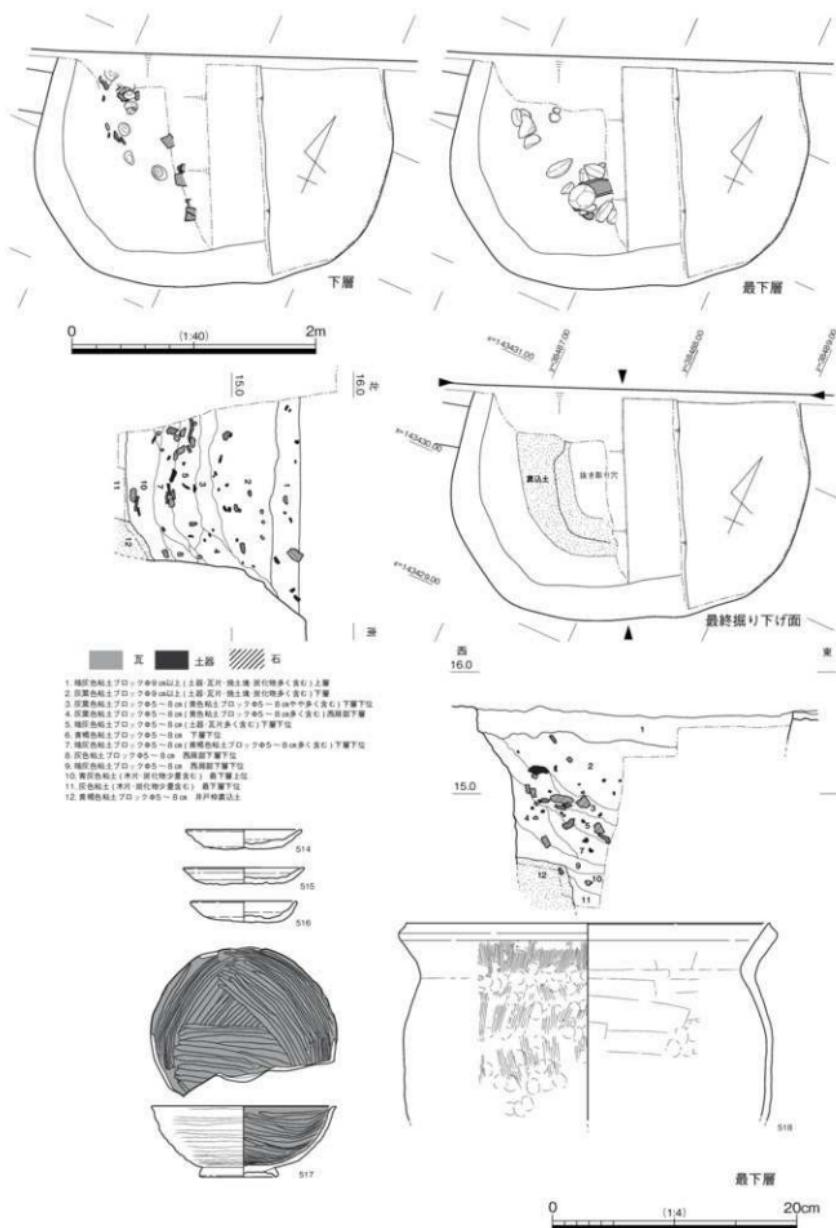
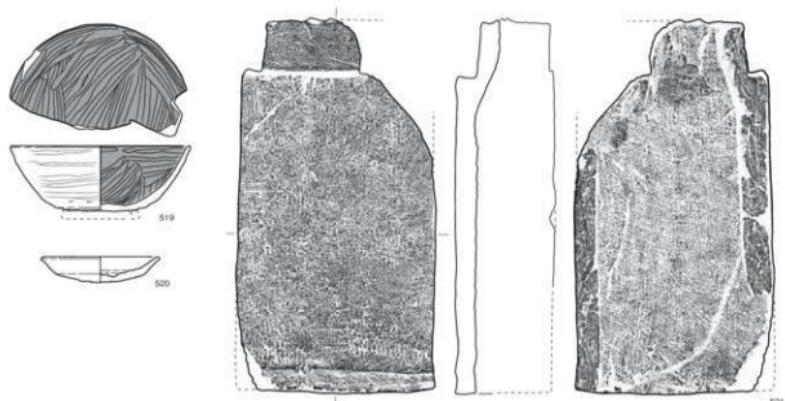
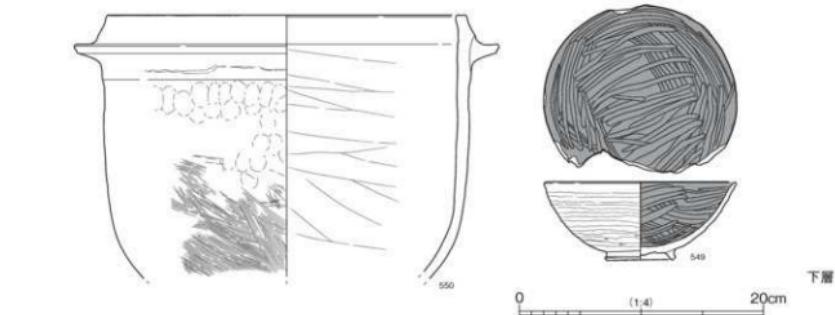
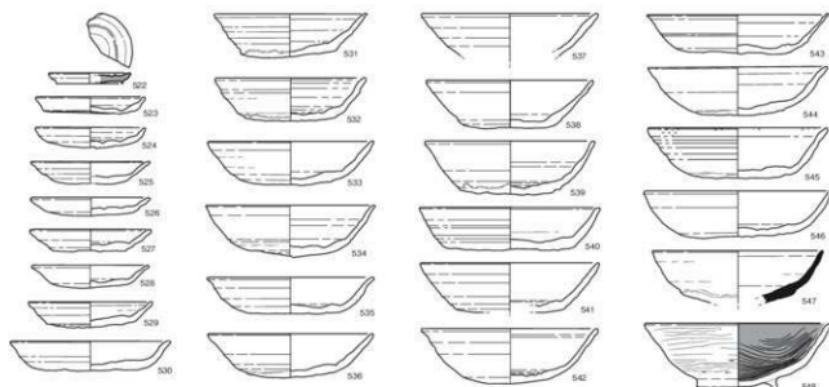


図 240 33-2Tr · SE2003 最下層出土遺物

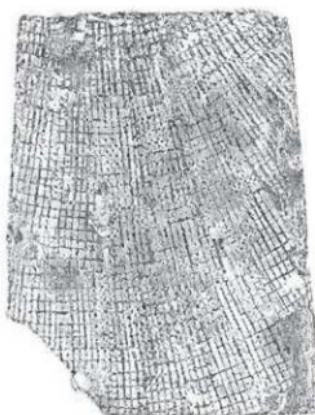


裏込土

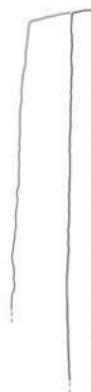


下層

図 241 33-2Tr・SE2003 裏込土. 下層出土遺物 1



552



553



図 242 33-2Tr・SE2003 下層出土遺物 2

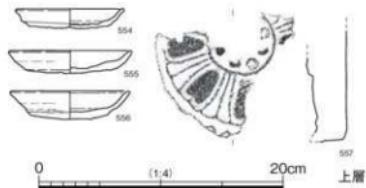


図 243 33-2Tr · SE2003 上層出土遺物

(4) 小結

今年度調査では 33-1・33-2 トレンチのほぼ全域で建物遺構を確認した。33-1 トレンチでは昨年度の 32 次調査 32-1 トレンチ SB2011 の西側部分の調査を実施した結果、梁間 3 間、桁行 3 間の南北棟の建物となることが明らかになり、東西棟とした当初の想定と異なった結果を得た。

33-2 トレンチでは、31 次調査 31-1 トレンチの SB2022, 2023, 2024 を拡張する形で調査を実施した。その結果、SB2022, 2023, 2024 はいずれも東西棟であり、建物主軸線・位置を踏襲して建替えられたことが想定できる。層位関係や出土資料から、SB2022 が 8 世紀前葉を上限とする時期に造営されたのち、9 世紀から 10 世紀前葉の SB2023, 10 世紀前葉から 11 世紀後葉の SB2024 へと大型建物が継続する。

廟を含めた総面積が 100 m²を超えた大型建物が、約 400 年間にわたり同一地点で建て替えられたことになる。各段階の廟の面数は異なるが、この時代の同規模の廟付建物は讃岐国分寺などを中心に数例知られているのみであり、かなりの格式をもった建物と推定することができるが、讃岐国府における具体的な性格やこれまでの調査で確認している周辺の建物群との関係については今後の調査・検討が必要である。